

第43回少年の主張全国大会

— わたしの主張 2021 —

報告書

伝えよう。
わたしの想いを言葉にのせて



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

はじめに

第43回少年の主張全国大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、令和3年11月1日～11月30日までの期間、WEBページに主張発表動画を掲載して開催し、開催の様子は佳子内親王殿下にもご視聴いただきました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和54（1979）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいの思いも込め、毎年実施されています。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも全国3,741校の中学校から、約40万人の中学生が応募してくれました。

そして、全国大会では、各都道府県大会により選抜された47名の中から、有識者や過年度大会受賞者等で構成される審査委員会により選ばれた12名の中学生が、それぞれの思いや決意を発表しました。

内閣総理大臣賞を受賞した岐阜県代表の細川 士禾（ほそかわ とわ）さんは、「認め合うことの大切さ」と題し、生まれつき片腕のない妹とのこれまでの生活から、違いを認識して受け入れることの大切さを学び、差別のない社会があると信じて、目を背けずに相手の気持ちを考えながら行動し続けていくことを主張しました。

文部科学大臣賞を受賞した山梨県代表の平澤 朋佳（ひらさわ ほのか）さんは、「心のマスク」をはずして」と題し、マスクをつけることが日常となったことで起こったミスコミュニケーションを経験し、プロフィールと顔写真を掲示する活動を実践することで、コミュニケーションの質を高めることができたことを主張しました。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した群馬県代表の富田 樹香（とみた じゅか）さんは、「本物の輝き」と題し、本物を知ることの魅力、バーチャルな世界の可能性が広がる中で本物の価値が薄れていくように感じ、人生を豊かなものにするために手間や時間をかけて本物を訪ねる旅を続けたいことを主張しました。

このほかにも、別室に登校している友達が教室に入ることができるようになるにはどうすればよいかを考え行動していくという決意の主張や、生まれつき左手にハンディキャップを抱えているが幼稚園の先生をはじめ多くの人にサポートしてもらうことで挑戦し続けることができたという主張など、今大会も多種多様な発表が見られました。

この報告書では、全国大会で発表された12作品をはじめ、各都道府県の代表となられた47作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい澁刺とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募してくださった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、ご後援、ご協力を賜りました内閣府、宮内庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和4年 1月
国立青少年教育振興機構
理事長 古川 和



もくじ

お祝いの言葉	1
審査委員長講評	2
少年の主張都道府県大会風景	3
少年の主張全国大会出場者の発表作品	4
＜内閣総理大臣賞 岐阜県代表 細川 士禾さん＞	5
＜文部科学大臣賞 山梨県代表 平澤 朋佳さん＞	6
＜国立青少年教育振興機構理事長賞 群馬県代表 富田 樹香さん＞	7
＜審査委員会委員長賞 熊本県代表 葛谷 護さん＞	8
＜審査委員会委員長賞 沖縄県代表 砂川 恵里香さん＞	9
＜国立青少年教育振興機構奨励賞＞	10
少年の主張全国大会努力賞受賞作品	17
実施概要	53
審査委員の感想	57
少年の主張全国大会を振り返って＜参考資料＞	63
第44回少年の主張全国大会 開催のお知らせ	73

お祝いの言葉



「第43回少年の主張全国大会～わたしの主張2021～」が開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

本大会は、次代を担う全国の中学生たちが、学校生活や日常生活の中で考えたことや伝えたい思いなどを発表する場として、国立青少年教育振興機構の主催により、今回で43回目を迎えることができました。

新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、昨年度に続き、「第43回少年の主張全国大会 Web 開催特設ページ」で代表者12名の動画を公開し、優秀者を決定する方式となりました。

今回、代表12名の皆さんの発表は、コロナ禍で起きた日常の変化、家族や友人との関わりなどをきっかけに、疑問に思ったり悩んだりしたことへの、自分なりの答えとして表現したものであり、心こもったすばらしい内容でした。中学生たちの思いが、きっと多くの皆様の胸に伝わるものと思います。

また、今回惜しくも代表に入らなかった皆さんの発表も、すばらしい作品ばかりであったと聞いています。皆さんの一層の御活躍を期待しています。

最後に、応募者の皆さんと、その御指導に当たってくださった教職員の皆様、また、応援してくださっている御家族の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

本大会が、我が国の未来を担う子供たちの健やかな成長につながることを願っています。

ぜひ、特設ページを御覧いただいている皆様方には、中学生たちの発表を視聴いただき、彼らの熱い思いに触れてください。

令和3年 11月1日
文部科学大臣 末松 信介

審査委員長講評



コロナを言い訳にせず、社会と時代を見つめる

時代がみえる・・・毎年皆さんの主張を伺っていると、その時々社会や世界の情勢を敏感に感じ取り、それを背景とした深い考察を行っていることに感心します。

東日本大震災はじめ地震や台風など悲惨な災害に襲われた時には、真正面から向き合い、人間という弱くも逞しい生物として如何に生きるかを訴える。国際的な緊張が高まったり、ナショナリズムが思わしくない方向に流れたりした時には、危機や差別を恐れず、逃げずに立ち向かう。自分に降りかかった様々な肉体的精神的環境にしても、明るく前向きに対処してしまう。

無限の可能性と若いエネルギーを存分に活かして日々を紡いでいる様子には本当に感動します。その意味で今年は、長引くコロナ禍の下、部活動もできず修学旅行にも行かれず窮屈な学校生活の中で悩み多き青春を考える作品が多いかと、漠然と想像していました。

ところが。

事前の予想は良い意味で裏切られました。既に中学生の皆さんはコロナを乗り越えていたので。コロナを言い訳にしない、と言った方がいいかもしれません。大人がまだズルズルと引きずっている問題を超越し、既に次のステージに進んでいました。

コロナであってもなくても普遍的な、人間の抱える壮大なテーマを地球規模で眺め、足元から考える姿勢です。SDGsの精神を田んぼでの作業から気づいたり、大切な思い出の詰まったランドセルを紛争地帯に送って異国の子供たちの夢の実現に寄与したり、少子高齢化の中で如何に伝統を継承するか工夫したり。ジェンダーに関する悩みを率直に語れる勇気も時代の風を感じさせられるものでした。想定外の事態に見舞われたら想定外の行動でプラスに転じてしまおうという逆転の発想も見事です。

そして。サイバー空間の比重が次第に高まっている中、本物の大切さを訴え、そのために現地に足を運ぶ。スマホの中に閉じこもらない。自分の痛みとして受け止める。マスクでコミュニケーションに困難が生じたら、自己紹介データで相互理解を促進する。思っただけで終わらずに行動まで移す実行力は高く評価されるものです。

見て見ぬふりをするのではなく、違いを見つめてよく考えるところから理解が始まるという主張も、なかなかできることではない実行力です。そうした素晴らしい個性と感性の粋を集めた発表が並び、心を揺さぶられました。

もうひとつ。皆さんの思いを実現する後押しに身近な大人が存在してくれる幸せを、皆さん自身が自覚しているところも感動するものです。母の一言や前向きの姿勢に触発されたり、縄跳びの工夫をしてくれる幼稚園の先生がいらっしたり。そう、皆さんは一人ではないのです。そんな思いを全国から40万人の中学生の方々が寄せてくださいました。ホームページに載せられる人数は限られているかもしれませんが、是非、多くの皆さんに触れていただき、思いを共有していただけたらと願っています。

素晴らしい主張を寄せてくださった皆さまに心より感謝します。

ありがとう。

第43回少年の主張全国大会 審査委員長
宮崎 緑 (千葉商科大学・国際教養学部教授)

少年の主張都道府県大会風景

東京都大会



東京都代表 坂口 礼佳さん



東京都大会 記念撮影の様子

愛知県大会



愛知県代表 大野 未結さん



愛知県大会 記念撮影の様子

兵庫県大会

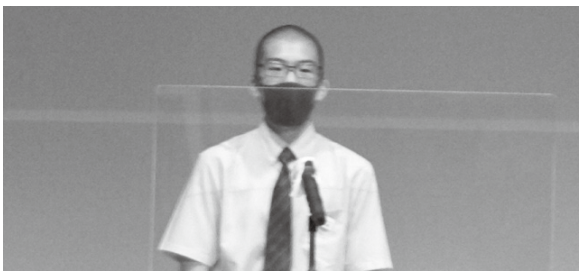


兵庫県代表 具 有 聖さん



兵庫県大会 記念撮影の様子

岡山県大会



岡山県代表 中本 湊介さん



岡山県大会 記念撮影の様子

鹿児島県大会



鹿児島県代表 宮脇 大果さん



鹿児島県大会 記念撮影の様子

少年の主張全国大会出場者の発表作品

- 誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
- 全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

内閣総理大臣賞

【中部・近畿ブロック】

岐阜県 養老町立高田中学校 3年
細川 士禾 『認め合うことの大切さ』

文部科学大臣賞

【関東・甲信越静岡ブロック】

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年
平澤 朋佳 『「心のマスク」をはずして』

国立青少年教育振興機構理事長賞

【関東・甲信越静岡ブロック】

群馬県 太田市立南中学校 3年
富田 樹香 『本物の輝き』

審査委員会委員長賞

【九州ブロック】

熊本県 宇城市立松橋中学校 3年
葛谷 護 『教室』

【九州ブロック】

沖縄県 宮古島市立久松中学校 1年
砂川 恵里香 『私の挑戦』

国立青少年教育振興機構奨励賞

【北海道・東北ブロック】

宮城県 大郷町立大郷中学校 3年
山内 莉羅 『私と僕と、そして「自分」』

【北海道・東北ブロック】

山形県 小国町立叶水中学校 3年
野崎 さよ子 『一步踏み出す』

【関東・甲信越静岡ブロック】

千葉県 千葉市立更科中学校 3年
菊地 大和 『自分の足元は』

【中部・近畿ブロック】

滋賀県 滋賀大学教育学部附属中学校 3年
寺田 愛 『自分の考えに対する意識』

【中部・近畿ブロック】

京都府 京都光華 中学校 3年
林 紗花 『スマホ人間』

【中国・四国ブロック】

島根県 安来市立伯太中学校 1年
柗瀬 真心 『思い出のランドセル』

【中国・四国ブロック】

広島県 東広島市立志和中学校 3年
三好 百恵 『認め合うことの本質』



内閣総理大臣賞受賞

認め合うことの大切さ

岐阜県 養老町立高田中学校 3年

細川 士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。

僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさんの辛い思いをしてきました。

—「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいかわからないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうか。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうか。

きっと、「見てしまう」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きっと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」＝「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをすること、そして、何もしようとしなないこと、これこそが、大きな問題だと、僕は思うのです。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しまよんととして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷つくことはなかったのかもしれない。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立ってなかったのかもしれない。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

この主張をどんな人に届けたいですか？

障がいに対して知識がある人、ない人も含め、みなさんに聞いてもらいたいです。今年、パラリンピックが開催され、たくさんの障がいをもった方が活躍していました。僕は一生懸命に競技に向き合う選手の姿に感動しました。きっと多くの人も障がいについて知る機会になったはず。僕の主張も障がいについて考えるきっかけになってくれればいいと思います。



文部科学大臣賞受賞

「心のマスク」をはずして

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年

平澤 朋佳

みなさん、マスクをつける日常へと変化したことで、今まで普通に行っていたコミュニケーションが上手いかず、誤解が生まれてしまったという経験はありませんか。このような、情報を伝えた人の意図と受け取った人の意図が異なってしまうことを「ミスコミュニケーション」というそうです。

私の友人は、仲間からの相談を受けていた時、相手から「今笑ったでしょう」と言われてしまいました。しかし友人は笑うつもりなんてもちろんありませんでした。なぜそのような誤解が生まれてしまったのでしょうか。その原因はマスクでした。お互いにマスクをしての会話だったので、表情を間違っていると知られてしまい、誤解へと発展してしまいました。まさにこれはマスクによる「ミスコミュニケーション」です。

今、社会ではマスクをつけることがモラルとして定着しています。感染拡大を防ぐ面ではこれはとても重要なことです。ですが私にはこのマスクが、まるで目に見える他人との境界線や壁のように感じてしまいます。

私も似たような経験をしました。小学校の頃の友人と偶然再会したときの出来事です。私は彼女との話が面白くて、笑いながら会話をしていたにも関わらず、彼女から冗談めいた口調で「顔が笑っていないよ。」と言われました。「そんなことないよ。話、面白いじゃん。」

私は驚いてそう返しました。私は心から面白いと思って笑っていたのですが、相手にはそれが伝わらず、マスクをしたままでのコミュニケーションの難しさを痛感したのです。

学校でも、マスクをつけていることで先輩や新入生の顔がよくわからないという声が多く聞かれます。それを受けて私の所属する生徒会では、全校生徒の交流で何かできないかと考えました。そこで「DATA120」という活動をしようと決めました。120とは全校生徒の人数です。全員に名前や趣味、最近の出来事などをプロフィールとして書いてもらい、マスクを外した状態での写真とともに掲示したのです。これによって、相手の趣味や考え方などを共有できたのはもちろん、「マスク姿も素敵だけど外した姿も可愛い」「イメージと違った顔をしているな」と、文字通り素顔を知ることができました。そして、学校にも柔らかい雰囲気と一体感が生まれたように感じました。

人と人との関係を紡いでいくには相手を理解することが重要であり、その手段の一つがコミュニケーションです。ですが、コロナウイルスによってマスク着用がマナーとなった今、顔の大半が隠れ表情がわかりにくくなったことで、コミュニケーションの質にも大きな変化が起こりました。それに伴い私たちは、よりはっきりとした感情の表現や相手の気持ちを理解しようとする心など、コミュニケーションの質を上げていく工夫が必要となってきているのではないのでしょうか。

「人生の質はコミュニケーションの質である。」

アメリカの自己啓発家であり、アメリカ大統領など数多くの著名人を指導したアンソニー・ロビンズの残した言葉です。

私たちの心からは、コロナウイルスは感染しません。学校に行ってもマスク、電車に乗ってもマスク、どこを見てもマスクマスクの社会でも、いや、だからこそ、私たちは「心のマスク」を外しコミュニケーションの質、そして人生の質を高めていくことができるはずで。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

コロナウイルスがまん延したことで、マスクという存在は生活を送る上で必要不可欠なものとなりました。ですが毎日マスクをつけるようになったことで顔の大半が隠れ、コミュニケーションの質に大きな変化が起こったのではないのでしょうか。表情や口の動きなど、言葉だけでなくコミュニケーションの情報が制限されたことで、受け取り方に差や誤解が生まれやすくなったように感じます。この変化に対応するために、私たちの心にも変化が必要だと考え、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

本物の輝き

群馬県 太田市立南中学校 3年

富田 樹香

みなさんは、日本一危険な国宝が何か知っていますか。それは、鳥取県の三徳山三佛寺にある『投入堂』というお堂です。断崖絶壁をくりぬいたような空間に、危なげにたたずむ不思議な投入堂。どうしてこんな所に建てられているのか。写真を見るだけでも興味をそそられるこの場所に、私は母に誘われて二〇一九年の五月に参拝してきました。

私が住んでいる群馬県から、遠く離れた鳥取県にある投入堂。夜行バスや電車、市バスなどを乗り継いで、やっとの思いで到着した入山口。私たちは「六根清浄」と書かれた襷を肩にかけ、神聖な山へと足を踏み入れました。その途端、五感が急に研ぎ澄まされたような不思議な感覚に襲われました。こんこんと湧き出る清水、どこからか聞こえる鳥のさえずり、湿った苔と土の匂い…。身体全体が、まるで自然と一体化したようでした。滑りやすい木の根や鎖を足場にして、命綱なしで登らなくてはならない険しい山道。自然に身をゆだねつつも、全身の筋肉を使って重力に逆らいながら歩みを進めました。

「あれだ！」

少し開けた景色の先に見えたのは、まさにあの写真にあった投入堂。雄大な自然に囲まれ、鎮座するお堂の威厳ある佇まいに私は息をのみ、ただただ「すごい…」という言葉を探り返すばかりでした。あの時の衝撃と感動は、今でも鮮明に覚えています。うまく言葉にすることはできません。そんなかけがえのない体験になりました。

私はこれまでに、教科書や本に載っているような、国宝や世界遺産、お城などをいくつも巡ってきました。それは母の影響です。母のモットーは、『本物を知る』こと。幼い頃から私や兄を、全国のいろいろな所へ連れて行ってくれました。私は幼い頃から好奇心が旺盛で、疑問に思ったことを何でも質問するような子どもでした。私が興味を示すと母は、「それ、絶対本物を見た方がいいよ！」

と言って、実物を目にする機会をたくさん与えてくれました。小学一年生の時に、この旅の最初の地として訪れたひめゆりの塔。当時の私にはさほどの知識もありませんでしたが、何とも言えない強烈な衝撃を受けたことは、今でもはっきりと覚えています。思えばあの時から、私も『本物を知る』ことに魅了されていたのかもしれませんが。

デジタル化が急速に進む現代、日本を初め世界中で、バーチャルな世界の可能性が広がっています。いろいろなことを疑似体験できるようになることが、技術の進歩として賞賛されることも珍しくありません。また、そんな折に私達を襲った、コロナウイルスの猛威。ステイホームの名のもとに、インターネットや電子機器を活用する生活の在り方が求められるようになり、それらに対する期待や価値も高まりました。

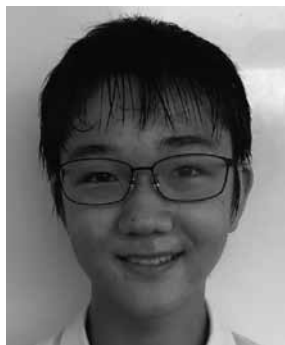
時代の流れに逆行しているかもしれませんが、私はこういった風潮に、ぼんやりとした疑問を抱いています。それは、私や母が大切にしてきた『本物の価値』が薄れていくように感じるからです。本物がもつ力は本当に凄い。手間や時間をかけて本物を訪ねるからこそ、そのものの質感や色合い、大きさ、匂い、雰囲気などが実感をもって感じられ、どのような風土を背景に存在しているのかが分かる。それこそが『本物の学び』になると思うのです。現代のテクノロジーを駆使すれば、遠く離れた場所にあるものでも、簡単に画面を通して見ることが出来ますし、自分が知りたい情報があれば、即座に調べることが出来ます。それも一種の学びや経験であり、価値がないとは思いません。しかしそれは、記憶に焼き付くような深い学びと言えるのでしょうか。木の根をつかみ、ぬかるんだ登山道を一生懸命上った先に見たあの感動は、画面を眺めただけのものとは全く異なるものだと思います。

私は、『本物を知る』ことの価値を教えてくれた母に感謝しています。私達が生きていくこれからの世界は、いろいろなテクノロジーが発達し、きっと想像もつかないほど便利な世の中になっていくのだと思います。それでも私は、手間や時間をかけて『本物』を訪ねる旅を続けたいと思います。母や家族と旅をし、自分一人で旅をし、自分の子供や孫たちともそんな旅を続けていくことが、今の私の夢です。それが私の人生を豊かなものにしてけると確信しています。

最後に皆さんに聞かれます。あなたが今、目にし、感じているものは『本物』ですか。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私はコロナ禍の生活を送る中で、バーチャルなツールの便利さや可能性を日々実感しています。一方で、私の心に鮮明に焼き付いているのは、自らの身体で味わった感覚や、経験を通じて得た感動なのだという事に気付き、このテーマで作品を書くことにしました。“本物”に触れるためには少し手間がかかります。それでも私は、いろいろなことを実際に見聞き・体験することを大切にしていきたいと思っています。また、この作品・発表を通して皆さんにもその気付きを共有してもらえたら嬉しいです。



審査委員会委員長賞受賞

教室

熊本県 宇城市立松橋中学校 3年

葛谷 護

朝七時五十分、僕は教室に入ります。いつも通り、道具を片付け、友達と話したり、みんなに提出物を呼び掛けたりしています。そこに彼の姿はありません。彼にとって三年五組の教室には見えない壁があるようでした。

彼は仲のいい友達の一人です。小学校の頃は教室で一緒に過ごしていました。しかし、中学生になると彼は別室に登校するようになっていたのです。僕は彼がいる別室に行き、一緒に給食を食べたり、たわいもない話で盛り上がりたりしていました。夏休みには、水泳の補講を受けるために、一緒に登校したこともあります。その途中も、僕の質問に彼が頷いたり、笑い合ったりと楽しい時間を過ごしていました。彼がいることでその場がほのぼのとした雰囲気になり、とても居心地がいいのです。それは、彼の笑顔が僕に安心感を与えてくれるからかもしれません。二人だととても穏やかな彼が、どうしたら教室に入れるのかと考える自分がいました。彼は集団が苦手なため、教室に入りたいという気持ちがあっても動けなくなるということは知っていました。なぜなら、教室近くの階段の所で蹲っている姿を何度も見かけたからです。

三年生になった今、彼は給食時間に教室で食べることができるようになりました。新型コロナウイルス感染症対策で、前を向いて黙食しているので、楽しく話しながら食べることは、残念ながらできません。それでも、目の前に友達の姿があることはとても嬉しく、ほっとします。いるべき人がいることの喜びを実感しています。彼が踏み出した一歩は、僕にとっての一歩でもあるのです。

僕には自閉症を持つ十歳の弟がいます。弟は感情のコントロールが苦手で、些細なことで怒って衝突することもありました。しかし、僕にとって弟のその姿が当たり前だったのです。弟はレゴやプラモデル作りが好きなので、アドバイスをしたり、一緒に作ったりしています。困っている弟の姿を見て、自分にできることでサポートしようと行動してきたので、今では弟がやりたいことや苛立っていることなどがわかるようになりました。だから、友達がきつい思いをしているときにも、自分ができるところをしようと思ったのです。

僕の友達は今、少しずつ教室に入れるようになっていきます。しかし、教室に入れない人、学校に来ることができない人は僕たちの身の周りに存在しているのです。あなたは誰が教室に来ていないのか、何日教室に入れていないのか認識できていますか。また、そういう人たちが入れるような教室になっていますか。

教室の空席に自分の物を置く人がいます。欠席者の担当棚に荷物を置いている人もいます。その人たちは悪気がなく、単に空いているから使っただけなのかもしれません。しかし、考えてみてください。その席の持ち主はいるのです。そこが必死の思いで教室に来た人の席だとしたら。その人が今、目の前の光景を見たら、どう思うでしょうか。悲しい思いと同時に、「ここには自分の居場所はない」と感じ、勇気を出して教室に来たことを後悔するかもしれません。

「教室に入りたい、みんなと一緒に授業を受けたい」という仲間の願いをかなえるために、僕は次のことが大切だと考えます。

まず、その友達の存在を感じる。その人がいなくても何事もなかったかのように過ぎていく教室の時間は寂しすぎます。いなくて当たり前ではないのです。さらに、友達のためにできる小さなことを、一人一人が考えて動くこと。それは「してあげる」ではなく、「一緒にする」ことだと考えます。一人の百歩より百人の一歩が大事なのではないかと。

僅かなことしか僕にはできません。しかし、これからは僕は自分と友達の為に行動していきます。同じ教室で一緒に笑い合うために。

この主張をどんな人に届けたいですか？

学校という集団の中で生活しているすべての人に、自分の学級のことを考えるきっかけにしてほしいと思います。あなたが自分の教室にある空席に気づいているのか、空席の存在をどう考えているのか聞きたいです。この作品に触れてあなたの心の中に誰かが思い浮かぶのであれば、その人のためにできるあなただけの何かを考えてほしいし、友達と共有して、学級みんなで何ができるかを考え一歩踏み出してもらえると嬉しいです。



審査委員会委員長賞受賞

私の挑戦

沖縄県 宮古島市立久松中学校 1年

砂川 恵里香

私の左手には、生まれつき肘から先がありません。このような左手ですが、皆さんが予想する以上に出来ることはあると思います。例えば、毎日自転車で登校しています。バドミントン部に所属し活動しています。体育の時には水泳にも取り組んでいます。幼い頃から、やってみたいと思ったことに挑戦し、諦めずに努力をしています。そのきっかけとなったのが、私が幼稚園の頃のことです。その頃の私は、うんてい棒や遊具など、楽しそうに遊ぶ友達をうらやましく見ていました。そのような私をいつも優しく見守り、サポートしてくれたのがヨウコ先生です。先生は、左手がない私に出来ることを増やせるように、色々な物を作ってくださいました。その中で一番思い出に残っているのが、特製縄跳びです。それまで両手を使う縄跳びは、絶対出来ないと思っていました。しかし、私がみんなと同じように縄跳びが跳べるように、両手を使うのではなく、肘にはめる特製縄跳びを作ってくださいました。私はとても嬉しくて、何回も特製縄跳びを使い、友達と遊んだことを今でも覚えています。縄跳びの他にも、「こうすればできるんじゃないかな。」とサポートしてくださり、頑張って挑戦する私を笑顔で褒めてくださいました。

幼稚園を卒園した後も私は、多くのサポートをいただきながら、さまざまなことに挑戦しました。水泳、そろばん、書道など。私に出来ることが増えると、両親をはじめ祖父母、先生方、身近な人達が喜び、応援してくれました。その度に「出来るってこんなに嬉しいことなんだ。もっとがんばろう」と実感し、自信を持てるようになりました。

ところで、体育の授業で鉄棒やマットの時、実際に取り組む前から「ムリ、できない。」という声を耳にすることがあります。そんな時「両手があるのに、なぜそんなことを言うのかなあ」と思います。やる前から「出来ない」と決めつけてしまうことを不思議に思います。同時に「私はやってみたい。どうすれば出来るようになるかな。誰にどんなサポートをお願いしようかな」と考えはじめます。

私たちには、いろいろな場面で挑戦するチャンスがあります。そのチャンスを活かすことなく自分で潰してしまうのは残念なことだと思います。小さくてもいい。挑戦を繰り返し、成功体験を重ねることで、自信をもつことができます。私たちには無限の可能性があります。その可能性を最大限に広げるのは、他の誰でもなく自分自身ではないでしょうか。

新しいことに挑戦する場面になった時、現状で出来ないと判断するのではなく、成功するという可能性を信じて、サポートをお願いするのも一つの手だと思います。一人で抱え込まず、誰か相談できる人・助けてくれる人・支えてくれる人、そうです、サポートしてくれる人を探すのです。挑戦したい・克服したいと思った時、勇気を出して近くにいる人を頼るのです。サポートしてくれる人が、誰か近くにいると思います。私にヨウコ先生や多くの方々がいるように。いただいたサポートで笑顔になると、自分自身も周りの人達も幸せになれると私は思います。

私は将来どのような職業に就きたいのか、具体的にはまだ決まっていませんが、人助け・サポートをする仕事に就きたいです。自分自身がいただいてきたサポートの恩返しをしたいからです。また、これから出会う人達と、挑戦したことを語り合い、お互いの可能性を高め合いたいです。その時に向け、広い視野を持ち挑戦を続けます。

現在私は身体が成長中のため、義手を作ることができません。何年後かに、身体の成長具合と相談しながら、義手を装着する予定です。義手を装着し、両手を使ってやりたいことがあります。それは、毎朝母に結んでもらっているこの髪型を、自分の手で結びおしゃれを楽しむことです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張を私と同じ中学生に届けたいと思います。なぜなら、何か挑戦したいと思った時に、出来ないかもしれないと不安に思わずに、サポートをいただいて取り組むことが、一番「出来る」ことに近づくと思うからです。サポートをもらうことをはずかしいと思わずに、可能性を伸ばすことにつながると考えてほしいです。私もこれからも、サポートをもらいつつ挑戦を続けていきます。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

私と僕と、そして「自分」

宮城県 大郷町立大郷中学校 3年

山内 莉羅

「男性・女性、どちらかの性別に○を付けてください」

そんな何気ないアンケートの質問に戸惑う自分がいました。すぐに○をつけることはできませんでした。こういう質問に答えられない自分がそこにいたからです。なぜなら、自分の性別は男性でも女性でもないからです。

「お前って、男みたいだよな。」

同級生にそう言われたのは、小学五年生のとき。自分の性別に違和感を覚え始めた頃でした。それまで性別なんて意識しておらず、男性と女性しか知らなかったので、ずっと心に霧がかかったようにもやもやしていました。

「性同一性障害」…小学六年生の時に講演会で話された中に出てきた言葉です。驚いたのと同時に、それまでもやもやしていた自分の気持ちの意味が分かったような感覚でした。講演を聞いていく中で、自分も当てはまるのではないかと思いはじめました。

しかし、言葉の意味は分かって心自体は曇ったままでした。

中学生になり、制服を着ることになりました。男女の差がある制服、授業、そして名前の呼ばれ方…、男女で分かれる学校生活が嫌でたまらない自分に出会いました。女である自分が嫌で、鏡を見ると辛くて制服を着ることができず、登校できなくなりました。どうして自分の身長は伸びないのだろう、どうして声は低くならないのだろう。毎日毎日自分に問いかけては涙を流す日々が続きました。

冬の冷たい風が感じられるようになったある日のこと。「Xジェンダー男女以外の性のあり方」というサイトを見つけました。驚きました。そのサイトとの出会いは、性別は男と女の二つしか存在しないとと思っていた自分の気持ちを大きく揺さぶるものとなったのです。女ではない自分は男だと思い込んでいたのが、このサイトによると「Xジェンダー」、すなわち、色々な性があることがわかりました。男女の間である中性、男女のどちらもある両性、性別自体がない無性。そして、時と場合によって性別が変化する不定性があります。「不定性、ジェンダーフルイド…」そう言葉に出した時、悩んでいた自分の心が救われたような気分でした。心にかかっていた霧が晴れていく感じがしました。そのことを知ってから悩むことも少なくなり、日々変化していく自分の性別を楽しむことができるようになったのです。

自分は心の性別によって一人称を変えることにしました。男よりの時には「僕」、女よりの時には「私」、どちらでもない時には「自分」。僕も私も自分も、どれも大切な自分の一部になりました。

そして、中学二年生になる頃、母と先生方の協力のおかげで制服もスカートからスラックスへ変えることができました。新しい自分に生まれ変わったような気分で、少しずつ登校できる日が増えていきました。

「制服変えたんだ、かっこいい！」

同級生に言われたその言葉に励まされました。「自分は自分のままでいい」、そう思えるようになりました。最初は自分を苦しめていた性別が、今では大切な自分の一部であり、アイデンティティです。

皆さんから見たら私はおかしいでしょうか。この性別は僕の思い込みでしょうか。そんなことはありません。自分はこの性別に誇りを持っています。自分の個性でもあります。きっとこの世の中、自分以外にも性別について悩んでいる人がいると思います。

だから、自分は多くの人に伝えたい。性別を楽しんでいいこと、自分の性別は自分で決めていいこと、必要以上に悩まなくてもいいこと、そして決して一人ではないということ。なぜなら、自分の性別は自分のものなのだから。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

性別だけでなく、色々なものの多様性を理解し、多数派とは違う個性を持っていることに悩んでいる人たちの力になれる社会を築いていきたいです。また、様々な多様性を世の中に受け入れてもらうために今の自分にできることを探し、行動に移していきたいと考えています。この「少年の主張」は、自分らしい人生を作り上げていくための第一歩です。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

一步踏み出す

山形県 小国町立叶水中学校 3年

野崎 さよ子

「修学旅行は震災学習中心だね。岩手県と福島県のどちらがいいですか。」

先生の問いに、友人が答えました。

「岩手県がいいです。」

私は、口元まで出掛かった「福島県がいいです。」の言葉を飲み込んでいました。みんながそうならそれでいい。自分の意見を言わないでみんなに合わせよう。その方が丸く収まるし、安心できるから。でも……私の中に小さなわだかまりが、ゆっくりと沈んでいきました。

今年は、東日本大震災から十年という節目の年です。実は、私達一家は、あのとき発生した原発事故に、避難を余儀なくされました。四歳のときです。茨城から山形、岐阜、六回の引っ越しを経て、今の家に落ち着いたのは五年前のことです。このことを聞くと、みな、少し困ったような表情で、「大変だったなあ」と口にします。けれども、私が避難生活を振り返ったとき思い浮かぶのは、楽しい思い出ばかりです。例えば、長井のお寺に住んでいたとき、寝ているおじょうさんの頭に落書きしたこと。今でも笑いが込み上げてくるくらい、とっても幸せな時間を過ごしていました。

そんな私にも、一つだけ怖い思い出があります。原発事故の後も、単身福島で働いていた父は、放射能や避難生活へのストレスに、疲れきっていました。五歳の時、菓を過剰に飲んでしまった父が苦しむ姿を見てしまったのです。闇に沈んでいるような父の姿は、幼いながらも痛々しく、初めて恐怖を覚えました。その直後、私達一家は飛騨高山に引っ越し、母は、なんと、大工の学校に通い始めたのです。心の折れた父と四人の子どもがいるのに、大工の学校に通う？前から興味があったらしいのですが、ポジティブという言葉では収まらない、大胆すぎる行動です。なぜあんな状況の中で、大工の学校に通おうと思ったのか、ずっと不思議に思っていた疑問を、修学旅行をきっかけに、母にぶつけてみたのです。母は言いました。

「震災を辛い思い出にするより、とびきり楽しい思い出にして、大きくなった時、ちゃんと向き合える。そっちの方がずっと大切だと思ったんだ。」

「それにね。」母は続けました。

「想定外のことが起きた十年前、私達も、想定外の行動を起こすって決めたんだ。」と。

はっとしました。差別的な言葉や、ふるさとに帰れないやせなさ苦しんでいる人は、今でもたくさんいると聞きます。父や母にしても、口にごそしません、胸がつぶれるくらいの不安や苦労があったはずなのです。対して、私の避難生活は、楽しい思い出に彩られている。原発事故の報道が怖くはないし、まっすぐに向き合うことができます。それは、決して当たり前のことではありませんでした。「想定外には想定外」、大胆でポジティブな母はとてまぶしく、私は、感謝しながら圧倒されていました。

引っ越しや転校が多かった私は、つい、周りの反応が不安で、友達に合わせてしまいがちでした。失敗することも目立つことも怖いし、「普通」でいることを心がけていたようにも思います。けれども、私の幸せな現在は、普通では思いつかない、両親の大胆すぎる行動がもたらしてくれたものなのです。もちろん周囲の人に合わせることや、常識的な行動をすることは、とても大切です。けれども、今私は思うのです。失敗を恐れずに、一步踏み出してみたい。「普通」という枠から出てみよう。「想定外には想定外。」母の言葉は、私を覆っていた殻に、ひびを入れてくれました。殻を破るのは、私です。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

修学旅行で震災学習をすることになり、弁論のテーマを決めていた時期だったので、震災のことを書こう、ということになりました。でも、よく考えてみると、私の経験した震災は、楽しい思い出ばかりだと気づき、両親はどういった思いだったのか尋ねてみたのです。初めて聞く両親の話は、驚きの連続で、こんな生き方もあるよ、楽しんで前向きに生きていく先には幸せがある、というのを、みなさんに知ってもらいたかったからです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

自分の足元は

千葉県 千葉市立更科中学校 3年

菊地 大和

青い空に、白い雲。そんな天気とは裏腹に、僕の心はちっとも晴れない。目の前には、一面の田んぼ。手の中には、これから植えていく苗。太陽の光を反射して、田んぼは、まるで鏡のように真っ青な空を映し出している。

「まだ、こんなにあるのか……」

何重にも積まれた、苗が入った箱をちらりと見て、思わずため息をついた。両手は泥だらけで、額の汗をぬぐうこともできない。一步進むごとに、ずぶずぶと足は泥に沈みこみ、あっという間に膝上まで飲み込まれる。

僕の家は田んぼが「沼」と呼ばれていた。水位が深いので、トラクターで入ろうものなら、とたんにタイヤは泥にもつていられる。だから、田植えは、重たい手押し田植え機か、手で植えるしかなかった。僕はこの「沼」も、田植えも、田んぼも、大嫌いだった。

「田んぼに行くぞ。」

父の誘いは、何よりも憂鬱だ。僕の家は、米を作っている。田んぼの仕事は、物心がついたころから、いつも日常の中にあっただ。米作りは、とにかく骨が折れる。でも、それだけではない。何だかとても田舎くさい。僕は、田んぼだけではなく、田舎も嫌いだった。

「更科って、どこにあるの？」

陸上の大会に出場すると、市内の他校生によく言われる。同じ市内なのに、名前すら知られない場所。それが、僕のふるさとだ。「うーん……。とにかく、田舎、田舎！」

僕は作り笑いで、いつもそう答えていた。早く、話題を変えたかった。田んぼ以外、何も無い場所。それが、僕のふるさとなのか？認めたくなくて、決して自分から学校名を言うことはしなかった。

そんなとき、総合的な学習の時間で出会った言葉がある。「SDGs」持続可能な開発目標。テレビのニュースで何度か聞いたことがある言葉。誰も知らないような田舎に住む僕にとって、何だかとても遠い言葉。「未来の世界を救え！アクションを起こせ！」自分なんか、何かできるとは思えなかった。

でも、学校で聞いたSDGsは、想像とは、全くの別物だった。

「SDGs。自分の足元を守れ！」

え？「世界」ではなく「足元」？ 頭の中に、いつも僕の足を飲み込んでいった、あの「沼」が浮かんだ。あそこを守る？正直、ピンとこなかった。

総合的な学習の時間、僕の班は、ふるさとの自然について調査した。近所を流れる鹿島川に行ったときは、うなぎにそっくりなスナヤツメに出会った。驚いたのは、そのスナヤツメが絶滅危惧種だということだ。目の前で確かに生きている生物が、今、この世界から消えようとしている。信じられなかった。

そのときだ。記憶の隅に、緑色の小さな光を見た。それは、小学生のときに会った一匹の蛍の光だ。夏の夕方、父と日課の散歩をしていたとき、道の向こうでぼんやり光る小さな光を見た。近づくと、光は一匹の蛍だった。初めて見た蛍の、頼りない小さな光は、とても美しかった。そういえば、あれから一度も、蛍を見ていない。蛍はもう消えてしまったのだろうか。急に手の中でうねうねと動くスナヤツメが、たまらなく愛おしくなった。

総合的な学習の時間は、何も無いと思っていたふるさとの、知らなかったたくさんの部分を僕に教えてくれた。それだけではない。あんなに嫌いだった田んぼが、全く違って見えるようになった。泥臭くて、汗臭くて、田舎くさい。そう思っていた田んぼの仕事に、やりがいを感じるようになった。泥にまみれて働く父の姿を、誇らしく思うようになった。それは、今いる場所が、永遠ではないということに気付いたからだ。今いる場所を、愛おしいと思えるようになったからだ。

泥に足をとられながらも、一歩ずつ前進する。歩みさえ止めなければ、苗はしっかりと根付き、いずれ実りの時期がやってくる。だから、僕は「沼」に、自分の足元に、苗を植え続ける。これが、僕のSDGs。

「自分の足元は、自分の手で守るんだ。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

今、自分が住んでいる場所を、「田舎」だと思える人も、「都会」だと思える人も、誰もが皆「故郷」を持っています。その故郷が明日消えてしまったら……。今まで当たり前だと思っていた風景が、特別なものに見えてくるはずです。今回の主張は、たくさんの人に、自分の足元へ目を落としてほしいという思いをこめました。僕たちの心を育んだ、かけがえのない故郷を、未来につなげる。それが、今の社会でピックアップされているSDGsの求めるものの一つだと考えています。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

自分の考えに対する意識

滋賀県 滋賀大学教育学部附属中学校 3年
寺田 愛

私は国語のテストが返却される度に毎回必ずある疑問を抱く。それは、「自分の考えを書きましょう」と書かれているのに、なぜ人に採点されないといけないのかということだ。この疑問を持つ学生は多いと思う。

例えば、テストで「この人物の行動から心情を考えて書きましょう」という問題があるとする。それに対して私は自分なりの考えを導き出して解答する。しかし返却されると、解答例には「この言葉が必要だ」などと明記されている場合が多い。それでは正直なところ、私は自分の考えを否定されているように感じる。広い社会で様々な考えを持った人がいて、それぞれの考えを尊重すべきだと多くの人たちが考えているのに、なぜこのような答えだと決めつけられないといけないのだろうか。このような問題で点を落としてしまった際、私はどうすれば正解できるのかを先生に相談した。すると先生は、「この問題の作問者の意図を考えてみると良い」とアドバイスを下さった。もしそうだとすれば、なぜ、「自分の考えを書きましょう」と書かれているのか、この問題を通して大人たちは私たち学生に何を伝えたいのかを自分なりに考えてみた。

このような国語の問題で間違えてしまった時、私は真っ先に解答を確認する。それは自分では思いつかなかった考え方を知らためだ。つまり、意識して自分とは別の視点から物事を考えようとしている。もちろん様々な考えを持つ人がいるため、全員の考えに納得し共感することは難しい。しかしこの問題を通して、作問者、つまり他の人の考えを読み取る力が今の学生に試されているのではないだろうか。

そこで私は、「2020年から2022年にかけて小、中、高校の学習指導要領が変わる」というニュースを思い出した。今の学生に何を求めているのかを知るために文部科学省のホームページを調べた。そこには「社会と連携、協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質、能力を育む」ことが「よりよい社会を創る」ための方法として掲げられていた。

学習方針から、私は自分の意見を持ちながらも相手の意見も踏まえて他者と連携していくことが、現代社会に求められていると考えた。私は今まで相手に左右されずに自分の意見を積極的に持つことばかりを重視してきた。しかし、自分の意見にこだわりすぎるのもよくないのだと教えられたように感じた。読解文でいうならば、文章中の登場人物は自分とは別の人間であり、私たちは作問者が読み取った彼らの心情を推し量る必要があると思う。それは、全く何もない状態から考えることとは異なる。国語の問題文では自分の意見と明記されているが、実際には相手の意見への共感をふまえた自分の意見を書かなければいけないと思う。

つまり、私たち学生が今の社会に求められていることは自分の考えを伝える際に相手の意見に共感する気持ちを持つことだ。相手に納得してもらうことが目的ならば自分の考えをただ伝えるのではなく共感してもらうことが大切だ。そのためには相手の考えを予想しながら自分の意見について考え直す必要があると思う。

多文化社会におけるグローバル化が進む中、自分には理解できない考え方に直面することが将来多くなっていくだろう。だからこそ相手に伝わる伝え方を、友達と話す時など日常で意識する必要があると思う。それによって、一人一人の考え方に対する意識が変わり、様々な人が共存できる社会になっていくのではないだろうか。

< 出典 > 文部科学省ホームページ 「学習指導要領改訂の考え方」

この主張をどんな人に届けたいですか？

相手の考えと自分の考えがぶつかってしまって困っている人にこの思いを伝えたいです。この考えが正しいなど優劣をつけずに、様々な考えを尊重して相手の考えにも共感しながら自分の意見も伝えることでよりよい関係を築いてほしいです。

また、そうすることで自分一人だけでは生まれなかった考えに巡り合うことができると思います。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

スマホ人間

京都府 京都光華 中学校 3年

林 紗花

あなたの瞳に映る私はどんな風に見えていますか。笑っていますか。怒っていますか。それとも泣いていますか。統一された無表情な世界、光も色もない殺風景な景色。私には一つの画面を見つめる顔が、目が、全て同じに見えました。

先日、母に言われました。

「いつまでスマホ触ってるの。早く勉強始めなさい。」

誰も一度は言われたことがあるセリフ。時間を決めていたはずなのに一度見始めてしまうと、もうやめられなくなる。答えることを少しためらってしまったのは自分でも時間を使いすぎたなという自覚と罪悪感があるからです。言われれば言われるほど、素直になれない私は、ただ動画を見すぎただけと、自分に言い聞かせました。その場で何か大きな影響が出るわけでもない出来事が、今、目の前にある楽しさにかなうわけがありませんでした。

「ねえ、聞いている。」

最近母が私によく言うこの言葉。私はこの言葉が嫌いです。確かにそう言われると、戸惑いなく「聞いている」とは言えないけれど、母だって私の話を聞いてくれないくせに、そう思うようになったのです。いつからでしょう。「だって」「だって」を考えるようになったのは、自分がどんどん変わっていく気がしました。

自分の意見や出来事を簡単に共有できる、私のことを「いいね」と思ってくれる人がいる。日頃のストレスがたった一つの「いいね」でふきとんだ気がしました。わざわざ大変な思いをしなくても人とつながりコミュニケーションがとれるスマホに、どんどん時間も心も奪われていきました。便利さと幸福感を味わうためには、それにみあった代償が必要なことに、私は気づけなかったのです。

その日は突然やってきました。それは確かある夏の日のこと。久しぶりに家族と出かけた私は、休憩がてらカフェに立ち寄りしました。さっきまでの暑さがうそのように、冷たい空気が私達を包みこみました。カフェに流れている少しオシャレな音楽と軽快なリズムを聞き、ホッと一息ついていたその時、

「ねえ、聞いている。」

聞き覚えのある言葉。チラッと横を見ると、四人組の若い女の子の人達が向かい合って座っていました。それぞれみんながスマホに夢中になっているようで問いかけに反応がうすく、問いかけた女性は、これがいつもの光景だと言わんばかりに当たり前のようにスマホを触り始めました。少しの会話はあるものの誰もスマホから目を離そうともしませんでした。その光景はとて違和感があって、他人の私でもなぜかさびしい気持ちになりました。こんなに近くにいるのに、どうしてこんなに距離が遠いのでしょうか。私が彼女達を見つめているのを発見した母は、私に向かって言いました。

「いつもあなたがやってる事と同じね。」

私はその言葉を聞いてハッとしました。私は、今までどんな態度で周りに接していたのだろう、どんな風に周りを見ていたのだろう。自分が今、こっけいだと思っていたこの様子は、普段の自分だったということに今まで分らなかったのだろう、激しい後悔で胸が苦しくなりました。いつの間にか私はスマホに支配されていた。あんなに母は言ってくれていたのに自分の「鏡」を見なければ気づけなかった。

あの出来事から私は、使う SNS の量を減らしました。始めは通知音が鳴るとたくなったり触りたくなったりしましたが、今では自分が本当に見たいものだけを見れるようになりました。その分、時間を有意義に使え、人とのコミュニケーションも増えたのです。

スマホは電話やメール、ゲームなど数え切れないほどの役割を果たしています。だから、一度何かをしようとスマホを開くと別の要件にも手を出してしまいます。人間の持ち物であるスマホに操られていませんか。確かに、面と向かって人と話すよりも画面の向こう側にいる相手とのコミュニケーションの方が緊張せずに、自分の意見をゆっくり考えながら伝えることができます。ですが、少しの「変化」や人間同士の「あたたかさ」は顔を見て話して、初めて伝わるのではないのでしょうか。あなたは知らず知らずのうちに、「スマホ人間」になっていませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

昨今では、小学生でも当然のようにスマホを持つ時代。防犯対策や居場所を確認するためという目的から始めたのに、気づけばスマホ中心の生活になってしまっている。知らないうちにその状態に陥っているにもかかわらず、自分では、それに気づいていない。スマホの低年齢化は年々進んでいますが、大人でさえもコントロールが難しいのに、まだ、訳も分からない子供達を使うのはとても危険です。だから、私は、この主張を通して、これからスマホを持つと思う人、既に持っている人、またスマホを持っていない人にも広く届けていきたいと思います。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

思い出のランドセル

島根県 安来市立伯太中学校 1年

柁瀬 真心

みなさんが6年間背負ったランドセルは、今、どこでどのようになっていますか？

私は、姉弟のいちばん上で、小学校に通う妹と弟がいますが、私が6年間使ったランドセルが、一番きれいです。それをもったいなく思ったのか、弟が、来年1年生になる一番下の弟に、

「お姉ちゃんのランドセルを使ってもらおう。」

と言いました。しかし、私のランドセルは花のししゅうがされた赤い色のランドセルです。姉弟の中で最もかっこつけている一番下の弟は、

「絶対に嫌だ。」

と即答しました。その時、母が

「ランドセルは、ペンケースや財布にリメイクして、思い出としてとっておくこともできるし、寄付することもできるよ。」

と言いました。「寄付」と聞いた時、不思議に思いました。毎年1年生が新品でキラキラしたランドセルを背負っているのを見てきたので、6年間使い古したランドセルを使う子なんているのだろうか。すると母は、あるホームページをみせてくれました。そこには、

『使っていないランドセルを宝物にしてくれる子たちがいる』

と書かれていました。それは『思い出のランドセルギフト』と言います。

『思い出のランドセルギフト』は、日本からアフガニスタンにランドセルを寄付する国際支援活動です。特に教育の機会に恵まれない女の子の就学に役立つそうです。なぜ、特に女の子なのか。アフガニスタンでは、長く続く紛争やテロなどにより、いまだ多くの子どもが学校教育を受けられていません。そのため、女の子は男の子に比べて教育を受ける機会が少なく、二人に一人しか小学校に通えていません。家の手伝いをする、早くに結婚する女子が多いこと。他にも、女の子の教育に対する理解が得られないなど、女の子が学校に行けない理由を知ると、日本の文化とは大きな違いがありました。

私は小学校4年生の時、国語の授業でアフガニスタンのことを学びました。その物語を発表会の劇で演じたので、とてもアフガニスタンのことが印象に残っていました。戦争など、今の自分の生活からは想像もできなかった世界を、いつも私の近くにあったランドセルが、アフガニスタンという遠い国と近づけてくれる気がして、私はランドセルを寄付することを決めました。

日本中から集まったランドセルは、新しい勉強道具と一緒に箱につめられ、船でパキスタンまで運ばれます。そこからトラックで、アフガニスタンに着き、ランドセルは一人一人に手渡されます。

私のランドセルが一人の女の子に手渡されて、その子がランドセルを背負って学校に通うと思うと、自然と温かい気持ちになりました。自分にできることをしたいと思い、送ることを決めただけで、私の思い出のつまったランドセルをきつと大切にしてくれる。ありがとうという気持ちを込めて、「私が小学校で過ごした時間は笑顔あふれる毎日でした。私のランドセルを背負ってくれるあなたも、たくさんの楽しい思い出を作ってください。」と、手紙をランドセルのポケットに入れて送りました。

今、私の妹と弟は、「自分たちも絶対ランドセルを送るんだ」と、少しでもきれいなランドセルを送れるよう大切に使うと張り切っています。私がアフガニスタンの事を学んで感じたことは、戦争や厳しい環境の中でも、とても心が豊かだということです。きれいな風景や食べ物、動物、すべてに感謝し、笑顔がとても輝いています。

みなさんのランドセルは、今、どこでどのようになっていますか。一緒に温かい気持ちになってみませんか。私も、今の生活を当たり前と思わず、私に関わるたくさんの人や物に感謝し、笑顔で学校生活を送りたいです。

そして、アフガニスタンの人々の平和を心から願い、私のランドセルを背負ってくれるあなたへ、「どうか、笑顔あふれる学校生活になりますように。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

初めて「思い出のランドセルギフト」の活動を知った時、とても素敵な活動だと、心が動かされる感覚でした。最初は、この活動を、ランドセルを家にしまったままにしている人や、これからランドセルを卒業する人を中心に、たくさんの人に知ってもらいたいと思い、この作品を書きました。しかし、今は、活動を知ってもらいたいという思いとともに、平和を心から願う気持ちを、ランドセルと一緒にアフガニスタンの人々に届けたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

認め合うことの本質

広島県 東広島市立志和中学校 3年

三好 百恵

皆さんは「人種差別」という言葉を聞いてどのようなイメージを持ちますか。自分には関係ない、人種差別なんてしていない、そう考える人がほとんどではないでしょうか。

私は、母が中国人、父が日本人のハーフです。そのため、幼いころから中国の文化に触れることができていました。ただ、ハーフだからという理由で友達に冷やかされたこともありました。

「ねえ、中国人は虫を食べるの。」

と聞かれたこともあるし、「中国は汚い」というイメージを持っている人にも出会いました。私はなぜその人たちが中国に行ったこともないのに、悪いイメージを抱いているのかわかりませんでした。ハーフであることを冷やかされたとき、私はどうしたらいいんだろうと悩んで、それを父に相談したことがあります。父は

「実際におまえは中国の文化を体験しているんだからそんな言葉は気にするな。」

と答えてくれました。私はこの言葉にとても救われました。私は、日中ハーフに生まれたこともあり、幼いころから周囲の人達の外国人に対する偏見について考えてきました。なぜ言葉や食べるもの、肌の色が違うだけで批判的な目で見てしまうのか、それはその国についてよく知らないからだだと思います。私の住んでいる地域には、外国の研修生の方が多くいらっしゃるのですが、ある時私の友達がその方たちを見て「怖い」と言ったのです。私は、「よく知らないということが怖いという気持ちにつながっているのではないか」と思いました。だから「もっと色々な国の文化を知ってお互いに認め合う心を持つべきだ」と考えました。そして私は既に中国の文化を体験できているからこそ、「絶対に他国の人やその文化に対して偏見を持たないし、差別的発言もしない」とそう決めていました。

しかし、ある時私はこの自分の考え方が間違っていることに気が付きました。先ほども触れましたが、私は「中国人は虫を食べるのか」と聞かれたとき、

「はあ…そんなわけないじゃん」

とため息交じりに言い返していました。その時の私はまだ、自分自身が虫を食べることは汚いという偏見を持っていたことに気が付いていなかったのです。実は、最近になって私は、中国でも虫を食べる地域もあるということを知りました。それは、私が中国に行ったときに私の目の前で、調理した虫をいとこがおいしそうに食べる姿を見たからです。衝撃を受けました。その衝撃とは、「絶対偏見なんか持たない」と決めていた私自身が、虫を食べるという食文化に対し、偏見を抱えてしまっていたことへの衝撃です。私自身が認めたくないものが私の中にも潜んでいたのです。でもそれはなぜだろうと考えたとき、私は「表面的に認め合う」ことは出来ていても、「認め合うことの本質」そのものを理解していなかったのではないかと気付いたのです。

私が考える「表面的に認め合う」とは、一面のみを見て、全てを理解したと勘違いしていることです。そして「認め合うことの本質」とは、自分の想像を超えた文化や価値観に触れたときに、自分なりに色々な側面から見つめ、そういう文化もあるんだ、と丸ごと受け止める。さらに尊重するといった寛容な心を持つことです。この「認め合う」ことの本質が理解できたときに私たちは互いに国や文化の枠組みを超えた一人の人間として接することができるのではないのでしょうか。

まだ世の中にはたくさんの差別や偏見があり、苦しんでいる人達が多く存在しています。みなさんは「自分で気付いていない偏見」、持っていませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、自分は差別などしない、偏見など持っていない、と思っている人にこそ伝えたいです。なぜなら、自分の知らないものに対して差別的なとらえ方をしたり、偏った見方をしたりすることは誰にでもあるからです。差別や偏見をなくすためには、他人事ではなく、自分の中にもそういった考え方があることに気付くことが大切です。この主張を通して、自分を見つめ直すきっかけにしてもらいたいです。

少年の主張全国大会努力賞受賞作品

【北海道・東北ブロック】

北海道 洞爺湖町立洞爺中学校 3年
吉野 真帆 『完璧じゃなくていい』

青森県 階上町立道仏中学校 2年
濱谷 歩香 『思いやる心』

岩手県 滝沢市立柳沢中学校 3年
高橋 美花 『挨拶』

秋田県 由利本荘市立岩城中学校 3年
吉田 輝来良 『多様性の海へ』

福島県 須賀川市立小塩江中学校 3年
山河 ひなた 『ずっとそばに』

【関東・甲信越静岡ブロック】

茨城県 茨城県立古河中等教育学校 1年
七五三掛 愛莉 『みんなと違う』

栃木県 鹿沼市立東中学校 3年
石田 真愛 『私の母』

埼玉県 三郷市立北中学校 1年
アウク ナナ エルシー 『「普通」が人を傷つける』

東京都 東京都立武蔵高等学校附属中学校 3年
坂口 礼佳 『兄の話』

神奈川県 平塚市立春日野中学校 2年
前田 乃裕 『心の石』

新潟県 柏崎市立南中学校 3年
小林 朱珠 『「ありがとう」って言いたくて』

長野県 安曇野市立三郷中学校 1年
松本 奈穂 『認め「愛」の社会を』

静岡県 御殿場市立高根中学校 3年
勝又 悠翔 『はると池』

【中部・近畿ブロック】

富山県 舟橋村立舟橋中学校 3年
澤武 未依 『将来の夢』

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 3年
土山 桃愛 『コロナ禍で感じた「学ぶことの大切さ」』

福井県 鯖江市中央中学校 3年
近江 遥香 『世界に医療と笑顔を』

愛知県 春日井市立岩成台中学校 3年
大野 未結 『「人」という字の二画目に』

三重県 津市立南郊中学校 2年
パルマ カズマ 『Be yourself』

大阪府 守口市立梶中学校 2年
足立 遥 『人間らしく、自分らしく』

兵庫県 西宮市立上ヶ原中学校 2年
具 宥 聖 『違うからこそ』

奈良県 香芝市立香芝東中学校 1年
森山 裕美 『「十人十色」が、輝く世界へ』

和歌山県 有田市立箕島中学校 3年
楠瀬 心美 『共に生きる』

【中国・四国ブロック】

鳥取県 米子市立後藤ヶ丘中学校 3年
浅倉 晴花 『ボーダーレスな社会を目指して』

岡山県 岡山市立岡山中央中学校 3年
中本 湊介 『メンズデーはいつ?』

山口県 萩市立萩東中学校 2年
井町 百芭 『助け合える社会に』

徳島県 徳島県立川島中学校 2年
坂野 紅巴 『オサムの気持ち』

香川県 高松市立龍雲中学校 3年
坂賀 憩 『真の「世界の宝石」』

愛媛県 新居浜市立別子中学校 3年
大岡 愛実 『違いが生む特別』

高知県 須崎市立須崎中学校 3年
池田 美羽 『信じる力、信じられる力』

【九州ブロック】

福岡県 久留米市立田主丸中学校 3年
山岡 由愛 『残すべきもの』

佐賀県 太良町立多良中学校 3年
酒邊 陽菜 『私は私、これからも』

長崎県 大村市立郡中学校 3年
今里 倅 『届け希望の歌』

大分県 竹田市立竹田南部中学校 2年
菅 朱李 『祖母の教え』

宮崎県 川南町立唐瀬原中学校 1年
福岡 歩乃香 『画用紙の世界に描く夢』

鹿児島県 霧島市立横川中学校 2年
宮脇 大果 『今を生きる』



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

完璧じゃなくていい

北海道 洞爺湖町立洞爺中学校 3年

吉野 真帆

普通の体になりたい、私はずっとそう思っていました。

私は、耳が悪いです。聞こえてはいるのです。でも、聞き取れないのです。一定以上の高い音や低い音が聞き取れないのです。一番辛いのは、授業中です。先生が「教科書開いて」と言っても聞き取れていなくて、友達に教えてもらったり、先生の話が聞こえていなかったで「もう一度言ってください。」とおねがいして、授業を止めてしまうこともありました。その度に、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

私は、周りの人が助けてくれた時にいつも「ごめんね。ごめんなさい。」と、謝っていました。

どうして耳が悪いだろう。もっと普通の体になりたい。周りの人はきっと、迷惑だと思っている、そうずっと思っていました。

そして、耳が悪い私が悪いのだと、自分を責め続けていました。

そんなある時、私の話を聞いてくれた人がいました。

「私、耳が悪くて、周りの人に迷惑かけている自分が情けなくなる。話しても聞こえてなくて、ごめんね。」

と、謝った時のことです。その人は

「そんなの思わなくていい。なんで謝るの、謝らなくていいからもっと頼ってよ。」

そう言ってくれたのです。

その瞬間、耳の悪いのは恥ずかしいと思っていた気持ちが一気に晴れたように感じました。今まで周りは私のことが迷惑だと思っていたのに、本当は助けようとしてくれていた人がいたのです。

今まで自分が閉じ込められていた世界が解放されたように感じました。

そして、私は耳が悪いけれど「これが私なんだ」と強く思うことができたのです。よく「耳が悪いのはかわいそうだね。」

と、言われますが、私はかわいそうではありません。ただ、耳が悪いだけです。そして、耳が悪かったからこそ、人の優しさや、周りの支えに気づくことができたのです。

そう思うと、今までごめんなさい、と思っていた気持ちが、ありがとう、という気持ちに変わりました。耳の悪い私だからこそ、人の優しさに何度も助けられ、大切な人の存在に気づくことができたのです。

世界には、色々な障害がある人たちがいます。私のように耳が悪い人も、目が見えない人、手足が不自由な人。また、身体が不自由と言うだけでなく、自分に自信がなかったり、自分の存在自体を受け止められない人もたくさんいると思います。

でも、それは悪いことでも、かわいそうなことでもない。人と違うところがあるとしても、自分に欠けているところがあると思うことがあっても、そのままいいのです。身体が不自由でも、自分に自信がなくても、だからこそ気づける優しさが、周りにきっとあります。

私たちはみんな、完璧な存在ではありません。完璧ではないからこそ、見える世界があるのです。

みんなたくさんの人に助けられて、今を生きています。家族はもちろん、友達、先生、大切な人、見知らぬ人、本当にたくさんの人です。今を笑顔で過ごしているのはその人たちのおかげです。私はもう、自分を責めたりなどはしません。この世界にこの体で生まれたことは一つの奇跡だと思うからです。それを気づかせてくれたのは、人の優しさです。完璧でなくても、その隙間を埋めてくれる。

人の優しさに気づけたらみなさん、このことを思い出してみてください。完璧である必要がないということ。完璧ではないからこそ、支え合える世界があるということ。

世界には、色々な人たちがいます。私たち一人一人が手を取り合って、堂々と自分を好きでいられる世界をつくっていきませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

自分の障害、個性に自信がない人、自分の存在が受け止められない人「君だけが辛いんじゃない」といつも自分を後回しにされる人、完璧を探し求めてる人、自分を閉ざしてしまっている人、ありのままの自分になりたい人。でも本当は全ての人に届けたいと思っています。私の言葉一つでも良いから届いて何かを変わるきっかけになってほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

思いやる心

青森県 階上町立道仏中学校 2年

濱谷 歩香

「生きていて良かったと素直に思う。」

これは、競泳の池江璃花子選手が東京五輪に内定した瞬間に語った言葉です。池江選手が急性リンパ性白血病と診断されたのは二〇一九年二月。辛い抗がん剤治療、骨髄移植を受け、驚異的な回復により、間に合わないと言われた「東京の切符」を手にしました。涙を浮かべている池江選手の姿を見て、「努力が報われて良かった。」と、私は涙が止まりませんでした。

感動の会見からほどなく、ありえない事態は起こりました。池江選手に向けられたツイート。それは、ナイフのような残酷な言葉でした。「アスリート失格」「辞退しなかったら罪は重い」「利己的」「バカ」「自分のことしか考えていない」……。大病を克服し、やっとつかんだオリンピック。辞退や反対の表明を迫る意味が全く分かりませんでした。頑張ったことの全否定です。彼女はツイッターで苦しい胸の内を明かしました。「私に反対の声を求めても、私は何も変えることはできません。この暗い世の中をいち早く変えたい、そんな気持ちはみなさんと同じようにもっています。ですが、それを選手個人にあてるのはとても苦しいです。」

言葉を選んでいましたが、その悔しさはどれほどだったでしょう。

病気になる前の池江選手は、誰よりも練習し、誰もが認めるトップアスリートでした。白血病を患った時のショックは計り知れません。しかし、奇跡の早さで病を乗り越えられたのは、本人のたゆまぬ努力と、それを支えた家族や医療関係者のサポートがあったからです。池江さんの姿は、そのまま、これから治療を受ける人、今治療を頑張っている人の励みとなっているのです。「どうして温かく見守ってあげられないんだろう。」心ないツイートに彼女が苦しんでいると思うといたたまれない気持ちになりました。

コロナ禍では、同じような理不尽が執拗に繰り返されています。例えば、命がけで働いている医療従事者の方々への誹謗中傷です。目に見えないウイルスの脅威は、身体だけでなく、心もむしばんでしまっているかのようです。「その差別は、いかなる理由を並べようとも、絶対に間違っている。」こぶしを握りしめた時、看護師をしている母のことを考えました。

幼い頃は、緊急患者の処置や検査で病院から連絡が入ると、母はすぐに病院に駆けつけなければならず、私は寂しい思いをしていました。でも現在は親子の会話が増えたこともあり、家族の一員として母を支えたいと思っています。母の頑張りを素直に受け止められるようになったところか、将来看護師になりたいという夢をもつようになりました。

社会のエッセンシャルワーカーとして、看護師は過酷で重大な業務を担っています。それを経験し、理解している母は、私が同じような道に進むことは賛成していません。それでも私は、人の役に立ち、一人でも多くの命を救う手伝いがしたいと思っています。

コロナは人間から多くのものを奪いました。その一つが人を思いやる心です。人が人の痛みを想像できない。これまでの常識が通用しない。そんな今だからこそ、「他人を思いやる」という、人間にしかできない心を、一人一人、取り出すことが必要なのだと私は思います。

世界を見渡すと「コロナ禍で頑張る全ての人へありがとう」の輪が広がっています。私は地球家族の一人として、その輪の中で懸命に生きていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの作品を、白血病などの病と必死に闘っている人達、コロナ禍で必死に闘っている医療従事者・エッセンシャルワーカーの方達、病と闘っている人達、そして、池江選手に届けたいです。世の中には、誹謗中傷や思いやりのない言動に苦しんでいる人がたくさんいます。そのようなことが少しでもなくなってほしい。コロナ禍だからこそ、人が人を思いやることのできる世の中になってほしいという願いを込めてこの作品を書きました。コロナ禍で苦勞されている方々、そして、母への感謝を胸に、私は看護師になるという夢を実現させたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

挨拶

岩手県 滝沢市立柳沢中学校 3年
高橋 美花

今年参加した進学セミナーで、講師の看護師さんが、こんなお話をしてくれた。

「働き始めた頃は、自分が役に立っているのか実感できずに、悩んでいました。でも、悩みながらも、患者さんとのコミュニケーションは毎日欠かさず、自分に何か力になれることがないか、探していたんです。するとあるとき、『いつも話し相手になってくれて嬉しいよ。ありがとうね。あなたのおかげで元気が出るよ。』と言ってくれた患者さんがいました。そんな出来事があって、私は挨拶や会話によって、患者さんの心の支えになれることが分かったんです。」

元気が出る挨拶って、なんだろう。私は、セミナーに参加する前から、日常的に挨拶をしている。でも、家族も、友達も、私と挨拶を交わした人が元気になっているだろうか。答えはノーだと思う。では、看護師さんの挨拶と、私の挨拶は、何が違うのだろうか。

看護師さんは、患者さんのその日の気分や体調を、挨拶をしたときの、表情や声のトーンから読み取って、そのあとにかける言葉を考えるそうだ。挨拶をしながら、相手のことを考えているということだ。

では、私はどうだろう。「おはよー。」私は、挨拶はするけれど、挨拶だけだ。そこで完結している。挨拶のあとには何も無い。自分ではきちんとしていたつもりの挨拶は、形式的なものだったのだ。これでは、看護師さんの挨拶には程遠い。

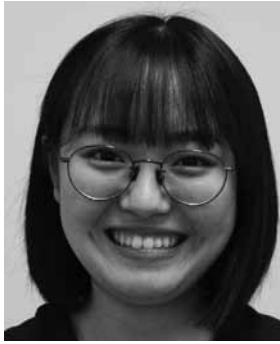
セミナーに参加した次の日から、私は意識を変えた。「なにかいいことあったのかな」「いつもより元気ないな。」挨拶をしたときの表情や声のトーンから、相手の気持ちを考えて、話題や言葉を選ぶようにしてみた。すると、そのあとの会話が以前よりも弾んだ。友達が相談してくれるようになった。私の挨拶で、相手が元気になったのかは分からない。でも、相手と心が通った、そんな実感があった。挨拶をしたあとに、どれだけ相手のことを考えられるか、それこそが、より良いコミュニケーションのために必要なことではないだろうか。セミナー参加後の自身の実践から、私は、相手のことを考える姿勢、相手に歩み寄る姿勢が、相手との心の距離を縮めることに気付くことができた。

だから私は、近い将来、看護師になったときに、挨拶から始まるコミュニケーションを何よりも大切にして、働いていきたい。そして、挨拶や会話の積み重ねによって、患者さんが、私に対して、気軽に相談ができるような関係を築いていきたい。

あなたは、コミュニケーションのことで悩むことはあるだろうか。挨拶は、人と人との関わりの、スタートラインにすぎない。相手を思いやる姿勢があれば、そのスタートラインから一歩前に踏み出せる。誰かの歩み寄りを待たず、自ら一歩を踏み出すことで、結果が変わってくるはずだ。だから私は、今日も挨拶をする。「おはよう」

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は友達、家族、地域の方などたくさんの人との関わりの中で「挨拶」が大切だと気づかされました。ですから、今度は私の体験したことを踏まえ、気持ちを表に出すのが苦手な人や友達、家族との会話で悩んでいる人にこの主張を届けたいと思いました。挨拶を心がけることで、その人の習慣、性格、人柄が変われば、相手もその変化に気づいてくれると思います。なにより、毎日の挨拶やコミュニケーションが相手の心を大きく動かすことを知ってほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

多様性の海へ

秋田県 由利本荘市立岩城中学校 3年

吉田 輝来良

「貴方は、男性ですか？女性ですか？」

私は、この質問をされると、少し喉がぎゅっとするような感覚になり、心の中で「私は、私だ。」と返します。そう思うようになったきっかけは、2015年の春に、埼玉に引っ越し、とても大切な2年間を、埼玉で過ごしたことでした。そこでの出会いを通して新たな発見や、学びが沢山あり、私自身の価値観や考えにも大きな変化がありました。

小学4年生までの私は、勉強が嫌いで、自分の中でおかしいことではないと思っていたことが、周りにはおかしく見えていて「輝来良ちゃんって不思議だね」と、言われても自分自身になが、不思議でおかしなことなのか、わかっていませんでした。ただ自分は、ほかの子たちとは違うという漠然とした居心地の悪さを、おぼえていました。そして転校初日、不安いっぱい緊張していた私を迎えてくれたのは、個性豊かな人達でした。一つのグループや一つの型にはまらず、それぞれが自分を表現し理解しあっている、その間柄、空間が、新しくとても居心地がよかったです。時に意見の対立が起きたとしても、自分にはなかった新しい考えとして、互いに評価して尊重していた姿が、かっこよく見えて、自分でももっと表現したいと思わせてくれました。違うことが当たり前の世界に出会って、かえって協力して物事に取り組むことの楽しさや素晴らしさを感じるようになりました。

私は、性的少数者のパンセクシャルにとっても近いと思います。パンセクシャルとは、あらゆるすべての人達を、隔たりなく愛することのできるセクシャリティのことです。私自身が初めてLGBTQについて調べ、これかもしれないと思ったとき、難しい言葉で囲われていて、その部分でも、私はおかしくて恥ずかしい性質を持っているのかなと思いました。そんな時に出会ったのが、YouTuberでもある「けみお」さんのツイートでした。

「女性や男性誰がどの性と恋に落ちようと愛し合おうとその愛の形におかしいとシールを貼り付けようとするなんて、間違っている、というか秒で進む時代がそのシールをすぐに破棄しちゃうよ。愛の形は無限大で空よりでえんだー。」

この言葉に、みんな違うけれどおかしいことではなく、その人自身の魅力や特徴だと気づき、安心しました。そして私自身がパンセクシャル、性的少数者という言葉やその分類に、貼り付けられていたのかもしれない。

いつのまにか、無意識のうちに使ってしまう言葉も時には、私達の心を括っています。「男らしい・女らしい」という言葉もその一つです。メイクアップアーティストで僧侶の西村宏堂さんは、「人の性格や人となり性を性別で表すことはできない。『パワフルな人だ』『すごく柔らかな人だ』など性別のない形容詞を使うことで、みんなが自由に生きられる。」と述べていました。

多様性の時代とよくいわれます。LGBTQのように、いろいろな言葉で説明され、分類されていますが、自分の「性」に何も疑問をもたず、男女で分類されたり順序だてされたりすることに慣れてしまっていることも事実です。私は自分に自信がなくて不安だったけれど、違うことが当たり前で個性豊かな人たちとの出会いで世界が広がりました。

一人一人の新たな発見から偏見をなくし、

「自分らしさを殺さない」そんな世の中にしていきたいと思います。私はこれからもっともっと学んで、パワーアップした姿で、いつか彼らに再会したいと思います。

最初の質問に改めて答えます。

「貴方は男性ですか。女性ですか。」

「私は私、吉田輝来良だ。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、今回の主張を、過去の私のように悩んでいる人や、「LGBTQ」「多様性」について少しでも興味がある人に届けたいと思います。なぜなら、インターネット・SNSが日常の一部になり始めていても、「多様性」などについて自らの経験・思いを含めて発信している人がまだまだ少ないと感じているからです。

情報量が少なかつたために、誰にも相談できず、自分自身悩みすぎて心を病んでしまったことが、今も頭に残っています。同じような思いをした人、している人の力になればと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ずっとそばに

福島県 須賀川市立小塩江中学校 3年

山河 ひなた

みなさんは、動物を保護したことはありますか。私は、今まで犬猫合わせて10匹ほど保護し、お世話してきました。私の家は山の上にあるのですが、山は、捨て場所として最適なのでしょう。毎年春になると誰かが犬猫を捨てていきます。当然、その人を私が見ることはなく、見るのは、その人が立ち去った後、不安と空腹で鳴き続けている哀れな犬や猫の姿です。

ある日、生後何日かの双子の猫を保護しました。すぐに捨て猫だと分かりました。捨て猫は野良の子と違って、じっとしているからです。1匹は涙を流し、もう1匹は衰弱して鳴くこともできませんでした。すぐに毛布でくるんで家に連れ帰り、寝床を温かくして体温が下がらないようにしました。そして、夜中に何度も起きて「頑張っ。」と言葉をかけながらミルクをあげました。しかし、衰弱していた方は朝日が昇る頃虹の橋を渡ってしまいました。私は、冷たく硬くなった小さな体をなで、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。片方の子は、まるで「逝かないで」と叫んでいるかのようにずっと鳴いていました。悲しかった。悔しかった。そして、こんなにも一生懸命保護している人がいる裏で、簡単に捨て、ホッとしている人がいるのは本当に不平等だと思いました。

環境省のホームページによると、昨年度日本全国で保護施設や保健所が引き取った数は、犬が32,555匹、猫が53,342匹、合計85,897匹だそうです。そのうち、飼い主から直接引き取った数は、犬猫合わせて13,703匹。全体の20パーセントが飼い主からなのです。かわいいから来てもらったはずなのに。死ぬまで愛すると誓ったはずなのに。動物は人間のおもちゃではありません。

最近、コロナの影響でおうち時間が増えたことでペットの需要も増えたというニュースを耳にしました。寂しいとき、疲れたとき、ペットは心を癒やし、暮らしに潤いを与えてくれるでしょう。しかし、中には「リモートが終わって世話ができない」「思っていたのと違う」などの理由で、飼って1日、2日で手放してしまう人もいます。私は、強い憤りを感じ、どうしたら動物を捨てる人がいなくなるのだろうと考えました。そこで、ペットを飼う前に確認することとして、私から四つの提案をしたいと思います。

まず一つ目に、家族全員で動物カフェに何度か行ってみることです。動物を初めて飼う場合、家族の誰かにアレルギーがあるかもしれません。ですからそこで動物に触れてみてチェックをします。また、動物を譲渡しているカフェでは、お試し期間を設けているところもあり、家族と動物の相性を見ることもできます。

二つ目に、お世話できる頭数の限度を明確にすることです。計画的な避妊・去勢手術は飼い主の義務です。

三つ目は、高齢や病気がちな一人暮らしの方などは、何かあったとき、親戚や近所の方にすぐにペットを託せるようお願いしておくことです。日頃から他の人にペットを慣れさせておくとも良いと思います。

四つ目に、費用を計算することです。ある保険会社の調査によると、1年間にかかる費用は犬で約48万円、猫で約23万円だそうです。犬や猫なら15年ぐらいは生きるのです。継続可能かよく考えてみてください。

いろいろ検討した結果、不安がある場合には、「飼わない」という選択も私は愛情の一つだと思います。

昨年度、学校に動物愛護センターの方が来てくださり、お話を聞くことができました。保護された動物たちは、ある程度健康で人慣れしていれば譲渡会に出され、新しい飼い主の元で暮らすこととなりますが、それが叶わなかった子たちは、殺処分されます。全国で年間32,743匹。我が福島県は全国でワースト2位です。私は将来弁護士になりたいと思っています。動物愛護法に詳しく、動物を守り、動物に対する誤った考えを正すことのできる弁護士です。命の重さは人も動物も同じ。大好きな人のそばにずっといたいのも一緒です。私は変えたい。この不名誉な数字を。私は救いたい。一生懸命生きようとする一つの命を。ペットをお考えのあなた・今飼っているあなたにもう一度伺います。「命を飼う覚悟、ありますか。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、今ペットを飼いたいと考えている方、現在ペットを飼っている方に届けたいです。今飼っている方は、終生大事にして「ずっとそばに」いてあげてほしいです。これから飼いたい方は、15年から20年ほどの長期間になりますので、ペットになる子の個性や家族との相性などじっくり考えて、一つの命に責任が持てるのかよく検討していただけるとありがたいです。悲しい思いをする動物が少しでも減ることを願います。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



みんなと違う

茨城県 茨城県立古河中等教育学校 1年

しめかけ あいり
七五三掛 愛莉

「みんなと違う」

この言葉は、私にとっては褒め言葉でした。

私は、一歳から五歳までの間、父の仕事の為にアメリカに住んでいました。現地での幼稚園、学校では、みんなと違う表現ができること、自分しか持っていないもの、どこにも売っていないものが尊いものだと、友人や先生との関わりの中で感じていました。

でも、帰国して同じ年の子からかけられた「みんなと違う」という言葉が、褒め言葉ではないような気がしました。一緒に遊びたい、仲間に入れて欲しい、そう思った私は、みんなと違わないように、みんなと同じもので遊んで、みんなと同じ絵を描き、みんなが好きなものを好きになれるように、頑張っていました。帰国生であることも、隠してきました。

心のどこかで寂しさを感じながら、私はたびたび Year Book と呼ばれる、アメリカの学校の写真アルバムを眺めました。そこには、さまざまな目の色、肌の色のクラスメイトが写っていました。目の色は、青・緑・茶・黒・・・、肌の色は白・黒・黄色・・・。私は黄色です。

現地の公園で遊んでいる時に、そこにいた子どもに、「She is yellow.」と言われた時、私は黄色人種なのだとわかりました。一人一人の顔が違うように、目や肌の色が違うことは特別なこととは思われず、みんな、私と一緒に遊んでくれました。

Show and Tell という発表の時間には、日本の箸の使い方や折り紙の折り方を説明しました。友達はとても珍しがって、自分たちとちょっと違う文化を楽しんでくれました。家庭料理の紹介では、Miso Soup のレシピを友達のお母さんたちがとても喜んでくれました。英語がよく分からない私に、先生は音楽や踊りで語りかけてくれたこともありました。友達は、絵で気持ちを伝えてくれました。

異国の文化や価値観の違い、その人にしかないキャラクターを、みんなが認めてくれていたのだと、大きくなるにつれ、理解できるようになってきました。

国際化・グローバル化という言葉をもっとよく聞きます。世界に通じる語学力は、とても大切だと思います。これからも一生懸命勉強します。

でもその前に、今の私にでもできることは、自分と違う考えを持つ人を理解し、様々な国の文化や、世界の広さを知ることなのではないかと思います。外国人の人、自分とは違う環境で暮らす人、価値観が違う人、体の不自由な人、私のような帰国生。そういう人を認めて、理解すること、差別をしないことが、グローバル化への第一歩ではないでしょうか。

もちろん、集団生活や社会でのルールを守ることは大前提です。その上で、みんなと違うことも認められる。そんな人間になりたいです。

私は一学年二十一人の小さな小学校で六年間学びました。今通っている中等教育学校は、一学年百二十人です。もしかしたら、私にとってはアメリカから帰国した時と同じくらいの環境の変化かも知れません。出身小学校も、住んでいる地域も、好きな音楽や趣味も違うクラスメイトたち。たくさんの人との新しい出会いに、時々とまどうこともあります。でも、新しい世界を教えてくれる友人や、私を認めてくれる心優しい友人との触れ合いに、幸せを感じています。自分が帰国生であることも、自然に話せるようになってきました。

「みんなと違う」ことが、世界の広さや多様性に触れられるチャンスだと考えられるような、温かい、グローバルな社会、そして、「みんなと違って素敵だね。」と言える社会が未来に待っていたら、私は本当に嬉しいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、帰国生で文化や習慣に慣れることにとまどっている人、そして帰国生を受け入れる人たちに届けたいです。

伝統的な文化を大切にしながら、一人一人の意見を尊重できるような未来を作るために、私はたくさんの人と協力していきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私の母

栃木県 鹿沼市立東中学校 3年

石田 真愛

「まいちゃんのママって日本人じゃないんだ。」一言でした。小学5年生のとき、友達に言われたその一言で、私がずっと母に感じていた違和感が確かなものになりました。その言葉は今でもはっきりと覚えています。

私の母は中国人です。だから日本での常識を知りません。例えば、赤信号なのに車が来ないからと言って信号を無視して渡ってしまったり、電車の中で他の乗客がいるのにも関わらず、大きい声で電話をしたり。「日本人ならば絶対にそんなことはしない。」と気が付いたのは小学3年生でした。母が「非常識な中国人」だと思われたくなくて、学校での行事や集まりがあるたびに、父に「学校に来てほしい。」と頼んでいました。しかし、「バレたくない。」という私の思いは届かず、その友達から情報が広がっていき、いつの間にか、私の母が中国人であることはみんなに知られていました。毎日「中国語喋ってよ。」と面白半分で言われました。「なんで？ なんで、なんで、なんで！? 親が外国人ってそんなに面白い？」知らない人に話しかけられることが苦手だった私は、興味本位で話しかけてくる人も苦手でした。そんな日常が嫌になりました。「こうなったのは母が中国人のせいだ。」と決めつけ、母がどんどん嫌いになりました。「母が日本人だったら。」と考えるようになり、「嫌い」という負の感情と比例して、母との会話が少なくなりました。そして中学1年生になる頃には「ただいま」も「おかえり」も言わなくなっていました。

しかし、中学生になって最初の部活動のときでした。「私のお母さんは中国人だけど、私は中国語を話せないのも、もっと勉強して、母と中国語で話せるようになりたいです。」中国、母、勉強した。自分と同じ学年で同じ部活動に所属していて、背格好も同じくらいの目の前の女の子の自己紹介の内容に驚きを隠せませんでした。「同じだ。」と思いました。しかし、一つ、決定的に違うことがありました。彼女は自分の母をととても尊敬していたのです。それに比べて私は、中国語を話せるのに、そのことを「恥ずかしい」と思い、自分の個性を否定し、自分の心を閉ざしていました。中国語を勉強したいという人もたくさんいるのに、中国語を話せる私はどんなに恵まれているかということに気が付きました。その瞬間、自分に対して猛烈な怒りを感じました。「母が外国人だっていいじゃないか。」何人であろうと私の母であることに違いはありません。だけど私は母を認めようとしませんでした。あの友達の一言で、私は何も受け入れない、理解しようとしめない人間になっていたのです。

少しずつ母との会話が増え、以前のような明るい家族に戻り始めたとき、新型コロナウイルスが世界中に広がっていました。コロナウイルスについてのテレビの報道を目にするたびに「日本って緩いんじゃないの。中国なんて14億人も人があるのに最近、感染者は更新してないよ。」と言います。確かに、中国の完璧な感染対策はととても尊敬します。だからと言って日本のやり方が間違っているとは思いません。もし、小学5年生の私が母のこの言葉を聞いていたら、きっと強く反発したと思います。ところが今は、母の言葉を冷静に受けとめ、両方の立ち場に立って考えるようになったのです。そのことに気が付き、自分の将来について考えるようになりました。

グローバル化が進む今、「通訳とかがいいと思うな。」と、よく母に言われます。しかし、グローバル化と同じくらい情報化も進んでいます。通訳もAIが行う時代です。そこで私は「AIを造る側になればいいのではないか。」と、思いました。自分のようにそれぞれの国の人々の思いを理解し、伝えることができる、温かみのあるAIの開発に携わり、私は日本と世界をつなぐかけ橋になります。AIをローマ字読みすると「アイ」となるように、私は「アイ」のあるAIを造ります。

母を恥ずかしいと思っていた私はもういません。今、ここにいるのは、母を心から尊敬し、過去の出来事を未来につなぐ石田真愛です。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同じように、親が外国人であるということに悲しい思いや経験をしている人に届けたいです。私の主張を通して、少しでも励みになったら嬉しいです。「こんな考え方もあるのだな。」と見方を変えて、これからの人生に希望を見つけてもらえたら幸いです。また、周りに私のような人がいるという人にも伝えたいです。何気ない一言で、誰かを傷つけているかもしれません。単なる言葉ではなく、背景にある思いをも伝え合える未来をつくりたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



「普通」が人を傷つける

埼玉県 三郷市立北中学校 1年

アウク ナナ エルシー

私は、ガーナ人の父と日本人の母を持つハーフです。私は人種差別について思うことを伝えたいと思います。

人種差別は昔から今もずっと続いている人権を傷つける問題の一つです。このような差別は特別なことではなく、実は私達の意外とすぐ近くで起きているのです。そして、その多くは、無意識の内に差別が行われているということを私は強く伝えたいです。

人種差別と聞いてみなさんは何を思いましたか。社会科の授業で、アパルトヘイトについて習い、それを思い浮かべる人も多いでしょう。しかし、その内のどれほどの人がそれを身近な問題として捉えているのでしょうか。おそらく、とても少ないと思います。世界的な問題でもある人種差別は、世界中の人々が自分達も関係があることとして捉え、考えなければいけない問題だと私は思います。

私は、日本人の見た目とは違い肌が黒いです。私が小さい時には、「なんで肌が黒くて、髪がくるくるなの？みんなと違うんだね。」と言われたことがあります。それまでは自分の見た目や親について気にしていなかったけれどそう言われてから「自分はみんなと違うんだ。普通じゃないんだ。」と思うようになりました。そのことで自分に自信がなくなり、自分が嫌いと感じることもありました。みんなに見られたくないと思う気持ちが強くなりました。そして、次第にハーフであることがコンプレックスになったのです。他人が自分をどう見ているのか、どう思われているのか、その時の私は、他人の目を通して自分を見ていたのだと思います。容姿について言われることが、日に日に怖くなっていき、相手が、無意識に放った言葉で、人がすごく傷つくことがあるんだなと感じたことを今でも覚えています。そんな時に思い出したのは、他人の目から見るのではなく「自分が」どう思うかを考えて生きている私の両親のことでした。私の父はいつも言っています。「肌の色が違うとかお金があるかないかではない。何より大事なものは心なんだ。」と。自分らしく自信を持って生きている私の両親の姿は、すごくカッコいいと思ったし、そこからパワーを貰えました。「こんなことで悩んでいちゃダメだ。自分らしく生きるんだ。」そう思えたのです。

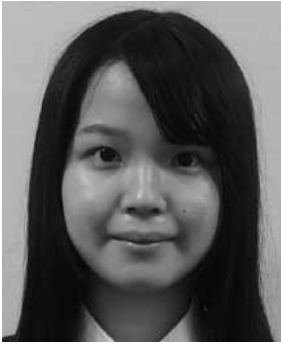
日本は島国で、あまり国際感覚が豊かな国ではありません。自分達とは違うと自分達とその他という線引きをしているのではないかと感じてしまうことがたくさんあります。例えば、色鉛筆。この中には当たり前のように肌色と呼ばれる色が入っています。私は、肌の色はこの色じゃないとダメなんだ、こうあるべきなんだと感じてしまいました。このようなことは、日本も人種差別と向き合って変えていくべきだと思います。

人間は生まれた時から自由や平等、そして生きる権利を持っているのです。その人権を無意味に奪われたりしてしまう背景には、肌の色や目の色などだけで本来同じであるはずの人間が線引きされているということがあると思います。ニュースでも黒人差別を受け、命を落としてしまった方を見ました。日本では“普通であること”を皆が無意識に求めていると感じます。その普通という言葉に傷つく人がいるのです。そんな犠牲者をなくし、素晴らしい未来に少しでも近づくためにも、違いを認め合い、心でつながれるといいです。

一日でも早く世界で苦しむ人がいなくなり、平和でみんなが仲良くなることを願っています。私もみんなを理解できるように、心を見て心でつながれる人間関係を築いていきたいです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

今年、オリンピック・パラリンピックが日本で開催されています。全世界から、様々な人が、一堂に会するこの祭典が身近にあることで、昔から今もずっと続いている人種差別について、今一度、皆が考えてくれるきっかけになればいいと思ったからです。無意識に求める「普通」が人を傷つけることがあるということを伝えたいと思いました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

兄の話

東京都 東京都立武蔵高等学校附属中学校 3年
坂口 礼佳

私には今年で二十歳になる兄がいる。一八〇センチを超えるすらっとした長身に、眼鏡のよく似合う端正な顔立ちをしている。学生時代は陸上の長距離の選手をしていたので、走ることが得意だ。たまに作ってくれる炒飯はとても美味しい。おまけに記憶力が良く、家族で出かけた日の日付を絶対に忘れない。私が体調を崩すと、心配してすぐに布団を敷いてくれる。大好きな、私の自慢の兄だ。

しかしこれまで、私は人に兄の話をしようとはしてこなかった。兄は、どこにいても独り言がやめられない。小学生用の計算ドリルにも苦戦する。苛立ちを抑えられずに人や物に当たったり、自分で自分のことを叩いたりしてしまう。人の話が理解できているように見えて、本当は何もわかっていないことが多い。

私の兄には自閉症と中度の知的障害があるのだ。

物心つく前、私は多くの時間を兄とともに過ごしてきた。兄にその日の天気を教えてもらい、漢字を練習する兄の横に座り見よう見まねで字を覚えた。当時の私にとって、五歳上の兄は何でもできる憧れの人だった。だからこそ、私は長い間兄が障がい者であることと上手く向き合うことができなかったのだ。

真新しいランドセルを背負って私が学び舎の門を初めて叩いたとき、兄は小学六年生になっていた。私の通う小学校では六年生が一年生に学校での過ごし方を教えるならわしがあった。それを聞いた私は、自分の兄を周りに紹介できる日を今か今かと楽しみにしていた。ところが、私の教室にやってきた六年生の生徒の中に兄の姿はなかった。兄を見つけられずに戸惑う私に、先生は「お兄ちゃんは六年生とは別のクラスで頑張っているんだよ。」と告げた。兄が他の「六年生」とは異なる「障がい者」として見られている事実が、針のように私の心を刺した。

それから徐々に、世間が兄を「障がい者」として見ていることを実感する機会は増えていった。バスやコンビニで大声を出し、周囲から避けられている兄を見ると、胸がぎゅっと締め付けられた。実際に「障がい者」である兄は、「障がい者は健常者と同じようには生きられない」という世間のイメージに守られ、また助けられてもいた。しかし、そのイメージこそが兄や障がいを持つ人を苦しめていることも感じた。社会は、障がいのある人の持つ「障がい者」のイメージと結びつかない部分を受け入れがたいのだ。次第に私は友人から兄のことを聞かれる度に、曖昧に言葉を濁すようになっていった。友人が兄を「障がい者」として見たその瞬間に、兄は私の「自慢のお兄ちゃん」ではなくなってしまった気がしたのだ。

ある日、夕食を食べ終えた私は、食卓で兄が折り鶴を作る様子をぼんやり眺めていた。ふと私は机の上に置かれた鶴を手を取った。四年前、兄は就職を目指していた作業所の仕事のひとつ、紙折りをできるようにするために、鶴を折り始めた。兄に折り鶴の作り方を教えたのは私だった。当時の兄は折り紙を半分に折ることもままならなかった。作業所に勤めるようになってからも、兄は毎晩鶴を折り続けた。あのころ、兄が何十分もかけて作っていた不格好な鶴が脳裏に浮かんだ。しかし、いま手に取った鶴はとても綺麗で、ピンと伸びた羽は今にもはばたかんばかりだった。

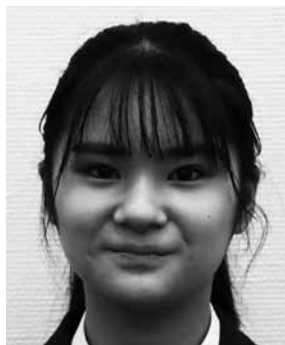
その時、私は思い出したのだ。兄は私の何倍も努力のできる人なのだという。真っ黒になった計算ドリル。履き古したランニングシューズ。折り鶴で一杯になった紙袋。私はこれまで、兄の「障がいを持っている」という一面に囚われ、兄の持つ沢山の魅力を忘れてしまっていた。兄の魅力は、障がいがあるというたった一部分に負けるようなものではないのだ。私はその時、兄の持つ障がいを知ってから初めて、兄のことを誰かに話せるような気がした。私の自慢のお兄ちゃんを皆に知ってほしくなった。

障がいも、能力も、性別や考え方も、その人の一部分でしかない。その一部分で人のすべてを判断することはできない。私は、大好きな人の持つ、多くの側面を知り、それを尊重できる人になりたい。

私はこれから、兄の作った料理を食べ、兄と一緒にサッカーの応援をして、兄のゲームを借りて、兄の隣で生きていく。少しずつ、人に兄の話ができるようになるかもしれない。私がずっと話したかった、兄の話を。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

兄の障がいを知ってから、私は私の知る兄の姿と世間から見た兄の姿の間のギャップに何度も悩み、その時々違った感情や考えを持っていました。しかし、その悩んだ時間があつたからこそ、私は15歳の私としての人との向き合い方、そしてなりたい自分の姿を見つけることができたのです。私の家族や沢山の思い出によって少しずつ形になっていった私の今の考えと、大好きな兄の話を誰かに伝えられたらと思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

心の石

神奈川県 平塚市立春日野中学校 2年

前田 乃裕

言った言葉は砂に書いた文字、言われた言葉は石に刻まれた文字。皆さんは自分の一回一回の発言について考えたことがありますか。

私は最近、SNSのコメント欄に書かれる誹謗中傷を見る回数が増えてきたような気がします。それはなぜでしょうか。そう考えた時、私は便利になった世の中と新型コロナウイルスが原因だと思いました。

私たちにとって今の世の中はとても便利です。スマホを使い、指一本で数多くのことが出来ます。でも、その一方で指一本で相手を傷つける言葉を簡単に書き込めるようにもなりました。人は強くありません。直接は勇気がなくても言えないようなことが簡単に言えるようになる時、人はそれを利用するのです。簡単だから、自分が書き込んだとは分からないだろう、と。簡単な分、直接言う時より言葉を選ばず、思ったことをそのまま言えます。ムカつく時、自分の意見を言いたい時があるのは当然です。今は、新型コロナウイルスという目に見えない敵のせいで我慢などが多いと思います。今までの生活から大きく変化したことでストレスも多いと思います。心も体も常にコロナに警戒し、疲れてしまうと思います。でも、いくらコロナに苛立ってもそれをぶつけることができない。だから、溜まっていくストレスをぶつけられるのが人だと勘違いしてしまうかもしれません。でも、そんな時すぐにスマホを手取るのは違います。一度立ち止まって考えてみてください。自分は全てを知っているのか。第三者の自分が言うことなのか。自分がその人だったらどうか。SNSは人が苦しむためにあるわけではありません。人が楽しむためにあります。その楽しさに目を向けてみてください。

楽しさに時間を使ってください。誰かを苦しめることに時間を使うのがもったいないということに気づいてください。顔が見えず感情も分からない人から受け取る文字が与える怖さは皆知るべきです。これはSNSだけではありません。私は小学四年生の時、陰で悪口を言われていたことがあります。その時私を傷つけたのは「うざい」という一言でした。それから四年が経っても、その一言は忘れられません。友達と話していても、この人にも同じことをまた言われるのではないかと。そう思うと人を信じたり頼ることが簡単でできなくなりました。まるで石に刻まれた文字のようでした。たった一言が人を傷つけるのです。時には命だって奪う力になってしまうのです。

予想もしていなかった言葉に傷つくことは誰にでもあります。自分は何もしていなかったら余計になぜだろうと考え、苦しくなってしまうかもしれません。でも、自分は世界でたった一人です。同じ人はいません。だから堂々としていてください。自分を大切にしてください。人には家族や友人など愛してくれる人達が必ずいます。これから見つけることもできると思います。傷ついてもその光を自分で隠すことは絶対にしないでください。また、自分を傷つけたり、命を落としたりも絶対にしないでください。たった一つの命です。命を落とす前の感情が苦しい、辛いなどになるのはもったいないです。楽しいことをたくさん見つけてください。

最初に書いた、言った言葉は砂に書いた文字、言われた言葉は石に刻まれた文字。この言葉を国語の先生から教わった時、私は良い方にも捉えられると思いました。感謝された時、褒められた時など何気ない一言で言った側は覚えていなくても、言われた側は嬉しい記憶として心の石に刻まれます。そんな温かい言葉が皆の心の石に刻まれるといいなと思います。言葉たった一つが人を傷つけます。私の主張でSNSの使い方や発言を意識する人が一人でも増えたら嬉しいです。誰もが生きやすい世の中になることを願います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

きっかけは、作文にもある通り国語の先生の言葉です。この言葉を聞いた時、私を含め、皆に再認識して欲しいという思いから書きました。

この作文は、スマホを使う人はもちろん、誰かの言葉で今傷ついている人にも届けたいです。

この作文は、書くにあたって私自身も自分の言動を見直す良い機会になったと思います。これからは自分が発する言葉一つ一つを考えていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「ありがとう」って言いたくて

新潟県 柏崎市立南中学校 3年

小林 朱珠

みなさんは、命についてどう思っていますか。誕生を祝福される命や、どこかでひっそりと消えてしまう命。様々な命の形があると思います。そんな命について考えるきっかけになった体験が私にはありました。

時は遡ること十数年。当時五歳だった私の母のお腹に、二人目の弟の命が宿り、検診に付いて行った時のことでした。見たことのない機械、思ったよりも明るい雰囲気。そんな中でワクワクしながらエコーを見ていました。どれが頭で、脚で、腕なのか……。頭にたくさんのハテナを浮かべながら見ていると、次第に先生の顔が険しくなり、それにつれて漂う雰囲気も重くなっていきました。そして先生が放った言葉。

「あー。赤ちゃんの心臓、止まっちゃってるね。」

当時五歳の私はすぐに理解ができませんでした。「この人何言ってるの。心臓が止まっているってどういうことなの。」エコーを見ている時よりも頭の中がハテナでいっぱい、どうリアクションしていいのかわかりませんでした。そんな私に、母は悲しいはずなのに、優しい声で言ってくれたのです。

「赤ちゃんね、死んじゃったんだよ。」

病室には、生まれてくる赤ちゃんのためのかわいい服や紙おむつではなく、小さな小さな棺だけが用意されていました。その棺に入ってやってきた赤ちゃん。その姿はただ、気持ちよさそうに寝ているだけの赤ちゃんでした。

お葬式ではこれまでにないくらい泣きました。人の「死」というものがやっとわかったのでしょうか。もう絶対に、その赤ちゃんが産声をあげることはないということ。・・・

私はこの頃から将来の夢は助産師になることで、その夢は今でも変わっていません。分娩室に響き渡る、赤ちゃんの力強い産声。尊い人の命が誕生する瞬間。それは、その場にいる全員が笑顔と喜びの涙で溢れることなのでしょう。もちろん、助産師は出産に関わる仕事だけではありません。幅広い分野で活躍する助産師は、私にとって魅力溢れる仕事なのです。

ある産婦人科医院の見習い看護師の漫画があります。その中の一場面、流産をしてしまった人の話で、このような言葉がありました。

「その命にはその命の使命があった。」

まさに、死んだ弟は、私に助産師になって生命の誕生の瞬間に立ち会うという夢を与える、大きな使命を果たしてくれたと思うのです。

ところで、今の世の中で本当に命を大切に生きていますでしょうか。流産や死産、病気・事故・災害など生きていたくとも逃れられない不可抗力の死もあります。その一方で、虐待や自殺、人が殺めてしまう事件など、望まれない形で尊い命の灯が消えてしまうことがあります。現代では、ネットを使ってでも簡単に人を傷つけることができってしまう時代です。それを利用して人を苦しめることは良いことでしょうか。自分も相手も親からもらった大切な命に変わりはありません。その命を大切にすること、これが今生きる私たちに課せられた使命なのではないか、と私は思います。

私のように身近な人が亡くなり、そこから夢を見つけて立ち直ることができる人だけではありません。もちろん私の母もその一人でした。でも、悲しみの中で見つけた私の夢を応援してくれています。

「お母さんは、赤ちゃん死んじゃってすごい悲しかったけど、その中で朱珠は夢を見つけたもんね。妊婦さんを支えられるような助産師になれるように頑張っただけ。」と。

笑顔で優しく接し、命を任せられる責任を持ち、そして私がいることで安心感を与えられる。そんな人に私はなりたいです。命の尊さ、大切さを伝えられる、そんな助産師を目指して使命を果たしたいです。医療がどんなに進歩しても時には厳しい現実もあることでしょう。それでも、どんな時でも心からこう言いたい。

「すべての赤ちゃんにありがとうを。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

主張の中でもある通り、命を軽く見ている人に伝えたいです。今の世の中、新型コロナ、ネット社会と多くの方が心の傷をつけたり、つけられたりしていると思います。なので、1人1人が自分の行動、言動を見直して、命を大切にしてほしいです。そして、流産、死産を経験された人たちに、それは失って悲しいことだけじゃなくて、赤ちゃんがお母さんのもとの何かしらの「使命」をもってやって来たんだということを届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

認め「愛」の社会を

長野県 安曇野市立三郷中学校 1年

松本 奈穂

皆さんには、好きなことがありますか。私は絵を描くことが好きです。そのため、中学校では美術部に入っています。しかし周りからのある言葉に疑問を感じていました。

「美術部って座って絵を描くだけでしょ。」

「運動部と違って楽で疲れないしいいよね。」

この言葉を入部してからよく言われました。多くの人が、運動部に入るとえらい、すごい、文化部は楽をしている、運動ができない人が入るといったイメージがあるのです。その言葉で私はいつも、なんだかもやもやした気持ちになり何も言い返せずにいました。

まず、美術部が何をしているか皆さん知っていますか。ただ絵を描いて遊んでいるわけではありません。皆の部活応援ポスターを描いたり、文化祭のステージバックや展示物を作ります。それに毎月課題も出ます。覚える技術もたくさんありますが、みんなと協力し合えるとても楽しい部活です。集中力、粘り強さも必要で、うまくなりたい気持ちは他の部活と一緒にです。どの部活がすごい、すごくないということはないのです。私は小さい頃からあまり体が強くはありません。しかし体を動かすことは嫌いではないし、体育の授業もいつも楽しんでやっています。もちろん運動がよくできても、文化部に入っている人はいます。つまり、人にはそれぞれの事情や思いがあってやりたいことも人によって違うということです。

また、部活には他にもこんな思い込みが存在します。実力のある人がその部活に入り、そうでない人がなぜ入ったのかと思われてしまうことです。未経験で入った人でも新しいことに挑戦したい、これからうまくなりたいという人もいます。

では、なぜこのようなことを思ったり言ったりしてしまうのでしょうか。それは、自分の考えが多いほうの考えにいつの間にかつられてしまっていて、言われた人の気持ちは深く考えられていないからです。多くの人が持っている考えが全てだと思ひ込み、それに惑わされて、相手のことを決めつけ、知らずに相手を傷つけてしまっているのです。偏った考えにならないためには、どうすればいいのか。まず自分が意識を変え、相手の気持ちを理解し、思いやりをもって接してください。そうすれば、自分も周りも少しずつ変わっていくのではないのでしょうか。

やりたいことは上手、下手に関係なく、その人の選んだことなのでそれを尊重し理解して欲しいと思います。勝手な思い込みをして、それを言ったりすることはよくありません。

こんな風に考えるようになってから私は、美術部として自分の部活にも自信を持てるようになりました。もっと努力して技術を学び、みんなに認められるようになりたいです。

今まで話してきたことは、部活だけのことではありません。社会の中にも様々な場面でそのような思い込みは多く存在します。例えば、体型、服装、性格、仕事、趣味などへの偏見です。人はみんな違うのです。見た目やイメージだけで判断しないでください。個性を認める心を持つことが大切です。

もっと温かい気持ちを持ち、社会全体が大人も子供もお互いを認め合い、皆一人一人が胸を張って輝ける、そんな過ごしやすい未来になりますように。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、よく周りの人に言われるある一言です。「美術部は楽だから」。このような部活への思い込みは、意外とたくさんの人の中に存在していると思います。自分は意識していなくても、自然と行動や言動に出てしまいます。なので、もっと多くの人に、認め合う「認め愛」の心を持って欲しいと思って、この作品を書きました。私の思いがたくさんの人に届き、思い込みをしない過ごしやすい社会になっていくといいなと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

はると池

静岡県 御殿場市立高根中学校 3年

勝又 悠翔

いま、僕は新東名高速道路の上に立っています。高速道路からは、西に富士山を臨み、東には僕たちが住む高根地区の豊かな田園風景が広がり、僕の家も見えます。そして、足下の高架橋の脇には、希少生物が住むビオトープがあります。

令和3年4月10日、新東名高速道路新御殿場インターチェンジが完成しました。これにより、静岡県東部と山梨県とをつなぐ交通網が完成しました。

この10日ほど前、インターチェンジの完成を記念して、新東名高速道路を歩く機会がありました。道路を歩いていた人からは、「これで、ここもにぎやかになるね」とか「もし自分が病気になっても、この道があれば大きな病院にすぐに行ける」など、様々な声が聞こえました。このとき、僕は昔の自分を思い出していました。

僕の家には「はると池」がありました。はると池とは、僕が生まれたお祝いに祖父が造ってくれた池です。池には多種多様な動植物が住んでいました。絶滅危惧種で冷たい水を好むホトケドジョウや、夏になるとまるで夜空の星のように美しく輝くゲンジボタル、お腹のふくれたイモリのメスや水面からちょこんと顔を出しているミズカマキリなど、かわいらしい生物を四季を通して眺めることができました。僕は祖父といっしょに毎日この池の管理をしてきました。水の量の調整や、水に不純物はないかなど調べ、池の生き物の生命を守ってきました。

ところが、新東名高速道路を建設するために、はると池がつぶされることになったのです。4年前、祖父からこの話を聞いた時、僕はその意味を理解することができませんでした。道路なんかのためになんで大切な池がつぶされなきゃいけないの？はると池には珍しい生き物がたくさんいるのに、何の権利があってその命を奪うの？道路ができると便利になるっていうけど、そんな大人たちの勝手な都合じゃん。そう思い、僕は無性に腹が立ちました。祖父の話には続きがありました。「でも、その代わりに、ビオトープといって、はると池の2～3倍もある池を造ってくれるんだって。」

祖父に詳しい話を聞いてみると、はると池にいる生物が貴重なため、できる限り彼らをビオトープに移す計画が進んでいるということです。僕は、またあの光景が見られると思うととてもうれしかったのですが、ビオトープは道路の脇に造られるらしく、環境面が心配でした。車が通るせいで水質が悪化したり、空気が汚れたりして、植物が育たなくなるのではないかと、環境の変化に弱い生物は生きていけないのではないかと、胸が痛みました。

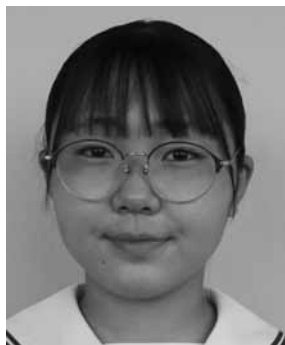
そこで、僕は自分のやるべきことを考えました。それは、僕がビオトープに通い、ごみや藻などを取って、少しでも池の環境を守るということです。これは僕にしかできないことです。それからは毎日忙しく池に通いました。自分でも不思議でしたが、僕はこの日常をととても気に入っていました。その後、ビオトープの周りには、セリやハナイカダ、タマアジサイなど四季折々の美しい花が咲き、水辺にはサワガニやアオガエルが楽しそうに歩き、池の中ではホトケドジョウやメダカが気持ちよさそうに泳いでいます。

最初僕は、大人のせいで池がただ壊されるのだと思いこみ、むやみやたらと腹を立てていました。そこには自分のことしか考えていなかった僕がいました。でも、ビオトープに通い、ごみを拾い環境整備をしていくうちに自分の気持ちの変化に気づきました。地域開発と環境保全は両立できるのです。

近年世界では大規模な森林伐採や二酸化炭素の排出による地球温暖化の影響で、砂漠化や海面上昇など多くの環境問題が深刻化しています。でも、僕は人類の英知を信じています。ビオトープを通して、中学生の僕が環境保全を進めることができるのだから、大人の人たちもきっと環境問題を解決してくれるはずです。もちろん僕たちの世代も時代をつなぐ努力をしていきます。僕のビオトープのように、地球がいつまでも美しい星であるために、世界中の人たちと、みんなの暮らしや自然について真剣に考えるときが来ているのです。未来は僕たちの手の中にあるのです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

僕の誕生記念に祖父が造ってくれた「はると池」。僕は、祖父と共に池の管理をし、そこに生息する動植物を見守ってきました。4年前、この池が新東名高速道路の建設区域に入りました。希少生物が棲んでいたはると池は、そのためビオトープとしてインターチェンジの中に移転されました。生まれ変わったはると池を管理しながら、環境保全と地域開発の両立は決して不可能ではないと実感したことから、僕はこの作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

将来の夢

富山県 舟橋村立舟橋中学校 3年

澤武 未依

私の母は、小学校で給食を作っています。小学校の頃、給食の時間にみんながおいしそうに食べているところを見るたび、少し誇らしく思っていました。

昨年、新型コロナウイルス感染症の影響で、自宅で過ごす日々が続きました。学校が休みになり母の仕事も休みになりました。家にいることが多く、時間を持て余していた時に、母がスイーツ作りに誘ってくれました。チーズケーキや豆腐ドーナツなどを作るうちに、少しずつ料理に興味をもち始めました。スイーツばかりではなく、少しずつ夕食の準備を手伝うようになりました。ある日、唐揚げを作る時に、母が洗って開いてある牛乳パックを取り出して、それをまな板がわりにして鶏肉を切りはじめました。私は疑問に思い、なぜ普通にまな板を使わないか聞いたところ、鶏肉にはサルモネラ菌がついているからまな板を汚染させないために牛乳パックをリサイクルしているということでした。食中毒については家庭科の授業で習ったので知っていたのですが、実際に見たり聞いたりすることによって、より理解することができました。母は家族の食事をつくる時に、栄養バランスだけではなく、安全面も考えて調理していると知ってさらに「食」について興味が湧きました。健康を保つために、そしておいしい食事を作るために、たくさんの知識をもっている母をすごくうらやましく感じました。

私だけではなく、姉や兄も最近「食」に深く関わっています。姉はコロナ禍で大学生になりました。県外の大学へ入学したため、一人暮らしをしています。知らない土地で外出もできない状況のため、自炊をがんばり、毎日手作りした料理の画像を母の携帯電話に送ってきていました。姉が作った料理は、どれも一生懸命さが伝わるおいしそうなものばかりでした。高校生の兄は、今までやったことがないのに動画を見ながら魚をさばくことにチャレンジして刺身にしてくれました。家族みんなで驚き、感動しながら食べたことを覚えています。

今までは、作ってもらうことも食べることも当たり前で深く考えることがありませんでした。家にいる時間が長くなったからこそ、作って食べるという当たり前の行為に向き合えたのだと思います。そして退屈な日々が反対にキラキラ輝いた毎日に変化していったのだと気づきました。「食」は体を作るだけではなく、心のバランスをとるために重要な役割を担っているとわかりました。

そこで私は、将来「食」に関わる仕事に就きたいと思うようになりました。父母に相談したところ、母のように調理師として実際に調理する仕事以外に、必要なカロリーや栄養素などを考えながら献立を決める栄養士という仕事があることを教えてもらいました。栄養士になるには資格を取る必要があります。そこで、私は自分の夢を叶えるために、これからしっかり勉強して、栄養士の資格を取得できるように大学進学を目指します。

私は高校生になったら、自分で弁当を作ろうと思っています。毎日、栄養バランスや彩りを考えながら献立を考えたいです。そして将来、栄養士の資格を取得した時には、多くの人に心も体も「食」で笑顔いっぱいになってもらえるようにがんばりたいです。そしてもう一つの夢は、母といっしょに働くことです。私が考えた献立を母が作り、たくさんの人に幸せを届けられたら最高に嬉しく、今からとても楽しみです。多くの人の「食」に関わり、豊かな生活の手助けができるような大人になりたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

今回の発表を通して、将来、栄養士の資格を取得したいと思う気持ちがより強くなりました。調理師の母と一緒に働き、「食」で多くの人が笑顔あふれる生活を送れるように全力で取り組みたいです。昨年、家族との時間を長く共有できたことで、母の食事作りに対する姿勢や技術を間近で見ることが増えました。今は知識も技能も未熟ですが、将来は母を超えられるように今後しっかり勉強して、たくさんの人に幸せを届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

コロナ禍で感じた『学ぶことの大切さ』

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 3年
土山 桃愛

「放射能がうつる！ 広島に帰れ！」

これは私の母が私と同じ中学三年生の時に同級生から言われた言葉です。当時、母は広島県から富山県に転校してきたばかりでした。広島に住んでいただけで心ない言葉を言われ、とても傷ついたそうです。

しかし、新しい学校生活に慣れてくると、同級生たちは原爆について正しく理解していないことに気が付きました。その時、母はこう感じたそうです。「知らないということは、とても怖いことだ」と。

大人になった母は石川県のテレビ局に就職し、石川にもたくさんの被爆者がいることを知りました。

戦後七十年が過ぎ、被爆者たちが高齢化していくのを見て、被爆体験を後世に伝えようと被爆証言を集めたDVDを作りました。

撮影をする時、私も連れて行ってもらいました。直接被爆者に会って聞いた証言はテレビや本よりもずっと壮絶でした。当時、十五歳の少年兵だった松原隆さんは原爆が落とされたばかりの広島でケガをした人々の救援活動をしました。「水を飲ませたら死んでしまう」と聞いていたため、大やけどをした男性が濡れた手ぬぐいをチューチュー吸っているのを見て、手ぬぐいを取り上げました。

しかし翌朝、その男性が死んでいるのを見て「何で水を飲ませてやらなかったんだ」とひどく後悔したそうです。「今でも手ぬぐいを取り上げた時の男性の恨めしそうな目が忘れられない」と泣いていました。

戦争は遠い昔の話だと思っていた私は、今も苦しみ続けている松原さんを見て、涙が止まりませんでした。

さらにショックだったのが、松原さんは八十歳を過ぎるまで自分が被爆者であることを隠し続けていたということです。

それは、全国的に見れば戦争による被害が少なかった石川県では、原爆についての理解が乏しく、被爆者は偏見の目で見られたり、差別を受けたりしたからです。

今、世界は新型コロナウイルス感染症と闘っています。未知のウイルスに対する不安と恐怖でネットにはデマが飛び交い、アジア人への差別や暴力事件も起きています。

周りでも「感染者が出た学校の子だから、近付きたくない」、「クラスターが出たのはどこ？」という声を聞く度、私は胸が痛みます。差別と偏見におびえ続けた松原さんの苦しみが少しだけわかったような気がしました。

人は誰でも未知なる物に遭遇すると、不安や恐怖を感じ、拒絶したくなります。それは仕方がないことかもしれませんが、人々の間に差別や偏見が広がると、分断や対立が起きてしまいます。

でも、勉強をして幅広い知識を身につければ不安や恐怖は和らぎ、暮らしやすい社会をつくる事が出来るのではないのでしょうか。

私はこのコロナ禍で『学ぶことの大切さ』を強く感じました。

私の将来の夢は、外交官になることです。実際に現地を訪れて学んださまざまな国の文化や考えを日本人に伝えたいです。そして、歴史と文化が息づく石川県で育った者として、日本だけでなく石川県の素晴らしさを広く世界へ発信していきたいと考えています。

差別も、偏見もない、平和な世界を実現するために。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

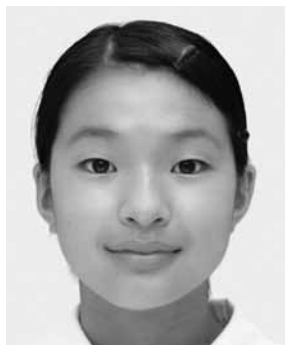
私はこのコロナ禍を平和な社会に変えるチャンスだと考えています。

コロナ禍になり、差別や偏見は人々が未知なるものに対して感じた不安や恐怖から生まれるのだと知りました。

ですから、よく学び、幅広い知識を身につければ、不安や恐怖は和らぎ、差別や偏見をなくす事が出来るはずです。

この思いを私のように大人になる前にコロナ禍を経験した人たちに届け、一緒に暮らしやすい社会を作っていきたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



世界に医療と笑顔を

福井県 鯖江市中央中学校 3年

近江 遥香

「看護師になりたい。」

小学生の頃から、変わらず思っている私の夢です。看護師は、患者さんの生命と生活を支える仕事ですが、仕事という一言に収まり切らない使命のようなものがあると私は思っています。

私が看護師を目指すきっかけとなったのは、あるテレビ番組を見たからです。それは、ミャンマーで治療にあたった「ジャパンハート」を特集した内容で、そこには、日本の医師や看護師が現地の人を懸命に手術している姿が映し出されていました。

ミャンマーの病院は、私が知っている日本の病院とは全く違う、とても質素な造りのものでした。衛生的にも決して恵まれたものではありません。私が一番驚いたのは、手術をしている隣で、患者さんの体に虫が入らないようにと、虫取り網を使ってハエを捕まえているスタッフがいるのを見たときです。「こんな環境で、病と闘わなくてはならない人がいるのか。」あまりの衝撃に、私は声を出して驚いてしまいました。

ミャンマーの病院のこの状況は私の予想をはるかに超えた深刻なものでした。「人が足りない。」「薬が足りない。」「医療器具や環境が整っていない。」このような過酷な状態で治療を受けなくてはならない国は、世界中に約 150 カ国もあるそうです。「すべての人が、十分な医療を受けられる世界になってほしい。ほんの少しでもその力になりたい。」その時、私の夢がはっきりと決まりました。

強く、看護師になりたいと思うようになってから、ジャパンハートのことをもっとくわしく知りたいと思い、ホームページを見ました。そこで初めて知ったこと。それは、ジャパンハートのメンバーは、ボランティアで構成されているということでした。その上、自分のお金で現地に行っているのだそうです。彼らはきっと、仕事として医療を提供しているのではなく、少しでも多くの人々の力になりたいと思って頑張っているのだと確信しました。

ジャパンハートを知って、私は、彼らに少しでも近づき、素晴らしい看護師になりたいと、より強く思うようになりました。「患者さんを笑顔にしたい。」「患者さんとその家族にとって最高のパートナーになりたい。」そして、より多くの人々の、できれば世界中の人々の手助けができればと思います。

少しでも早く、たくさんの人々の力になれるようにするために、中学生の今から少しずつ努力していきたいと思っています。それは、優しさと強さを兼ね備えた人間になるということです。友達や家族に優しくすることが少し気恥ずかしく思ったり、分かっていても行動する勇気がなくて、一歩踏み出せなかったりすることもあります。良いことをするときには、自信をもって堂々とできるようにになりたいと思います。それから、将来、日本の外に出て医療に携わることができるようになったときのために、英語の勉強をもっと頑張りたいと思います。

今の私は、まだ看護師に憧れているだけで、足りないことも知らないことも数多くあります。それでも、何よりも大切な人の命を守りたいという気持ちは強く持っています。ジャパンハートのホームページに書いてあった「一番格差があってはいけないのは、医療だ」という言葉を胸に刻んで、日々努力していきたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

「誰かのためになりたい。」幼いころからの私の願いです。困っている人を見ると声をかける私を、友達は優しいと言います。しかし、私自身は全く特別なことをしているとは思いません。ただ誰かの役に立ちたいだけなのです。この作文を書くことによって、私のこの気持ちがより一層強くなりました。そして、この思いを形にすることができる「看護師」になりたいと、ますます思うようになりました。「一番格差があってはいけないのは、医療だ。」というジャパンハートの言葉を胸に、今できることを一つずつ着実にやっていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「人」という字の二画目に

愛知県 春日井市立岩成台中学校 3年

大野 未結

「医療従事者に感謝」そんな言葉を聞くと、私の心の中にはある人たちの姿が浮かびます。

私の祖父は、私が生まれる前から数えきれないほどの病氣と闘ってきました。そんな病弱な祖父を、弱音を吐かずにずっと支え続けてきた祖母は、いつしか私の憧れの存在となっていました。直腸がんになった祖父は、自分で排便することができず、「ストマ」という人工肛門をつけることになりました。だれもが嫌がる「下の世話」を、祖母は文句一つ言わず、ただひたすら行っていました。祖母がストマを換えている時、私は臭い、汚いという気持ちが先に立ち、逃げていました。当時の私は、祖父の現状から目を背ける、ただの傍観者だったのです。

その後、祖父は認知症になりました。夜中に部屋の電気をつけて祖母を起こす、スムーズに会話が進まない、突然叫ぶ…祖母の疲労は確実にたまってははずです。それなのに、私たちの前では笑顔を絶やさない祖母。私は祖母を助けたいと思いつつも、何をしてあげたら良いのか分からず、おろおろするばかりでした。

そんな時、「おばあちゃんにピアノを聞かせてあげて。」と母は言いました。言われるままに祖母にピアノを弾くと、祖母は今までとは違う、幸せに満ちた笑顔で私の演奏を最後まで聞いてくれました。その日から、祖母のためにピアノを弾くという習慣ができました。そして私は、初めて人のために弾くという喜びを感じるようになったのです。

その後、二度目の脳梗塞で倒れた祖父は、入院生活を始めました。祖父に会った時、どう話せばよいか分からず、お見舞いに行くことに戸惑いと抵抗がありました。「行きたくない」そんな言葉が頭をよぎっていたのです。

私は、祖父と少し距離をおいていました。無口で不愛想、そして「怖い」という印象が強かったのです。ところがある時、「未結はいつ来るんだ？」と祖父が言っていたと祖母から聞きました。祖父は私を待っていてくれたのです。私は、祖父から求められているという事に大きな喜びを感じ、お見舞いに行きたいと思うようになりました。

ある日、病室のドアを開けると、祖父がとても優しい笑顔でこちらを見ていました。チューブやコードに囲まれ、無機質な音に包まれた部屋の中、私たちの顔を見ながら嬉しそうに笑う祖父。それを見たとき、私は全力で祖父の力になりたいと思ったのです。

祖母の手伝いをし、祖父と一緒にリハビリをするようになると、怖かった祖父との距離がだんだんと近づいていきました。

そして祖母が、どんなに辛くても祖父に誠心誠意向き合って介護ができるのは、祖父が稀に発する、「ありがとう。」の言葉に支えられているからなのだと気づいたのです。

そんな祖母の姿が、いま、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、必死に働いている看護師の方々の姿と重なります。

先日、コロナの重症患者を見る看護師の日々を特集する番組を見ました。完全防護し、ガスマスクのようなものをつけて患者と接しなければならぬ看護師さんが発した、「マスクをつけていると、患者に笑いかけ、安心させることが出来ない。」という一言は、私の心を強く打ちました。想像していた「暑い、苦しい、疲れた。」という言葉ではありませんでした。過酷な状況の中、患者の心を第一に考え、動く。そのようなことがはたして私にできるのでしょうか。

人という字の二画目は「支えられている人」三画目は「支えている人」なのだそうです。祖母や、コロナと闘う医療従事者の方々は二画目。私はまだ「一画目の人間」です。けれども、私は祖父の介護を通して、支える側の人々の気持ちを学ぶことができました。ただの傍観者ではなく、「なにかしてあげたい」「喜ぶ顔が見たい」と思うようになり、人から求めてもらえるという幸せを知りました。

祖父が亡くなって、今年で三年になります。祖父母に教えてもらった「人のために行動することの大切さ」を胸に、どんな厳しい現実にも心折れることなく立ち向かい、人のために尽くせる「二画目の人間」を目指していきたいと、私は今、心に強く思うのです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

周りの人につい頼ってしまう、困っている人を見かけても声をかけることができない、「ありがとう」の言葉をうまく伝えられない。そんな経験をしたことがある人は少なくないと思います。そんな「勇気ある一歩」をなかなか踏み出せずにいる人に届けたいと思います。日々の生活の中で感じる「誰かを助けたい」「行動を起こしたい」という気持ちの後押しやきっかけになればたとえ嬉しいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



Be yourself

三重県 津市立南郊中学校 2年

パルマ カズマ

みなさんは自分の髪形が好きですか？着たい服、好きな話し方をしていますか？僕は僕らしく生きていきたい。同じように僕の周りの人たちも自分らしく生きてほしい。僕の話聞いて下さい。

人間は男性や女性で性別を分けて生まれてくるのではなく、何も無い真っ白な状態で生まれてくると僕は思います。この何も無い真っ白なキャンパスに、自分で色をつけていきます。自分の着たい服、つけたい下着、したい髪形、好きな話し方や愛する相手など、自分で決めた色をつけていくのです。でも、大人や社会は決めつけや偏見で、勝手に色を塗ってきます。真っ白なところに塗ってきたり、自分のつけた色の上に違う色を無理やりつけてきたりします。そんなとき、僕は悲しいというよりも腹が立ちました。「なんで決めつけてくるん？自由にさせてよ！理解してくれない人たち大っ嫌い！」ずっとそう思っていました。でもある日、田中いっぼさんに出会い僕の気持ちは大きく変わりました。

五年生の頃から毎年いっぼさんとの出会い学習をしてきました。いっぼさんは女性の体で生まれ、自分の性に違和感を持ち、男性として生きている人です。いっぼさんに会って、「僕は変じゃないんだ。僕らしく生きていいんだ！」と勇気をもらい、安心しました。それと同時に周りの友達には「性に違和感を持っている人たちの息苦しさを作り出しているのは自分だったのかもしれない」と振り返ってくれていて僕はとてもうれしかったです。

中学校一年生の道徳の時間に僕は、兄にカミングアウトをした時の話をしました。「何言ってん？同じ人間とは思えへんわ。」と兄に言われたことを泣きながら話しました。学年人権集会の時には道徳の時間に話した事に加えて、体育の着替えの事も話しました。「僕は体育の着替え場所が心配です。男子のところで着替えるのは少し抵抗があります。理由は性的感情を持ってしまうからです。だからと言って女子のところで着替えられないので、一人で着替えられる場所を準備してもらっています。今のクラスでは当たり前で過ごしているけれど、新しいクラスになった時、僕のことをまだ知らない人はどう思うかな？周りの視線がどうしても気になる自分がいます。」と打ち明けました。

振り返りの時間にはたくさんの人が僕の事を書いていました。「悩んでいる人が身近にいた」「カズマが自分のことを話してくれたから深く考えることができた」「二年生になったら、一緒に考えていきたい」などの感想がありました。自分のことを発信していくことで自分が過ごしやすい環境に出来たこと、同時にみんなにとっても過ごしやすいクラスや学校に少しでも出来たことがとても嬉しかったです。そして、僕も気づいた事がありました。「何で分からんの？」と責めていては一緒に考えてもらえないということです。言っても自分を分かってくれないと決めつけ、周りの視線を気にし過ぎて居心地を悪くしていたのは自分でした。

学年人権集会の後、学級人権集会があり、そこでは、小学校の頃の話題になりました。みんなと遊ぶ約束をして、僕がヒールを履いて行った時のことでした。「最初、ビックリしたけど、カズマらしいなって思った」「え！？僕も履かせてよ！って履かせてもらってた子おったよな～」と盛り上がり、先生から「違和感なかったん？」と聞かれた友達は、「全然！」と答えていました。こんなことが笑顔で話せる周り自分がありました。ありのままにいられてこんなにも幸せになれるなんて思ってもいませんでした。僕の真っ白なキャンパスにはいろんな色があります。全ての色がどれも大切な色です。でも、自分らしく生きていこうとするとどうしても周りの言葉や視線が気になってしまいます。時には「死んでしまいたい」と呟いた自分もいました。でも、この言葉だけは伝えたい。貴方はキャンパス。いろんな色があるからこそ輝いていて美しい。僕のキャンパスもここに居る皆さんのキャンパスもどれ一つ同じではない。どれも美しいということ。これが僕の色。これが本当の僕。Be yourself

この主張をどんな人に届けたいですか？

自分に自信が無い人や、自分が嫌いな人、何かを見失っている人に届けたいです。

私は、周りにいる人たちの温かい気持ちから元気をもらい、自分らしくありのままにいられる幸せを実感することができました。

私の発表を聞いてくださった方々にとって、自分の生き方をみつめる一つのきっかけになればとてもうれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

人間らしく、自分らしく

大阪府 守口市立梶中学校 2年

足立 遥

最近、よくこんな言葉を見聞きます。「差別」。ついこの前までは、差別というのは私にとって無縁なものだと思っていました。幸せなことに、私は何不自由なく五体満足で生まれ、様々な面で周りの環境に恵まれていると感じていたからです。

しかし、ある学校での授業をキッカケに、差別って身近なものなのでは？と感じるようになりました。その授業というのは、社会の「部落差別」というものです。「部落差別」とは、江戸時代の身分制度のなかで「えた・ひにん」などという、人なのに人としての扱いを受けなかった人たちや、その人たちの子孫までもが差別をされている、などのようなことを指します。なぜ、このような差別をするのだろうか。私は強い怒りと疑問がこみ上げてきました。

このことがキッカケで、私は世界にはどんな差別があるのか、興味をもち始めました。

まず、今一番問題になっているといえる、「人種差別」。白、黒などといった肌の色が違うだけで差別をされてしまう。この差別で今まで何人肌の黒い人が亡くなってしまったことでしょうか。最近のニュースでは、肌の白い警察官が、肌の黒い人を、理不尽な理由をつけて射殺する。そう、肌が黒いということも含め。こんな事件が、何件もあります。こんな世の中でいいのでしょうか。肌の色が違うだけなのに、皆同じ命をもつ人間なのに。私は、そう思わずにはいられませんでした。

他にも、障がいがある、というだけで差別をしてしまう人もいます。考えてみてください。障がいがあれば、私たちと同じように生活してはいけないのでしょうか。同じようにできないのでしょうか。私はそうは思いません。障がい者の人だって、普通に暮らす権利はあるはず。そして、差別をされる理由もないはず。

私の学校には、外見ではわからない障がいのある子が何人かいます。でも、障がいがあるからといって、誰一人として、差別や軽蔑をしていません。皆、普通に接しているのです。一般の中学生でも、差別をしないということができるなら、誰にだってできるはず。障がいがある、と意識するからよくないのです。だって、皆たった一つの大切な命をもった人間でしょう？

これらの他に、私には今でも忘れられない話があります。数年前のことです。私の近所には、外国人の男性が住んでいます。その方には、日本人の奥さんと、小さな娘さんがいます。もちろん娘さんは外国人と日本人の血が混じっています。そしてその男性は、ある日こう言いました。

「娘がハーフと呼ばれるの嫌なんです。ハーフって半分って意味でしょ？ちゃんとした一人の人間なのに、半分の人間って言われてるみたいで、嫌なんです。ハーフじゃなくて、ミックスやダブルって呼んでほしいんです。」

私は、この話を今でも忘れられません。どこかで忘れてはならないと感じていたんだと思います。この話を聞いた時、一般には普通の言葉でも、ある人には差別に聞こえてしまう言葉もあるんだと初めて気づかされました。

今回この発表を通して伝えたいこと。それは、世界中の人々が生まれながらもつ、人間が人間らしく生きる権利を皆が大切にしていくこと。肌の色が違って、障がいがあっても、それも個性のひとつとして皆が受け入れること。男だから、女だから、男は女を、女は男を好きになるとか、そんな固定概念にばかりとらわれないこと。どんな性別でも、誰が誰を愛しても、それはその人の自由であり、個性であること。そして、言葉選びに気をつけること。綺麗事だと言われるかもしれない。こんな事言っても意味がないと思われるかもしれない。でも、たった一人でもいい。たった一人でも、誰かの心に私の気持ちが伝わったのなら、少しでも世界は変わると思います。私はそうであると信じています。

世界中の人々が、人間らしく、自分らしく生きていけるように、そして差別が少しでもなくなるように、私はずっと訴え続けます。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

学校の社会科の授業で差別について学んだことがきっかけです。差別は、今世界全体で問題になっています。また、テレビのニュースや SNS でも差別についてのことが沢山報道されていて、それが自分の中でとても心に残っていました。今回作品を作るにあたって、沢山の人の伝えられるような内容にしたいと考えていました。私は、差別をするのはよくない、ということ、訴え続けます。沢山の人の、自分の思いが少しでも伝わればいいなと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

違うからこそ

兵庫県 西宮市立上ヶ原中学校 2年

具 宥 聖

僕は、日本と韓国のダブルです。ちなみにハーフというあまり良くない意味になるので、僕はダブルと言っています。僕の名字は一字で「具」と言います。小学校に入学して、低学年の頃はあまり気にしていなかったけれど、だんだん学年が上がるにつれて、自分の名字を気にするようになりました。初めて会う先生や友達に自分の名字を間違えられたり、ときにはバカにされたりして、傷ついたことがありました。

人前で名前を言うことに抵抗があり、そのせいで学校では、委員や何かの代表にも立候補できずにいました。その反面、こんなことで悩んでいる自分がみっともなく、小さく見えて、それもいやでした。

でも、そんな時に他愛もない話をして僕を笑わせてくれたのは、小学校の友達でした。「僕のことゆそんって呼んで。」と言ったら、「ゆそん、ゆそん。」と、名前をバカにせず呼んでくれたのが、すごく心の支えになっていました。

中学校に入学して、コロナウィルスの影響もあってクラス全員がそろそろまで三か月近くかかりました。僕の学校は六つの小学校から集まっているので、自己紹介は避けられません。しかし、分散登校で自己紹介がなく、ホッとしている自分がいました。正直、そんな自分がいやでした。

クラスが本格的に始まって、僕は班長に推薦されました。「何か小さいことでもいいから挑戦していきたい。」と思っていた僕ですが名前のおかげで目立つのはどうしてもいやでした。そんなとき、小学校からの友達が僕のことを「ゆそん」と呼んでくれて、自然にクラスのみんなも「ゆそん」と呼んでくれるようになりました。僕は自分の名前を普通に呼んでもらえることが、人一倍うれしいです。クラスには誰一人バカにするひともいなくて、とっていいクラスだなと思いました。おかげで班長としてやっていくことができました。今は、一年生の時挑戦できなかった委員会に入って活躍したいと思っています。

僕のような日本と韓国のダブルの人は、この国にいっぱいいます。日本が差別のない多文化共生の社会を目指しているのは、とてもすばらしいことです。僕が日本に生まれてよかったと感じるのもそのことが大きく影響しています。ただ、完全に差別がないとは言いきれないのも事実です。他の国でも、黒人やアジア人のへの差別が後を絶ちません。

自分と「違う」ということに人は敏感になります。「違い」を感じて、言葉にはしなくても避けたり、見て見ぬふりをしたりしてしまいます。ときにはその「違い」をおそれるあまり、攻撃的になり、必要以上に相手を傷つけてしまうこともあります。僕は、人と違うことをバカにされて、笑われることのつらさを知っています。だから絶対に「違い」を笑うようなことはしません。

「名前がみんなとは違う」このことが僕を殻に閉じ込め、自由に動き出したい気持ちにいつもブレーキをかけていました。人との「違い」に敏感で、それを気にしてばかりの自分が好きになれませんでした。そんな僕を広い世界に引っ張り出してくれたのは、「違い」を認めて、気にせず接してくれた友達です。

誰一人同じ顔がないように、人はみな違っています。それでいいのだと思えるようになってから、僕の世界は大きく広がりました。「違い」を認めることで、自分の良さにも気づけました。そして、そう思わせてくれた友達を大事にしたいとも思いました。

「違っていいんやで。違うからこそおもしろいんやで。自分の良さに気づいて、相手のいいところいっぱい見つけてや。」

僕は、この経験から得たことを絶対に活かします。そして、「違い」の壁を乗り越え、ダブルの自分に誇りをもちます。そして周りの人も、自分自身も大切に、心のやさしい人に絶対になります。

この主張をどんな人に届けたいですか？

やはり、僕と同じ境遇にいる人たちに届けたいです。これは決して小さな問題ではないと思います。僕のような日本と韓国のダブルの人だけでなく他の国とのダブルで、自分の名前が、自信が持てない人はたくさんいます。そのような人たちに、悩んでいるのはあなただけではないということをおの主張を通して伝えたいです。一部の人がだけが問題解決に取り組むのではなく、社会全体で何気ない一言で相手が傷ついてしまっているかもしれないということを一度考えてみてほしいです。それが多文化共生の社会につながっていくと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「十人十色」が、輝く世界へ

奈良県 香芝市立香芝東中学校 1年

森山 裕美

「森山ってさ、何か変わってるよな。男の子っぽいついていうか…。」

これは、私が小学四年生のときに、クラスの男の子から言われた言葉です。

小学生のころの私は、男の子と遊んだ方が楽しいと思っていました。女の子と話すよりも、男の子と話していた方が馬が合いました。ビーズを並べるよりも、ボールを蹴っていた方が楽しかったです。

そんな中、いつもと同じように学校で男の子と喋っているとき、不意に言われたのが、この言葉でした。「ズキッ。」

「変わっている。」この言葉は、私の胸に冷たく尖った何かを刺しました。

その言葉をクラスの人も沢山聞いていたからか、それから私は、クラスの友達である女の子から、いじめを受けるようになりました。無視をされたり、訳もなく怒鳴られる、毎日がその繰り返しでした。

それからの私は、男の子と遊ぶことをやめ女の子と話すようにしました。いじめられないように、何とか女の子と関係をもてるように、はみ出さないように、必死でがんばりました。

そうやって、自分自身を偽っていくうちに、自分自身が、色褪せていくのを感じました。憂鬱で息苦しい日々が続き、毎日が白黒で、まるで自分の世界から、色が消えてしまったそんな気さえたのです。

しかし、そんな白黒な毎日から、私を救い出してくれた人物がいます。それは、私の母でした。ある日私は母に、「いじめられるのがいやだから、学校を休みたい。」

と、訴えました。その時母が、

「別に、周りの目を気にして自分を変えなくても良いと思うよ。裕美は裕美なんやからさ。」

その瞬間、私の胸に刺さっていた、あの冷たく尖った何かが、解けていきました。気がつくと私は、母に抱きつき、「ポロポロ」と涙を流していました。

「そうだ、周りの目なんて気にしなくていいんだ。自分のしたいことをすればいいんだ。自分らしく、生きていいんだ！」私はやっとそう思えるようになったんです。

次の日から私は、自分のしたいことをするようになりました。そうすると、自然と自分らしい口調、自分らしい仕草になっていきました。時間が経つにつれて、クラスのみんなも、そんな私を受け入れてくれるようになり、いじめも消えていました。

今では、男の子、女の子両方と遊んでいます。絵をかくことが好きになり、そのことを通じて、今では友達も沢山います。親友と呼べる存在にも出会えました。

近年、「LGBTQ」、セクシュアルマイノリティの人たちが注目されています。異性が好きな人、同性が好きな人、両性を好きになる人、産まれてきた性と、生きる性が違う人など、この世界には人それぞれの、沢山の個性があります。

その個性を、もっと自由に広げられるように、日本でも沢山の取り組みが行われています。

けれども、知識がないゆえに、「レズビアン」を「レズ」と呼んだり「ゲイ」を「ホモ」などと、差別的な用語で呼んでしまう人もいます。それに、周りとは少し違うからといって、学校や会社など色々な場所で差別を受けてしまうことも、少なくありません。

女の子だからおしとやかにしなければいけない、男の子だから人形遊びはおかしい、そんな偏見をもつのではなく、その人の個性として理解していく。このことが、人と接していくうえで、そして、これからの世界を担っていくうえで、大切なことだと思うのです。

だから私は、全ての人々が自分の個性を胸を張って見せられる、そんな世界を創っていきたいです。

「十人十色」、世界中の人たちが、この言葉を、素敵と思えるような世界にしましょう。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張をより多くの人に届けたいと思っています。その中で、特に届けたい人は、十代、二十代の若者と、セクシュアルマイノリティの人を差別したり、蔑んだりしている人です。

私自身もそうですが、十代、二十代の方は、これからの世界を創り、担っていく存在です。だから今、この主張を通して一人一人の個性を理解して人と接していくことの大切さを知ってほしいです。差別をしてしまっている人は、この主張を聞き、自分の行動を振り返るきっかけにもらえるとうれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

共に生きる

和歌山県 有田市立箕島中学校 3年

楠瀬 心美

今もはっきりと残る、胸の真ん中を真っ直ぐに走る傷跡。15センチほどあるその傷跡は、私が物心ついた時には既にあった。

「どうしてみんなにはないのに、私にだけ、こんな傷があるの？」

幼い頃、何度も母に尋ねていたのを思い出す。母はその度に

「生まれた時から心臓に病気があって、お医者さんが治してくれたんだよ。」と、私の手をとり、傷の上にあて、鼓動を感じさせながら話すのだった。幼い頃の私には、それ以上、知ることはなかった。

15歳を前に、私はもう一度、病気のことについて母に尋ねた。「心室中隔欠損症」という病名で左右の心室を隔てる壁に穴が存在する状態であり、生後11ヶ月で手術をすることになった。母は、当時のことを私に詳しく教えてくれた。

その頃の私は、母乳を飲む力も弱く、体重が平均よりも大きく下回っていた。泣けばすぐに唇が紫色になり、夜通し私を抱いていたそうだ。手術にかかった時間は、およそ5時間。その時の光景を、母は鮮明に覚えていると語る。不安な気持ちで手術が終わるのを待ち続け、手術後、ICUのベッドで眠る小さな我が子が沢山のチューブに繋がれている姿を見た時、涙が溢れたそうだ。その後、術後の経過も良く、今、私はこうして元気に過ごすことが出来ている。そして、母はもう一つ教えてくれた。

「今の自分があるのは、沢山の人の力や祈りがあったからだよ。」と。小児科の先生をはじめとし、お世話になった医師、看護師の方々に私は命を繋いでいただいた。もちろん、両親や祖父母には心配も苦労もかけただろう。沢山のの人に支えられ私は生きているのだと思うと、まぶたの裏が、熱くなるのを感じた。

21,081人。この数字は、令和2年の自殺者の数である。前年より、912人増えている。なぜ、自ら「死」を選ぶのか。近年にみられる特徴として、SNSを使った誹謗中傷や、昨年は、コロナ禍で失業者が増えたことなどが原因にあげられる。私達が普段何気なく発信している「ことば」。それは人を生かし、時には人を殺してしまうとても繊細なものだ。だから、使い方を誤れば、簡単に人を追い詰めてしまう。そして、今も尚続くコロナ禍の感染状況は深刻化している。ある報道で、飲食店、観光業などの失業者が増えていることを知った。皆、理由はそれぞれ違って、私には計り知れない程の大きな悩みが心を支配し、自ら命を絶つことを選んでしまったのだろうか。ニュースでそういった話を聞く度に、私は胸が苦しくなる。

私は考える。自殺者が増える社会は問題であると。一人一人、目を背けることなく考えなくてはいけない。「死にたい」という言葉のその裏側には、死を選ぶしかなかったが本当は生きたいんだという心の叫び声が聞こえる。

今、生きることが辛いと感じている人に聞いてほしい。あなたは今、孤独と虚しさで苛まれているかもしれない。それでも、あなたと共に生きたいと思う人がいるだろう。勇気を出して助けを求めて欲しい。

私はあの時生かされた。今も尚多くの医療従事者は自分の身が危険にさらされようと、使命を持ち多くの人を助けようと力を尽くしてくださっている。生きたくても生きられなかった命もある。私達は一人ではないはずだ。

何度でも言おう。生きることをやめてはいけない。どうか、思いとどまってほしい。私達の未来が、差別や偏見がなくなり、人権が守られ、そして、コロナの流行が終わり安定した社会が一日でも早く取り戻せることを切に願う。

共に生きよう。助け、助けられ、私はみんなと共に、今日も生きていく。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この時代を生きていく中で私と同世代の方をはじめ、さまざまな世代の人に伝えたいです。今も、新型コロナウイルスと最前線で戦う医療従事者の方にはとても感謝しています。悩んで生きている人達の心にこのメッセージが少しでも響けば嬉しいです。感謝の気持ちを忘れず、これからも生きていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ボーダーレスな社会を目指して

鳥取県 米子市立後藤ヶ丘中学校 3年

浅倉 晴花

「私は女です。」

この一言には、様々な意味があります。「女」とは、生物学的な「女」なのか。もしくは心が「女」なのか。かわいらしい物が好きだから「女」なのか。男性が好きだから「女」なのか。そして、この一言に疑問を感じる人もいます。私もその一人です。

私は現在、「男らしいモノ」が好きです。スカートよりズボン、少女マンガより少年マンガ、ピンクやオレンジより黒や青の方が好きです。そこで私は最近こう思うようになりました。

「男らしいって何だろう。」

カッコいい色やデザインを「男らしい」というのでしょうか。ワイルドな行動や言葉遣いを「男らしい」というのでしょうか。「男らしい」というのは、私達が見た目で判断した、「人をしばりつける言葉」なのではないかと思います。

また、「男らしい」に限らず、「女らしい」もまた、「人をしばりつける言葉」だと思っています。その他にも探せばキリがありません。

話は変わりますが、皆さんは「トランスジェンダー」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。私は先ほど「男らしいモノが好きだ」と言いましたが、トランスジェンダーというわけではありません。小さい頃はかわいらしい物が大好きで、スカートもよくはいていました。

このように、私の性は少し複雑で、分類することが難しいです。しかし、わざわざ分類する必要があるのか、と私は思います。

先ほど述べた「人をしばりつける言葉」の一つが「トランスジェンダー」だと思っています。

「トランスジェンダー」を始め、セクシュアルマイノリティの人達を指す言葉が生まれ、説明がしやすくなったり、自分達のことを知ってもらったりする機会が増えました。しかし、その一方で、自分達がせまい枠に押し込められたような気分になります。「トランスジェンダー」という言葉一つでその人を見ることは、絶対にあってははいけません。

しかし、言葉とは便利な物なので、簡単に無くすことはできません。それに、言葉一つ無くして解決できることでもありません。

そこで私はこう考えました。

「区別をしない世の中にすればいいのではないか。」

そもそも何億もの人々を男と女の二つに分けようとするのが間違いだったのです。この世の誰一人として同じ人間はいません。その区別を無くして、おのおのの個性を尊重していくことが、これから大切になっていくと思います。

近年、ジェンダーについて社会の関心が高まっていると思います。年齢や性別の枠を越え、自由な服装を楽しむボーダーレスファッションや、性の区別を乗り越えて、自己を表現するジェンダーレスモデルなど、ボーダーレスの考えが世界が注目しつつあります。

今、このようにジェンダーのことが社会で重要視されてきているのは、以前からジェンダー問題について訴えかけていた人達のおかげです。そういった人達が未来の住みやすい社会を作っているということを皆さんに知ってほしいと思います。

私は今を生きる人達、特に同世代の人達に伝えたいことがあります。

それは、性別のことはデリケートな問題で、それを人に伝えることは当人にとって、とても怖いことであり、勇気が必要なことだ、ということです。だからこそ、もし身近な人が自分の性について話してくれた時には、受け止めて認めてあげてほしいのです。その行動で救われる人もいます。また、そういった一つ一つのことが、性の区別のない、ボーダーレスな社会につながっていくのではないかと私は思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は今年から中学3年生になり、「学力診断テスト」を毎月受けることになりました。このテストには性別を記入する欄があり、私は、なぜ「男」と「女」の区別が必要なのかと思いました。自分としっかり向き合い、思考を重ねた結果、この想いを文章にして多くの人に届けたいと思いました。この作品が私と同じように考える人達の支えとなり、また、全ての人々が住みやすい社会をつくるきっかけになると嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

メンズデーはいつ？

岡山県 岡山市立岡山中央中学校 3年

中本 湊介

ある日、私は母に
「本を買ってきて。」と頼みました。
「わかった。じゃあ水曜日に買うわ。」
「なんで水曜日なん？」
「水曜日はレディースデーじゃからポイントが2倍なんよ。」
「じゃあメンズデーはいつなん？」
「この店にはメンズデーはないよ。」
「えっ!? 女の人だけ得をするのはずるい。」私は思わずこう言いました。
「男女差別じゃん。」

みなさん、身の回りを見てみてください。「レディースランチセット」「女性専用スポーツクラブ」「女性専用車両」など女性限定のサービスがたくさんあることに気づきませんか？「女性専用車両」はちかん防止のために作られたサービスで必要なものだと思います。しかし、それらのサービスの中には女性だけでなく、男性にもしてほしいと思うサービスもあります。女性ばかり優遇されていると思うのは私だけでしょうか？

ここで世の中をもう少し広い目で見てみましょう。日本人の約7割が男性の方が優遇されていると思っています。「政治家になりやすい」「仕事で出世しやすい」などの理由からです。

確かに昔から、大臣や朝廷の役職を務めていたのは男性で、社会的地位は男性の方が上でした。女性は家事や子育てができればよくて、ほとんどの女性が勉強をさせてもらえませんでした。1911年に平塚らいてうらが青鞆社をつくり、その後女性にも選挙権が与えられ、女性が社会に出て活躍できる場所も増えてきました。さらに、1999年には「男女共同参画社会基本法」が成立し、男女格差は改善されつつあります。

しかし、問題は身近なところにまだまだたくさんあります。最近では、オリンピック組織委員会の前会長が女性蔑視と取られるような発言をし、辞任に追い込まれ、女性の方が新しく会長に就任しました。私は、前会長がなぜこのような発言をしたのか理解できません。男女平等が叫ばれている今の時代にこのような発言を平気でするなんて、と腹が立ちました。日本では、まだまだ男性優位の社会風習が根強く残っていることに気づかされました。

世界に目を向けてみると男女格差を小さくする取り組みがすでに行われています。アイスランドは世界で初めて男女の賃金格差を法律で禁止にしました。また、ニューヨークでは「育児をするのは女性」という意識を取り払うため、男性用トイレにおむつ交換台の設置を義務化しました。日本ももっと外国のように新しく法律を作ればよいと思いましたが、新しく法律を作るのは簡単なことではありません。だから身近にできることから始めればよいと思いました。

私は最初、女性に対するちょっとしたサービスだけで、「ずるい」「男女差別」と思ってしまいました。でも、それは違いました。女性が得をするサービスは、男性と女性の差が小さくなってきている証拠だったのです。

今年度から、私たちの学校は制服がボーダーレス化されました。男子がスカートをはくことも、女子がズボンをはくことも自由に選べます。男女の制服の違いに疑問を持っている人は少数かもしれませんが、性別で決めつけるのではなく、一人一人の意見を尊重すること、そして、周りの人と協力し、改善していくことが大切なのではないでしょうか。

無意識に持っている「こうでなければならない」といったイメージを「こうであってもよい」というイメージに変えていきます。これは男女差別だけでなく、他の差別に対しても同じことが言えます。

メンズデーもレディースデーもいらない、毎日みんなが大切にされる社会に。人種・国籍・性別に関わらず、一人一人が自分らしさを表現でき、お互いを理解し合い「自分が自分でよかった」と思える世の中を、私たちが力を合わせて、ともに築いていきましょう。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は母との何気ない会話から、男女平等について考えるようになりました。性の多様性を認めあえる社会を目指して、私は正しい知識や情報を得られるようになりたいと思います。そのために、ニュースを聞いたり、新聞を読んだりし、想像力を働かせ、自分の頭で考えることを大切にしていきたいです。そして、困っている人にそっと寄り添って温かい言葉をかけたり、共感したり、相手の立場になって行動することを考えながら人生を作り上げていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

助け合える社会に

山口県 萩市立萩東中学校 2年

井町 百芭

「おれは助けてもらわねえと生きていけねえ自信がある」

これは、ワンピースのルフィの言葉です。

皆さんは、できないこと、苦手なことを人に頼ることはできますか。私は、できないことや苦手なことなら、それができる誰かに頼ってもいいのではないかと思います。けれども、こんな当たり前のようなことが、実際の生活では難しいのが現実です。

例えば、小さい子どもに苦手なこと、できないことがあって、周囲に助けを求めているとします。そんなときなら、誰もが助けてあげなくてはと思うのではないのでしょうか。でも、中学生や高校生ならどうでしょうか。ましては、大人だったら……。きっと小さい子どもの場合とは違う態度、違う行動を取ってしまうのではないのでしょうか。できないところを見て、ちょっとバカにしたり、陰口を言ってしまうたりはしていないのでしょうか。

「早くやればいいのに。」

「それくらい、できてあたり前だろう。」

そう考える人もいるのではないのでしょうか。

しかし、私は、そういう社会は冷たい社会だと思うのです。「まだ小さいから。」とか、「体が不自由だから。」などの理由で助けるのではなく、「その人が困っている」かどうか。それを助ける基準にすべきなのではないのでしょうか。

「それくらい」のことだと、誰が決めるのでしょうか。誰かにとっての「それくらい」がその人にとっては難しいことだつてあるのです。だから、ちょっとした心ない一言が、その人の気持ちを苦しくさせるのではないかと私は思います。

私には、昨年まで同じ中学校の陸上部に入っていた姉がいました。姉は、走り幅跳びをしていました。その練習の負担からか、私と違って、大きい怪我をしてしまうことがありました。家族は姉の怪我により、いつも忙しそうに見えました。その頃の私は、どんなに足が痛くても、「痛いだけだし。」「考え過ぎかもしれないし。」と自分に言い聞かせ、家族にも言うことができませんでした。助けを求めることができなかったのです。だからこそ一人で困っている人、苦しんでいる人を見ると、自分自身が一人で悩んでいたときのことをいつも思い出します。

「できないことや苦手なことがあれば、できるまで自分で努力すればいい。」と考える人もいるかもしれませんが。けれども、その人が「できないこと」や「苦手なこと」を少しだけ手伝ってくれる人がいたら、できるようになることもあるのではないのでしょうか。

誰にだって苦手なことや分からないことの一つや二つはあるはずですが、それは、たとえ小さな子どもだろうと、中学生だろうと変わりはありません。だからこそ、得意な人や、苦にならない人に頼り、少しでもできるように、あるいは、理解できるようにすることが、社会で生きていくには大切なことだと思います。

人は生まれてから死んでしまうまでに、たくさんの人に助けってもらいます。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、兄弟、友達……。他にもたくさんの人たちの助けによって、今の私が、私達ができています。

もちろん、助けてもらおうのがあたり前だと考えてしまうのも、違います。できないこと、苦手なことを助けられたり、手伝ってもらったりしたら、相手に感謝の気持ちが届くように、「ありがとう」を伝えることも大切です。

私は、誰もが困ったときに、「助けて」と言える社会をつくりたいと思います。苦手なことやできないことを助けってもらおうこと、そして、自分自身も誰かのことを助けられる人になりたい。それが当たり前の社会にしていく。これが私の願いであり、私の目標です。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は「ONE PIECE」のルフィの強くて仲間を大切に作る姿が大好きです。人は、弱いだけではなく強い人でさえ、できることやできないことがあるものです。だからこそ、誰かを助けること、助けを求めることは、誰にでも必要なことだと思います。しかし、年齢や見た目で判断され「それくらいのこと」だと思われてしまうのも現実です。誰が作ったのかも分からない目に見えない「ものさし」とらわれない社会にしたいと思い、この文章を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

オサムの気持ち

徳島県 徳島県立川島中学校 2年

坂野 紅巴

私は今、重松清さんの「一人っ子同盟」という本を読んでいます。それに登場するお調子者で嘘つきなオサムが盗みを犯したシーンが深く印象に残っています。

オサムが盗んだのは、他人の財布です。その中に入っていたお金を、また勝手に使いました。これは、絶対にしてはいけないことで、犯罪です。彼の行動に気づいた主人公が、問いただしたとき、「盗んだ瞬間、胸がすっとする。体が急に軽くなる。」と答えました。私はこの部分を読んだとき、驚いたし、疑問をもちました。普通、盗みをしたら、ずつと心がもやもやして罪悪感がとてつもないだろうと思ったからです。それなのに、どうして彼は真逆な考えが浮かぶのだろうか、私にはわかりませんでした。

でも、これは、オサムの複雑な人間関係や、いろんな気持ちが原因なのかもしれないと気付きました。なぜなら、オサムは赤ちゃんのときに病気で両親が亡くなっているからです。それからは親せきの家をたらい回しにされていました。それが何度も繰り返されるうちに、「自分は一生一人ぼっち」という暗い気持ちが大きくなり、その寂しかったり苦しかったりという、どうしようもない気持ちをまぎらわせるために、嘘をついたり盗みを犯したりするのだと思いました。

そう考えると、オサムを犯罪や非行に向かわせるのは、彼自身のことだけではなく、周囲の環境も関係しているはずだと感じました。

小学5年生の時、先生からこんな話を聞いたことがあります。「管理がされていなくて汚い場所には通行人がゴミをポイ捨てした。でも、しっかり管理されていてきれいな場所ではゴミを捨てなかった。」というものです。私は、なるほどと思いました。この話のようにオサムが嘘をついたり盗みを犯したりできない環境、しなくていい環境をつくるのが必要なのだと気づきました。

本の中のオサムのような子は、きっとたくさんいると思います。犯罪だって、盗みとも限りません。同じ年頃の子達が起こした事件を、ニュースや新聞で時々見かけます。人の家に火をつけたり、友達をいじめて自殺に追い込んだりしたというものです。今までは、「ひどい」と感じるだけで終わっていました。でも今回は、その一歩先にいくために、自分に置き換えて考えてみました。

もし、今私を育ててくれている人が、本当の親ではなかったら、その人に気を遣うと思います。会話するときも、自分の一言一言に今の表現大丈夫だったかなと心配したり、迷惑をかけてはいけないと遠慮して相談もできなかつたりする気がします。そのため、家で伸び伸び過ごすことができず、ストレスが溜まっていき、それを発散させるため、犯罪などに手を染めると思います。でも私が犯罪や非行を犯すことなく、幸せな気持ちで過ごすことができているのは、家庭の安心があるからかもしれません。

オサムの心を私なりに想像しました。彼のように非行に走っている子達には、何か満たされない思いがあり、犯罪のスケールはばらばらでも、原因はみんな同じということがわかりました。その子達から非行を遠ざけるために私ができること、それは、明るく笑顔で振る舞うことだと思います。私はまだ未熟だし、しっかりしているわけでもないのに、相談に乗ってあげたとしても、良いアドバイスはできません。それができないぶん、相手も自分も楽しい気分になれる雰囲気をつくることをがんばりたいです。私も時々、もやもやした気分で行くことがあります。友達が「おはよう！」と明るくあいさつしてくれたり仲良くしてくれたりするだけで、気持ちが前向きになります。

増え続けている、少年非行。悪いのは、犯罪を犯した側だけでなく、それをさせる周囲の環境や人間関係が関わっていると強く思いました。だから、身の回りで事件が起きたときは、自分にも何か問題があったのではないかと自分事として捉え、みんなで関わって解決していくことが、少年非行を減らす取り組みだと考えます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、身近な人にこの主張を届けたいです。もし周りに、嘘をついたりいじめをする子がいたら、「この子にも何か事情があるのかもしれない。」と思い出してほしいからです。私は今まで、悪いのは本人でその子が自分で直さなければいけないと思っていました。でもそこに至るには、複雑な人間関係や周囲の環境が関わっていることに気づきました。だから、この主張が私の身近な人の心に刺さり、そのような子を見る「見方」が少しでも変わることを願っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

真の「世界の宝石」

香川県 高松市立龍雲中学校 3年

坂賀 憩

「ふるさとを 思い海見て 60年」

皆さん、この句を聞いて、どんな情景を思い浮かべますか。瀬戸内海に浮かぶ島々の絶景は、「世界の宝石」と称えられます。

その内の一つ大島は、最近では瀬戸内国際芸術祭が行われ、世界中の多くの人々がアートを楽しむ開かれた島です。しかし、以前は、不治の病とされていたハンセン病患者を隔離するための閉ざされた島でした。そのことを私が知ったのは、大島のことを取り上げたドキュメンタリー番組を観たときでした。番組の中で国立療養所大島青松園の野村さんは「大島はですね、人間を捨てた島ですから。」

とおっしゃったのです。その言葉が私は忘れられません。入所後は、死ぬまで島から出られず、故郷を思って海を眺める日々。初めに紹介した句は、こんな気持ちで詠まれたものだったのです。「世界の宝石の一角」にこんな悲劇があったなんて一私は胸が締めつけられるようでした。家族との再会を願いながら亡くなる方を、野村さんは何度も何度も見送ったそうです。病への差別が人権も、生きる心をも奪ったことを知り、高齢化する入所者の「風化させないで。」という思いを、私達は受け継いでいかねばと思いました。

しかし、2020年。新型コロナウイルスが世界中を襲い、私達の生活は一変しました。コロナウイルスは私の住む香川でも感染拡大し、いつ自分が感染してもおかしくない不安な状況になりました。

そんなある日、「龍雲中学校に、感染者が出たって本当？」という友達からのSNSのメッセージを見て私は戸惑いました。なんて返そうか迷っていると、「そんなこと聞くの差別やで！」というAちゃんのコメント。心の霧がずっと晴れるのを感じました。私は、当たり前のことを当たり前と言える彼女の心を心から尊敬するとともに、自分のことを情けなく思いました。

私は知っています。コロナウイルスは「誰しもがかかりうる病気」であるにも関わらず、不安や恐れから分断や排除が起きていることを。これでは、ハンセン病差別の時と何ら変わりません。人は不安な時、誰かを下に置き、心の安定を図ろうとする弱い存在です。そしてそれは、ウイルスのように人の心から心へ感染していくということを実感しました。

私の学校では、「GOOD JOB カード」の活動を行っています。先生や友達に感謝や励ましの言葉を贈り合う活動です。放送でメッセージの内容を伝えると、教室に笑顔が溢れ、時に拍手が響きます。

また、ユニセフの募金活動を行いました。

「ご協力お願いします。」と呼びかけると、心のもった硬貨がチャリンと音を立てました。その時、私の中にも勇気や優しさが貯まっていくように感じました。私達は、元々弱い人間ですが、同時に勇気や優しさを持っているのです。

ハンセン病で隔離された方が見た絶望の風景をもう誰にも見せてはならない。松が青々と茂る美しい島が誰にも美しく見えるような平等な世になってこそ、真の「世界の宝石」だと私は強く思います。コロナ禍で私達は人とつながる喜びを改めて感じています。今だからこそ、周りの人と温か言葉を交わし、尊重し合える人になりたいです。それが今を生きる私のつとめだと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

元患者の方の話から知ったハンセン病差別への実態。私は強い憤りを感じました。この悲しい歴史から学び、未来に伝えていかなければならないと思い、この発表をしました。そして、コロナ禍はまだ終わりが見えません。辛く苦しい時こそ、人と関わり、絆を深めることの大切さを感じる毎日です。今後の人生でも、私は不安や恐怖から心の弱さが生まれることがあると思います。しかし、その弱い心に負けない自分でありたいです。そして、ハンセン病を風化させず、大島の方の思いをつなぐ優しい言動ができる人になりたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

違いが生む特別

愛媛県 新居浜市立別子中学校 3年

大岡 愛実

「まなちゃん男の子みたいだよ!! もっと女の子らしくしないと。」

これは、私が昔よく言われていた言葉です。

私は、その頃の自由で活潑な自分が大好きでした。小学生の頃からサッカーを習い、短い髪に憧れていた頃です。私は、この言葉をすぐに理解できませんでした。しかし、高学年になると私も変わっていきました。それは、女子グループの中で決められた、ある『基準』ができてしまったからです。「これをする子は女の子らしくない。」その基準から大きく外れている人が次から次へと孤立していったのです。私は孤立することが怖くなり、少しずつ自分を隠すようになりました。誇りであったはずのサッカーも、短い髪への憧れも隠して生活するのは、とても息苦しいものでした。しかし、「孤立したくないなら、自分が周りに合わせて変わらないといけないんだ!」と一生懸命自分に言い聞かせて、過ごしました。

私は、今の生活を変えたいという意思を持ち、小規模校の別子中学校に入学しました。私は、そこで出会った一人の女子の先輩に驚かされました。その先輩は、私と同じくサッカーをしていて、髪型はベリーショート。先輩は何のためらいもなく、自分を貫き通しているように見えました。その姿を見た時、「えっ! こんなにも自由にしているのに、孤立しないの?」という疑問が浮かびました。しかし、先輩と話すうちに、先輩が一人にならないのは、先輩のやさしさや心の広さを、誰もが認めているからなのではないかと思うようになりました。私は、ついに尋ねました。

「先輩は、あまり女の子らしくないですけど、一人だけ孤立するのは気になりませんか?」と言うと、

「いいんだよ。自分の人生なんだから。それに女の子らしいとか関係ないじゃん。」

と当たり前のように答えてくれました。女子はこうしないといけない。そんな周りの基準よりも、『自分らしさ』を追いかける先輩に憧れました。

私はそこから考え方を変えていきました。先輩のように胸を張って自分らしく生きるために、まず、自分の長所と短所を理解して、自分らしさを取り戻していこう。そう決意しました。そうして、自分らしさを取り戻す中で、新しく見えてきたことがありました。それは「人への見方が変わったこと」です。私は、中学三年生から寮長として話し合い活動などをまとめる役割を担うようになりました。そのとき、「この人はこれができない。」というネガティブな発想ではなく、「この人はこんなことができるから、こんなグループにして、話し合いを充実させよう。」と一人一人の性格を前向きにとらえられるようになりました。そのことで皆のそれぞれの違いや自分らしさをさらに好きになることができました。そんな今では、昔までの息苦しさがなくなり、本当の私を大切にしてくれる仲間に出会うことができました。

今、周りが見つけた、ある『基準』に囚われて、個性の違いが持つすばらしさに気付いていない人が沢山いると思います。SDGsの一つであるジェンダー問題も一人一人の考え方の変化で、解決できると思っています。まずは小さなことから! みなさんも、周りとは違う所をその人の良さと考えてみてください。きっと皆や自分、一人一人が特別な存在であることに気付けるはずですよ。そして私も、自分の「特別」を大切に、自分らしく生きていきます。

この作品を書いたきっかけはなんですか?

自分の体験を通して、私と同じ息苦しさを感じている人に、一人一人の大切さや、自分も特別であることを忘れないでほしいと感じました。また、周りの基準にとらわれて、偏った目で人を区別してしまう人が世界にたくさんいることに気付きました。子供だけではなく、世界中の皆で、この課題を解決したいと思いました。この文章から、一人一人を尊重しあえる社会への第一歩を踏み出したいという願いを持ったことがきっかけです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

信じる力、信じられる力

高知県 須崎市立須崎中学校 3年

池田 美羽

あなたは「信じる」という言葉の意味をどのように捉えているだろうか？

私は中学校に入学してから今日までたくさんの人と出会ってきた。その出会いの中で、楽しいこともあれば悲しいこともあった。

悲しい出来事の中で、忘れることができないことがある。それは、私に対する陰口であったり、親友だと思っていた人に事実でないウワサ話をされたことだ。そして、そのことは、一部の人に信じられてしまった。こんなことをされるきっかけが何だったのかは分からない。ただ、たまたまその人が自分のイライラを誰かに、何かにぶつけたくてしてしまった行為かもしれないし、自分を守るための行為だったのかもしれない。

私は気にしないようにしていたけど、時にはつらくて陰で涙を流した日もあった。そんな時、「大丈夫。そんなことにせんでいいがって！」と、私がある時一番ほしかった言葉をかけてくれた友達がいた。そして彼女は「私がずっと味方やきね！」と言ってくれた。

とても嬉しかった。次の瞬間悲しくて流れていた涙は嬉し涙にかわっていた。人のウワサ話に左右されず、ありのままの私の姿を見てくれて、私のことを信じてくれた友達。その友達の温かい心にどれほど助けられ、救われただろうか。

人が人を信じるということは簡単なことのように簡単ではない。しかし、彼女は信じるということ言葉をだけでなく、ずっとそばにいてくれたり、話を聞いてくれたりと行動でも表してくれたのだ。

彼女の、周りの意見に左右されず、自分自身の気持ちを信じて行動する強さにふれて、私も彼女に対してその気持ちに応えたいと思うようになった。

そして、その日から信じるという言葉の意味を深く考えるようになった。辞書でも調べてみた。辞書には、「少しの疑いも持たずにそのことが本当であると思う。または自分の考えや判断が確実であると思う。」などと書かれていた。それならば、人を信じることは、自分自身を信じることにつながるということになるのだと思った。

自分を信じるには、まず、自分がこういう人物なんだということを認めること、それとともに相手を認める力が必要だと思った。認めることができたとき、今、起きている現実に目を背けることなく前に進んでいくことができるだろうと思う。

だから、昔起こった出来事をトラウマに思うのではなく、その出来事によって自分が成長できたのだと前向きに捉えていきたい。そして、信じるとは何かを考えるきっかけを与えてくれた友達に感謝をしている。だから、ここで生まれた絆は、これからも大切にしたい。

信じるという言葉を使うのは簡単なことだけど、その意味を深く考えてみると、「信じる」ことが、いかに簡単ではないことが分かる。互いに信じ、信じられる存在になることは、時間をかけてつくり上げていくよりほかにない。

信じられる友がいること、自分を信じて生きられること。誰かを、何かを信じるができることに喜びや幸せを感じ、それをエネルギーに変えて、私はこれからを自分らしく生きていきたい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、信じるということはどういうことなのか実体験を通して考えてみました。

その中で、誰かを何かを信じることにに対して恐怖心を持つこともあるけれど、それとは反対に、信じることで、幸せや喜びを感じることができることに気づかされました。これからの人生、新しい出会いと共に、自分の歩む道の選択をしていかなければなりません。自分を信じて、自分らしい人生を作り上げていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

残すべきもの

福岡県 久留米市立田主丸中学校 3年

山岡 由愛

「祝いましょう！もうひとせつ！祝うて三言！！」

これは私の住んでいる地区で行われる祭、獅子打ちの掛け声です。八月二十五日の早朝、赤と黒、それぞれ二体ずつの獅子の頭や手作りの御幣を持った子供達が、悪疫を退治し邪気を祓うとともに、五穀豊穡を祈って地区内の家をまわります。

私達の使っている四体の古い獅子の頭は、明治五年に奉納されたものです。赤い獅子は雌、黒い獅子は雄で、大きい獅子はランドセル程の大きさです。手に持った獅子の口を開け閉めして音を鳴らします。田主丸の歴史が書かれた本によると、獅子打ちは平安時代の中頃の延長時代から続いてきたそうです。私は小学生から昨年の中学二年生まで、この祭に参加してきました。

地区の祭は獅子打ちの他に芋名月と堂籠りがあります。芋名月は中秋の名月の夜に懐中電灯と大きな袋を持った子供達が一軒一軒家をまわりお菓子やお芋をもらいます。堂籠りは十一月三十日に出雲から帰って来る神様をお迎えするために目印として火を焚くお祭です。

獅子打ちの準備では、まわる家に配る御幣を作ります。堂籠りの準備では火を焚くための木を集めたり、お宮をきれいにするために落ち葉を掃いたりします。堂籠り当日は、お堂の拭き掃除をし、お参りに来た人にお神酒やいりこを出しました。普段、年の違う近所の子供達が集まって何かをすることはあまりないので、協力しながら準備をするのは、とても新鮮で楽しく感じていました。毎年各行事で地区の人達と顔が合せられるので、交流が深められ、コミュニケーションを学ぶ場でもありました。

しかし、今年は大きな変化がありました。獅子打ちと芋名月は休止になり、堂籠りは実施できるのか分かりません。その原因はコロナウイルスではなく、少子化によるものです。少子化によって伝統的な文化が無くなるようになってしまっています。文化が無くなってしまえば、獅子打ちの掛け声はきっと忘れられてしまうでしょう。それだけでなく、地区の人達との交流も減って孤立する家庭が増えてしまったり、子供のコミュニケーションを学ぶ機会が減ったりしてしまいます。

今、私の住んでいる地区には中学生のいる家は六軒ありますが、小学生がいる家は一軒しかありません。子供が少なくなったことにより、小学生を主体として行われてきた行事が無くなる現状に、テレビや新聞で報道されている少子化問題がグッと身近に感じられました。

少子化により、文化が守られないという問題は日本各地で起きていることだと思います。私は少子化問題のことを真剣に考えるようになりました。少子化への対策は、もっと真剣に大きな社会問題として取り上げなくてはなりません。少子化、人口減少により、失うものの中には残していくべき宝があるからです。

私が参加している祭は、博多祇園山笠などのように誰もが知る有名な祭ではありません。しかし、幼い頃から親しんできた伝統的な思い出の詰まった行事です。無くなってしまふのはとても残念で悲しいです。

少し希望が持てるのは、二つの祭が廃止ではなく休止だということ、復活させることができるということです。「またいつか、復活させてほしい」という地区の人達の想いが感じられます。

私は大人になったら、行事の経験や知識を生かし、地区の祭を受け継いで復活させます。再びあの掛け声が元気に響くように。

「祝いましょう！もうひとせつ！祝うて三言！！」

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたのは、幼い頃から身近にあった行事が少子化によりほとんど無くなってしまったことがきっかけです。私が小学生になったばかりの頃は、地区に小学生や幼児は合わせて19人もいましたが、今は2人だけになってしまいました。少子化による影響は人口減少だけでなく、伝統的文化の衰退にもつながることを知りました。このことをもっと多くの人に知ってほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私は私、これからも

佐賀県 太良町立多良中学校 3年

酒邊 陽菜

「ありのままの自分であること」は難しい。でも私はありのままの自分でいたいと思っている。

私は前髪が白くその他の部分は黒髪である。なぜそうなったかはわからない。わかっているのはこれからも前髪は白いままということだけだ。今までは週に一度、白い部分を黒く染めていた。当たり前だった染めること。それをやめたのは、染めていることを知った友人からの一言がきっかけだった。

「前髪、染めなくてもいいんじゃない。黒と白の二色ってかっこいいと思う。」

そのとき、急に目の前が開けた気がした。別に染めなくても、私は私であることに変わりはない。しかも彼女はかっこいいと言ってくれた。嬉しかったというよりも、染めない、という選択肢があることに私は驚いていた。

それから私は前髪を染めることをやめた。実は髪を染める度に自分が自分ではなくなっていくような気がしていたからだ。しかしそれは自分が思っているほど簡単ではなかった。

まず、周りの人の反応が様々だった。いいね、と言ってくれた人もいる。周りの黒髪の人と違って変だ、と言った人もいる。私は私のままでいるだけなのになぜ私を責めるようなことを言うのだと、そんな人々を恨めしく思っていた。少し時間が経った今ではその人たちの言い分も少し理解できる。私がわざと髪を白くしていると誤解されたり、髪の色でトラブルが起きたりしないか心配して言ってくれた人もいたはずだ。でもそれは違うのではないだろうか。この世界の人、全員が違う人であって一人として同じ人はいない。視力が悪くて眼鏡をかけている人もいれば背が高い人、低い人もいる。私は、たまたま髪の一部が白くて他が黒いだけだ。なんら変わらない、一人の人間だ。それを髪の色が違うからトラブルが起きると考えられるのは少し悲しい。

最近、ニュースでよくブラック校則について取り上げられている。髪が少し茶色だから地毛証明書を提出させる学校もあるらしい。私の学校ではそんなものはなく、特別に何かあることはない。染めるも染めないも私の意思に任せてもらっている。日本人の髪は黒でなければならない、という考えは、偏見だ。偏見に基づいた校則はおかしい。だから、世の中でそんな校則をなくそうとする運動が起こってきている。私はこの変化が頭髪で悩む人たちの、希望の光になればいいなと思う。黒髪でいなければならないことなんて一つもない。でも自分のままでいるためには大きな一歩を踏み出さなければならない。そのときに大きな不安が自分の上のしかかる。何を言われるのか、受け入れられないのではないか、否定されるのではないのか。手さぐりで真っ暗な中から何が正しいのかを見つけ出さなければならないのかもしれない。そんなとき、そばに誰かがいてくれると思うだけで強くなれる。自分の全てを受け入れてくれる人が一人でもいることはとても心強く、その人がいることで頑張ろうと思える。私を理解してくれる人、みんなが違うのだからそのままの私でいてほしいと思ってくれる人。そんな人たちに救われる。全ての人がこのように偏見の心をなくして、本当にありのままに暮らせるようになる日は来るのだろうか。みんなが手をとり合って堂々と自分のままで暮らしたらどんなにすばらしいか。そのために私はこの髪のまま生きる。人は髪の色で判断されないことを堂々としていることで示したい。そして私はそっと誰かを支えてあげられるようなあたたかな存在になりたい。私の背中を押してくれた友人のように。

私の奮闘はまだまだ続く。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を見た目で悩んでいる人たちに届けたいです。「私は変なのかな」と悩んでいる人はきっとたくさんいると思います。なかなかありのままの自分であることは難しく、そのために踏み出す1歩も何度もためらって踏み出すものです。あなたは何もおかしくない、当たり前なのだからそのままのあなたが一番輝いているからとそんな人たちに伝えたいです。私のこの主張が少しでも多くの方に届いて、誰かの心の支えになればいいなと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

届け希望の歌

長崎県 大村市立郡中学校 3年

今里 倅

「あんなふうに歌いたい。歌でみんなを笑顔にしたい。」

そう父に言ったのは、今から六年前の小学三年生のときでした。友達に誘われ、初めて見た合唱団の定期演奏会。みんなが歌を歌って、どんなものなんだろうと、ワクワクがとまらなかったのを覚えています。幕が上がった瞬間に、私は目を奪われました。キラキラのステージ。紡がれる様々なメロディー。そして、まぶしいくらいに輝く笑顔で歌う団員たち。目に映った全てに心惹かれた私は入団を決意しました。

小さい頃から歌が大好きだった私。合唱団で、大好きな歌を大好きな仲間とともに歌えることが本当に楽しかったです。

さらに、歌は楽しいだけではないと感じたことがあります。それは、ある老人ホームへの慰問のときです。慰問では、定期演奏会で歌った歌、季節の歌、昔懐かしい歌を歌い、おじいさんおばあさんと交流します。最後にはお互いに「ありがとう。」や「楽しかったね。」と言い合っていました。しかしそのとき私と一人の先輩と一緒に歌ったおばあさんからは、「ありがとう…ありがとうねえ…。」

と言いながら、やさしく抱き締められました。目には涙がたまっていました。その姿を見た途端、胸があつくなりました。涙をぐっとこらえて、

「こちらこそありがとうございます！一緒に歌えてとても楽しかったです！」

と笑って言いました。私たちの歌は、誰かに感動を与えられる。こんなにも人の心を動かせるのだと感激しました。

この出来事から、私にとっての歌、合唱団が変わりました。歌には歌詞が、言葉があります。今までが適当に歌っていたというわけではありません。しかし、言葉をただ並べて歌うだけでは何も伝わらない。感動なんて与えられない。歌は何を伝えたいのか、どんな想いが込められているのかを理解して、私たちの合唱として伝えなければいけないと思うようになりました。そして、前よりずっと歌が、合唱団の仲間が大好きで大切な存在になり、この素敵な出会いが、私を大きく成長させてくれました。

しかし、新型コロナウイルスの影響により、いつでも合唱団が身近にあった日々が一変しました。大好きな歌が歌えない寂しさ、これからどうなってしまうのかという不安は募るばかりでした。世界中で猛威をふるうコロナウイルスが、どれだけの人の夢を、目標を、仕事を、普通の生活を、大切な人を、大切なものを奪っていったことでしょうか。

昨年十月、ようやく練習が再開しましたがその後も中止になったり一定期間休みにになったりして思うように歌うことができずでした。しかし、練習ができ歌っている間だけ、我慢のつらさや不安を忘れていられました。マスクで表情が見えなくても、マスクの下は、唯一見えている瞳は笑っています。コロナ禍でも歌えることは本当に幸せでした。あたり前はあたり前でないこと、あたり前がどれほどありがたく、幸せなことであるかと、身に染みて思いました。

世界が、環境が、日常が変わっても、いつまでも変わらないこと。歌と合唱団が大好きなこと。何より、歌は希望の光となることです。私は、歌でみんなを笑顔にするために合唱団に入りました。悲しくつらい涙を笑顔に元気で輝く笑顔をもっとキラキラの笑顔に変えられるように。私たちにできることは、笑顔を絶やさず歌い続けることです。あの日惹かれた笑顔は、私に素敵な出会いを与えてくれました。次は私が、仲間とともに感動と希望、心からの笑顔を与えたいです。またいつか、笑顔あふれる会場で、私たちの歌声が全ての人に届けられる日を待っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私が小学生より続けてきた合唱は、新型コロナウイルスの流行により失われてしまいました。とても辛いです。コロナ禍の中、私達の合唱だけでなく、職業、生活、かけがえのない人やものを失った人達が大量にいます。しかし、我慢に疲れ苦しくても諦めるのではなく、戦い続けなければなりません。負けないで、立ち止まらないで、共に希望の光へと一歩ずつ進んでいきたいという私の想いを、様々なものを失ったすべての人に届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

祖母の教え

大分県 竹田市立竹田南部中学校 2年

菅 朱李

私はこの夏、祖母から忘れられない話を聞き、深く考えさせられました。

それは、78年前の戦時中のことです。兵士として戦場に行った家の人手不足を補うため、田植えや稲刈りなどの農繁期に、「勤労奉仕」といって子どもたちは農作業に行くのが役目でした。当時小学2年生だった祖母も、上級生のお姉さんに連れられて、毎日あちこちの家の田植えに行っていたそうです。

その日の田植えは、朝鮮人の夫婦が借りていた田んぼで、ご主人は日本兵として戦地に行っているということでした。田植えが終わる頃、奥さんが背中に赤ん坊を背負い、幼い子どもの手を引きながら出てきました。小豆の入った米のおにぎりをかごにいっぱい差し出しながら

「ありがとうございます。ありがとうございます。おかげで田植えが終わりました。どうぞ食べてください。」と、頭を下げました。

当時、米や小豆は大変貴重でめったに手に入るものではありませんでした。その方は、精一杯の感謝の心を尽くしてくださったのです。ところが、

「朝鮮人のまんま、いらんよ！」

上級生が吐き捨てるように叫ぶと、皆を引き連れて逃げ出したのです。祖母は、その方の目に涙がいっぱい浮かんでいるのを見たそうです。『ああ、おにぎりを食べてあげたい。おいしいと言ってあげたい。』そう思いながらも、立ちつくしていた祖母に上級生は「早うおいで！」と強い口調で呼びました。祖母はどうすることもできず、心の中で「ごめんなさい」と言って皆のいる方へ走って行ってしまったそうです。日頃、笑顔しか見せない祖母の目には涙がにじんでいました。祖母は、78年たっても自分がしたことを悔やんでいるのだと、その人の涙を忘れないでいるのだと思いました。同時にそれは、祖母の相手を思う優しさだと思いました。

私はたずねました。

「ばあちゃんはどうして皆みたいに朝鮮人を馬鹿にしなかったの？その人の涙に気づけたの？」

「当時朝鮮は日本の植民地で子どもでさえも朝鮮人を馬鹿にしとった。ある時、近くに住んでいる朝鮮人の家に子どもたちが、『この朝鮮人！』と言って石を投げつけていたんじゃ。それを見た私のばあちゃん、朱李のひいひいばあちゃんになる人がな、『あの人は何も悪いことをしちやらん。日本に来て一生懸命働きよる。そんな人を粗末にしたらいかん。どんな弱い立場の人も見下して悪いことをしてはならん。そんなことをしたらお前を家に入れん。ご飯も食べさせん！』と言ってな。だから私も気が付いたんやろうなあ。実際、あの時のことを後々、一緒におった友達に話しても誰も覚えとらんかった。」

私は小学生のころに受けたいじめを思い出しました。遠足で一人ぼっちで食べるお弁当の味け無さ。エスカレートしていく嫌がらせ。無視され、どこにも居場所が無いような日々が続きました。二度と思い出したくもない、けれど忘れることもできない辛い記憶。でもいじめた人にとっては気にも留めないことだったのでしょ。

今もヘイトスピーチ、ネットへの悪質な書き込み、コロナ差別などの人権しん害が問題となっています。差別や攻撃の多くは、自分とは違うものへの無理解、偏見から生まれるように思います。誰の心にも差別の種はあるのかもしれない。私の心にも。

差別を無くすには、自分も相手も大事な存在なのだとということを私たち一人一人が気づき、お互いの違いを超えてみとめ合うことが大切なのです。

私は祖母や曾祖母のように相手の優しさや悲しみに気づける人になりたい。お互いを尊重し合って生きる人間になれるよう努力したいと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

曾祖母から祖母へ、私へとつないでくれた「相手も自分も大事にする」という教えを自分の心の真ん中に据えて生きていきたい。そのためには、自分の心にも差別の種があるということのを忘れず、相手を知ろうと努力し、互いに尊重し合えるような関係を築いていきたいと思っている。また、私たちを取り巻いている様々な人権問題について目をそらしたり、他人事にしたりせず考え、差別が少しでも無くなるよう行動していこうと思う。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

画用紙の世界に描く夢

宮崎県 川南町立唐瀬原中学校 1年

福岡 歩乃香

あなたには夢がありますか。絶対に就きたいと思う職業がありますか。簡単で、自分でも就けそうな職業ではなく、自分が一生懸命にやりたい、やり遂げたいと思えるものです。私は、毎月の収入が高いからという理由ではなく、自分の特技や趣味を最大限に生かせる、心から生きがいをもって働くことのできる職業に就きたいという考えをもっています。例えば、「自分の長所は正義感が強いところだから警察官になりたい」といった、自分らしく自分に合った職業に就くのが良いという考え方です。

現在、社会にはいろいろな職業があふれかえっています。AI、半導体の技術が発達し、近い将来、そう遠くない未来では、私たちの知っているさまざまな職業がなくなる可能性は低いと言われていています。そんな中で、私は「美術の先生になりたい」という夢があります。5歳の頃から絵を描き始めて、「楽しい」と思うことを重ねてきました。毎日、毎日絵を描いて「上手いね」と言われることも増えていきました。小学校に入学すると、いろんな作品展で賞をとりました。彫刻刀を使った作品でも賞をもらったこともありましたが、賞をもらってうれしかったのは、やっぱり大好きな絵でした。

また、私にはイラストレーターの仕事をしている親戚がいます。何度か絵を見てもらったことがあり、「これから努力して描き続ければもっと上手になるよ」と言われたこともあります。その言葉を信じ続けて絵を描いてきました。学年が上がるにつれて、デザイン系の仕事を任されることも多くなりました。仕上げたあと、友達から「すごいね、ありがとう」と言われることが一番うれしく、気持ちのよいものでした。何より、「みんなの役に立っている」と思えることが不思議と自信をくれました。小さな頃から好きで続けてきた努力が趣味になり、特技になって、みんなのための形になっていることが誇らしくもありました。絵に対する思いがますます強くなり、その後、美術館に行ったり、人の輪郭の描き方や目の表情の付け方などを勉強したりして、経験を積み重ねている最中です。

絵は、私に「自分が自分らしくいられる場所」を与えてくれます。絵を描いていると時間を忘れて夢中になれます。絵は日常生活の中で、自分にあった嫌なことを忘れさせてくれるものです。普段の私は、何に対しても関心がなく、喜怒哀楽がないと言われるます。ですが、絵を描いているときの私は、「いい顔をしている」と家族に言われます。絵を描くということ自体、自分自身を見つめ、自分と向き合っていく大切な時間なのです。そして私がさまざまな思いを表現できる場所は「画用紙の世界」であり、私が一番輝ける場所は絵に向き合っている時間なのです。

将来は「美術の先生」として、子どもたちに絵を描く楽しさや喜びを与えていきたいという思いがわいてきました。自分の心の中を自由に表現しながら楽しい時間を共有していきたいです。

「何か今、自分がやりたいことがあるのなら頑張ってみようよ。負けたっていいじゃん笑われたっていいじゃん。自分なりに満足できたらそれは大成功。」

私の大好きなこの言葉に支えられながら、私は夢を追い続け実現させます。絶対に。

この主張をどんな人に届けたいですか？

絵が苦手な人や絵を描くことが大好きなのに、「好き」と言えない人に、この主張を届けたいです。絵が好きな人でも、中には「絵を描くことが好き」と堂々と言えない人がいます。そんな人たちに、好きなこと・興味があることは素敵なこと！それは、自分の居場所であり、自分らしくいられる場所だよ！ということをお届けしたいです。そして、絵が好きな人、絵を描くことが好きな人と思いを共有していきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

今を生きる

鹿児島県 霧島市立横川中学校 2年

宮脇 大果

生きることってすばらしい。清々しい空気を胸いっぱい吸いこむこと。母の手料理をお腹いっぱい食べること。友達と楽しくおしゃべりすること。私は、身長 143 cm。決して大きくはない。生まれたときも 2200 g の小さな体だった。それでも、元気な産声を上げ生まれてきた。だが、生後一週間、母は、おむつを替えるときに違和感を覚えたという。白い便に目を疑った。病院を転々とし、ようやく病名が分かった。先天性胆道閉鎖症。一万人に一人という難病だった。胆管が詰まり、腸に胆汁が流れず、命の危険を伴う病気。大学病院に運ばれた私は、生後五十六日目にして十二時間に及ぶ大手術を受けることになった。きつとうまくいくと信じた父と母の思いもむなしく、主治医に呼ばれ、こう告げられた。

「術後の経過がよくありません。命の危険もありますので、覚悟をしておいてください。」

それは、スローモーションの世界で、医師の声が遙か遠くで囁かれるように聞こえたという。我に返った母は、病室で泣き崩れた。その肩を父が優しく抱きよせた。現実から逃げてしまいたい不安と絶望。小さな体に繋がれた何十本もの管。だが、その時だ。もちろん私は覚えていないが。その小さな手で、母の手を握り返したらしい。ぎゅっと、力強く。母の手を。「お母さん、私、生きてるよ」。

あれから十四年。これまで幾度となく手術を受けてきた。正直、手術は怖い。だが、心配をかけたくない私は、いつもこう答える。

「麻酔の味はレモン味。おいしそうでしょ。」

強がる私に気づかない母ではない。

「今日という日は、必ず終わるから。明日はきっと来るんだよ。」

目が覚めると、身動きすらできない私の手を母の温かい手がいつも包んでいた。

だが、一度だけ私は母に苛立ちをぶつけたことがあった。「胆道閉鎖症を守る会」に参加した帰りのこと。肝臓移植を受けた同年代の男の子、我が子を亡くしたおばあさんの話。すべての言葉が心にむなしく渦巻いていた。私は思い出していた。病気のせいで、私だけ鉄棒で遊べなかったこと。病気のせいにして、体育の時間のサッカーを休み、苦手なことから逃げだしたこと。私はつぶやいた。

「どうして私だけ……こんな体に生んだの。」

あの時の母の顔を私は一生忘れない。

「大果、ごめんね。でもね、病気から逃げることなんてできないの。病気とけんかしても何にも変わらないの。だったら、病気と一緒に仲良く手をつないで生きていこう。」

私の心にそっと温かい風が吹いた。翌日、私は、グラウンドに立った。苦手なサッカーと向き合おうと思った。ボールが怖かった。友達が思いきりぶつかってきたらと不安だった。だが、私の周りには、病気の私を温かく受け入れてくれる友人や家族、そして、病気と共に生きていくことを教えてくれた母がいる。母は、私の一番の理解者であり、目指す人だ。

プロサッカー選手の本田圭佑さんは、「現実を認めなければ、今を生きることはできない。」と語る。今、世の中は、コロナ禍に見舞われ、多くのことが制限される時代だ。だが、with コロナという新しい枠組みの中で、新しい生活様式を受け入れたとき、私たちは、自分らしく生きる道を見つけられるのではないかと。あの日、大手術を終え、私のおむつを替えた母は、おむつに頬を擦り寄せ、涙を流したという。

「大果のうんちがね、宝石みたいにきれいだったんだから。」

母は、今でも嬉しそうにこの話をする。私は、思う。ありのままの自分をすべて受け入れ、今を生きること。それはきつと明日につながり、朝陽を浴びてきらきらと道が輝き出すのではないかと。だから、私は今日も、笑顔と元気いっぱいの声で、生きていく。

「お母さん、私を生んでくれてありがとう。」

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は生まれてすぐ、先天性胆道閉鎖症と診断されました。腸に胆汁が流れず、命の危険を伴う病気です。幾度となく手術をする中で、私の病気に対する気持ちも変化してきました。今年の8月に入院することが決まり、今一度、自分の病気について、考えてみようと思い、この作品を書こうと思いました。

病気という現実を認め、病気と共に生きることを教えてくれた母のような強い人に私もなりたいです。

实施概要

第43回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2021～ について

全国大会開催要綱（web開催）

1. 趣旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

2. 開催期間

令和3年11月1日（月）～11月30日（火）

※審査結果は11月14日（日）に掲載します。

3. 開催方法

上記の期間、少年の主張全国大会 WEB ページに全国大会出場者（12名）の主張発表動画を掲載し、11月14日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載します。

なお、全国大会に選出されなかった作品については作文を掲載します。

【少年の主張全国大会 WEB ページ】 <https://www.niye.go.jp/services/plan/syutyou/>

4. 対象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

5. 主催

国立青少年教育振興機構

6. 協力

都道府県、青少年育成道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会

7. 後援

内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

8. 主張発表者（出場者）・発表内容

（1）主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者1名、計47名の中からブロック代表として選ばれた12名が主張発表を行います。

（2）ブロック代表定数

全国を5ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

○北海道・東北ブロック・・・2名

○関東・甲信越静岡ブロック・・・3名

○中部・近畿ブロック・・・3名

○中国・四国ブロック・・・2名

○九州ブロック・・・2名

（3）発表内容

ア. 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ. 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ. テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：○○県にある○○旅館 良い例：○○県にある旅館 など。）

- (4) 発表時間
5分程度(400字詰原稿用紙4枚程度)

9. 表彰

- (1) 全国大会出場者全員(12名)に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者及び主催者推薦代表者全員(35名)に同理事長より努力賞を贈ります。
- (2) 全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。
- (3) 全国大会出場者全員(12名)に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

10. その他

- (1) 応募は、各青少年育成都道府県民会議等を通して行います。
- (2) 全国大会に応募した作品の著作権は、国立青少年教育振興機構に帰属します。
- (3) 全国大会には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載いたします。
- (4) 全国大会実施後に作成する報告書(作品集)について、全国大会に応募(推薦)された47作品全てを掲載し、本人の氏名及び学校名等を公開するとともに、関係機関に配布します。
- (5) 全国大会出場者で希望する方は、受賞した翌年に当機構が実施する「ミクロネシア諸島自然体験交流事業」(7月～8月の10日程度)の参加者(中学生の場合)またはサブリーダー(高校生の場合)として参加することができます。(経費は当機構負担)

少年の主張都道府県代表者の推薦(作品の募集)について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成都道府県民会議等主催により開催し、青少年育成市町村民会議、市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び市町村大会、地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要 69ページ参照

全国大会出場者選考及び大会審査について

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

審査委員長	宮崎 緑	千葉商科大学 国際教養学部教授
審査委員	今井 純子	日本放送協会 解説委員
	内海 房子	国立女性教育会館 理事長
	江田 明弘	日本PTA全国協議会 副会長
	中前 純奈	第38回少年の主張全国大会 国立青少年教育振興機構理事長賞受賞者
	根本 幸枝	文部科学省 総合教育政策局 社会教育振興総括官
	笛木 啓介	全日本中学校長会 生徒指導部長
	古沢由紀子	読売新聞東京本社 編集委員
	松永 賢誕	国立青少年教育振興機構 理事
	御厩 祐司	内閣府 政策統括官(政策調整担当) 付 参事官(青少年企画担当)

2. 審査方法及び審査基準

① 事前審査(全国大会出場者選考の為の審査)

事前審査(作文審査・出場者選考審査)は、全国5ブロックごとに協議を行い、全国大会出場候補者を選出。全国大会出場候補者の中から合計12名を全国大会発表者として選考。

<作文審査>(在宅審査)

[日時] 令和3年9月30日(木)～10月13日(水)

[内容] 都道府県代表作文を読み、主に論旨について審査を行う

[基準] 以下の基準について、相対的評価を行う

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか(中学生らしさ)
- ② 新しい情報や視点があるか
- ③ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- ④ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- ⑤ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

[方法] ①ブロックごとに審査を行う

②評価

全国大会出場者としてふさわしいと思われる作文をブロックごとに5つ選考し、上位から順番に5点、4点、3点、2点、1点を付与する

<全国大会出場者選考最終審査>

[時期] 令和3年10月19日(火)

[場所] 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟1階 105室

[内容] 審査委員会での審議により、全国大会出場者12名を決定する

[基準] 以下の基準について、相対的評価を行う

①作文内容が優れており、共感と感銘を与えているか

②説得力のある話し方であるか

③話しぶりに熱意と迫力があるか

[方法] ①ブロックごとに協議を行う

②作文審査集計をもとにした協議により、全国大会出場候補者を絞り込む

③必要に応じ、全国大会出場候補者の動画を視聴し、論調の審査を行う

②全国大会審査

[日時] 令和3年11月10日(水)

[場所] 国立オリンピック記念青少年総合センター 大会議室

[内容] 全国大会出場者12名の動画を視聴し、総合的な審査を行い、協議により、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する

[基準] ①共感と感銘を与えていたか

②説得力のある話だったか

③熱意と迫力があつたか

④落ち着いて話していたか

⑤聴衆に感動を与えていたか

③設置された賞

全国大会出場者	(三賞)	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞	全国大会出場者のうち、優秀な3作品に授与した。
		審査委員会委員長賞	全国大会出場者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い2作品に授与した。
		国立青少年教育振興機構奨励賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査において選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全12名に授与した。
		国立青少年教育振興機構努力賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査に推薦されたことを賞し、都道府県代表者に授与した。

少年の主張大会応募者総数等

応募者数	404,266名
参加学校数	3,741校
全国大会(WEB開催)視聴者数	4,479名

都道府県代表者学年性別人数

学年/性別	男子	女子	計
中3	5	26	31
中2	2	7	9
中1	0	7	7
計	7	40	47

審査委員の感想



未来に向け 考え行動し そして発信を！

日本放送協会 解説委員

今井 純子

長引くコロナの影響で、閉塞感を感じ、内向きになりがちな時。中学生のやわらかい心から発せられるひとことひとことが、胸に刺さりました。「自分も行動しなければ」と、背中を押される思いでした。皆さんが自分と向き合い、行動し、そして、自分の言葉で表現しているからこそ、説得力があり、人を動かす力になるのだと思います。

岐阜県の細川さん。「違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはず」。違いから目を背け、距離を置くのではなく、違いを認め合い、考え続けることが大事という訴えは、多様な背景をもつ人たちが共に生きる、これからの社会に向け、大きな提言に聞こえました。

群馬県の富田さん。バーチャル化が加速して、簡単に情報を得、疑似体験ができる時代。だからこそ、手間や時間をかけ、本物を目にし、感じるこの価値を忘れてはいけけないのではないか、との問いかけには、報道機関に身を置く者としても、自分の目や耳で本物の情報を確かめる大切さを改めて感じさせられました。

沖縄県の砂川さん。とにかく前向き。なぜ、やる前から「出来ない」と言うのか。誰にでも挑戦するチャンスがある。どうすればできるようになるのかを考えよう。可能性を最大限に広げるのは、自分自身ではないか。「チャレンジしよう！」と、大人にも勇気をくれる訴えでした。

未来を生きていく若い人たちの前には、これまでにない多くの課題がそびえ立っています。今、解決策はわからない。でも、目を背けるのではなく、課題に向き合い、考え続け、行動する。そして、考えたことを自分の言葉で表現していくことが、きっと、人の心を動かし、社会を動かす力につながっていくと思います。未来を切り拓くために、これからも、考え、行動し、言葉で発信し続けてほしい。心から願っています。



認め合うこと・挑戦し続けること

国立女性教育会館 理事長

内海 房子

新型コロナウイルス感染症拡大を防止するため、今年の「全国大会」も昨年に引き続きオンラインでの開催となった。昨年は、コロナの影響で作文の応募件数は25万件まで落ち込んだが、今年は全国から、40万件にのぼる作文が寄せられたという。コロナ禍でもたくましく成長する中学生の熱い思いが伝わってくる。

内閣総理大臣賞に輝いた岐阜県の細川士禾さんの作文「認め合うことの大切さ」。

生まれつき片腕のない妹を見る周囲の差別的な目を冷静に受け止め、差別とは何か、差別をなくすためにはどうすればよいかを考察する。人は自分との違いを認識したとき、見て見ぬふりをする、そして、何もしようとしなないことが差別をしないことだと勘違いしている。そうではなくて、「まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何より大切」と訴える。そして、「妹のおかげで僕は大切なことに気付けた」「妹がいてくれたからこそ、相手の気持ちを考え行動することができた」と、妹への感謝の気持ちを述べている。差別の本質を突いた素晴らしい作文に思わず涙がこぼれた。

国立青少年教育振興機構理事長を受賞した沖縄県の砂川恵里香さんの作文「私の挑戦」。

砂川さんは生まれつき左手の肘から先がない。しかし、砂川さんは人が予想する以上にできることは多いと言う。周りの人たちは優しく手を差し伸べてくれる。幼稚園の頃、特製縄跳びを作って、片手でも飛べるようにしてくれたヨウコ先生。そして、いろいろなことに挑戦してできるようになると、自分のことのように喜んでくれる身近な人たち。砂川さんは何と幸せなのだろうと思わずにはいられない。この幸せは、砂川さん自身の力で勝ち取っている。「一人で抱え込まず、(中略)勇気を出して近くにいる人を頼るのです」と、今、コロナ禍で困窮している人たちに投げかけたいような言葉を放つ。どこまでも明るく前向きな性格に加え、現実を冷静に受け止める思慮深さが生み出すものだ。大人たちはとかく、障害を持つことは苦難の道と考えがちであるが、砂川さんの前には、挑戦し続ける道とその先の明るい未来が広がっている。



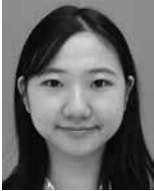
大きな成長の糧になる

日本 PTA 全国協議会 副会長

江田 明弘

今回初めて少年の主張全国大会の審査員を務めさせていただきましたが、子供たちの素晴らしい気づきや学びを明るく前向きに主張してくれたこと。そして、身近に感じたことや、社会的な問題や課題に至るまでそれぞれの視点で様々な角度から問題提起をしてくれたことにありがとうと言いたい。中学生の若い感覚とはいえ深く考えさせられることが多くありました。これから身体的な成長はもちろんですが、心も成長していく中で今回と同じテーマで自分自身どのように変化していくのか大変興味深いところです。

さて、一般的なこととして物事を論理的に組み立て、頭で推理推論したりすることが大事なことであり「思う」ことは大切なことではないように捉えられているように感じます。しかし、全ては思うことから始まると言っても過言ではありません。勉強ができることやテストの成績ももちろん重要なことですが、心の中にどのような何を「思う」のかというのは、それよりも遥かに大切な事です。人間のすべての行動の源、基本になっているのが「思う」ことです。更にその思い考えを人に伝わるように話すことはとても難しいことです。相手に伝わるように話すには、最低二つの要素が必要です。一つ目は、内容は抽象的なものよりもより具体的なもの。そしてもう一つは声の大きさ、抑揚、間の取り方、スピードなどを工夫する話す技術です。これを磨くだけで相手の捉え方も変わってきます。皆さんはこの大会に向け、原稿を何度も推敲し、練習を重ねてきたことと思います。その練習を重ねたことで昨日まで出来なかったことが出来るようになる。昨日に比べて今日、昨年に比べて今年の変化を成長といいます。この少年の主張に参加することでいつもと同じ町の景色や先生や友達とのなげない会話の中にもいつもと違って見えたり聞いたりしたことも成長につながっています。この大会に参加した君たちのこれからに大きな期待をしています。



これから先も、、

第38回少年の主張全国大会 国立青少年教育振興機構理事長賞受賞者

中前 純奈

今回、少年の主張全国大会の審査委員をさせていただき、中学生の「思考力・表現力」にとっても驚きました。画面の中からであっても、みなさんの発表から一人一人の思いを感じ取ることができ、大学生である私は、発表を聞き終わった後、少し自分の表現力に自信を無くしてしまったほどです、、、

そんな私ですが、ここで「少年の主張全国大会で受賞した後」の出来事を書かせていただきたいと思います。

私は第38回少年の主張全国大会で知的障がいをもつ姉への思いを発表しました。たくさんの人に私の思いを聞いていただけたことは、とても嬉しい思い出です。

あれから5年、私の姉は「知的障がいをもつ姉」から「ウィリアムズ症候群の姉」となりました。ウィリアムズ症候群とは染色体異常による先天性の難病です。このことが発覚したのは2021年1月。私がなんとなく視聴していたYoutubeで姉とそっくりな女の子を見つけたことがきっかけです。姉は今年で28歳。先天性の難病ですが、28年目にして妹の「まり（姉）、この病気かもしれん！」の一言から1～2万人に1人の割合で発症する「ウィリアムズ症候群」と診断されました。これは、中前家にとって「世紀の大発見」でした。この大発見により、今まで「知的障がいをもつ姉」として接しては気づくことができなかった姉の良さ、弱み、才能に気付くことができました。そんな家族の雰囲気を感じ取り、元々明るかった姉はさらに元気いっぱいのアラサーになりました。

ここまで長々と私の話をしてしまいましたが、最後に一つだけ中学生の皆さんに伝えたいことがあります。とても素晴らしい「思考力・表現力」を持っているみなさんでも、これから先、辛く、苦しい時があると思います。でもそんな時に「私は少年の主張に出たんだ！」という事実を忘れずに、心のお守りとして持ってほしいです。「中学生の時、こんなに自分の考えを表現することができたんだ」ということを時々思い出しながら、この大会をきっかけとして、自分を信じて、これからも輝いていってください。



これからの時代を担う中学生の皆様へ

文部科学省 総合教育政策局 社会教育振興総括官

根本 幸枝

長らくコロナ禍で学校や家庭生活に支障をきたす中、第43回少年の主張全国大会に、応募された約40万人の皆様にお礼と感謝を込めて拍手を贈ります。

今年も全国大会がWeb開催となり、発表を直接拝見できず残念でしたが、12名の皆様の発表は、日常生活での気づきや疑問、悩みなどに対して、自分自身で解を見出したものであり、どれも大変素晴らしい内容でした。

今回、文部科学大臣賞を受賞された山梨県代表の平澤朋佳さんは、マスク着用が日常となったことで、一人ひとりの表情が見えず意思疎通がしにくくなった経験を踏まえて、全校生徒120人のマスクなし写真とプロフィールを校内に掲示し、コミュニケーションの質を高める活動につなげました。コロナ禍で生じた学校生活の課題について、自ら考え学校全体を動かした姿に、未来を担う頼もしさを感じました。

また、内閣総理大臣賞の細川土禾さん（岐阜県）は、障害を持つ妹との関わりから、人との違いから目を背けるのではなく、正面から受け止め理解することの大切さを訴え、共生社会の実現に向けた可能性を感じました。国立青少年教育振興機構理事長賞の富田樹香さん（群馬県）は、コロナ禍でデジタル化が急速に進む様子に疑問を持ち、五感を通じた体験による「本物の価値」を知ることの素晴らしさと大切さを主張されていたのが印象的でした。

中学生の皆様が主役となるこれからの時代は、人生100年時代やSociety5.0社会と言われるように、これまで経験したことのない新しい世界が訪れます。その時代を切り拓くためには、変化に対応する創造力や実行力、コミュニケーション能力等が、益々重要になってきます。

皆様の今回の挑戦は、これらの能力を身に付ける良い機会だったと思います。課題を解決することは、より住みやすい社会づくりにつながります。失敗から学ぶことも多く、挑戦を続けることが大切です。皆様の今後の活躍を期待します。



幸せな未来を手に入れるために

全日本中学校長会 生徒指導部長

笛木 啓介

今も世界を覆うコロナ禍は、私たちの社会を「先行き不透明で不安な時代」にしている。その影響で、子供たちは日常の生活の中で多くの不安やストレスを抱え戦っている。昨年同様の状況の中で、子供たちは元気な姿で話すことができるのだろうか。そんな心配や疑問を抱えながら、「第43回少年の主張全国大会～わたしの主張2021～」の審査に臨むことになった。画面から流れてくる代表生徒のスピーチを聞いていると、子供たちの表情は実に豊かで力強く、前向きな内容だった。「そんな心配は杞憂に過ぎないのだろうか」とも思ったが、子供たちがどこかに持っている不安が、スピーチの内容に表れているとも感じた。今回のスピーチの内容には、コロナ禍の時代にあって、自分たちの感じている不安や不便さを、自分たちの工夫や努力で乗り切ることが、幸せな未来につながるのだという、コロナ禍との闘いに関する主張が目立ったように思う。

山梨県の平澤さんは、コロナ禍の必須アイテムとなった「マスク」によって失われかけた人とのコミュニケーションを取り戻すために「DATA120」という活動を考案し実践した。その結果、コロナ禍の前に感じられたような柔らかな空気と皆の一体感を学校の中で感じられるようになったという。人と人との関係を紡いでいくためには、相手の心を理解し、コミュニケーションの質を高めることが必要だと考えている。すべての人が「心のマスク」をはずし、コミュニケーションの質を高めることが、人生の質を高めていくことにつながると強く訴えた。また、群馬県の富田さんは、バーチャルな世界の可能性が広がる中、「本物の価値」が薄れていくように感じ不安になったという。コロナ禍の中で、ステイホームの名のもとに、インターネットの疑似空間の中での疑似体験がもてはやされているが、そのことにぼんやりとした疑問を抱いているという。本物に出会い、本物を知ることこそ、自分たちの人生を豊かなものにしてくれる手段であると確信している。

今回の全国大会への出場者に限らず、今大会に応募した40万人を超える中学生一人一人に敬意を表したい。その力を礎に、今後の弛まぬ努力によって、この不安な時代乗り越えて、誰もが幸せを感じることできる世界を実現してくれることを心から願う。



未来志向の柔軟な発想

読売新聞東京本社 編集委員

古沢 由紀子

新型コロナウイルスの影響で、「第43回少年の主張全国大会」の審査は昨年に続き、各地で収録された動画を対象とした審査となった。それぞれの発表は静かな室内で撮影されており、聴衆はいない。カメラに向かって熱弁を振るうのは難しかったかもしれないが、審査する側としては、発表者の表情もよく分かり、じっくりと主張に耳を傾けることができたように思う。

コロナ下での学校生活も2年目となり、生徒たちの発表からは、不自由な面も多い日々の中で、試行錯誤しながらも前向きに進む姿が鮮明に浮かび上がった。その代表例が、文部科学大臣賞に輝いた山梨県代表・平澤朋佳さんの発表「心のマスクをはずして」だろう。互いの表情を読み取れず、時には誤解が生まれる「マスク社会」。多感な年頃だからこそ、微妙な行き違いの影響は大きい。平澤さんの所属する生徒会では、全校生徒120人の顔写真とプロフィールを掲示し、互いの交流のきっかけになった。マスクが人と人を隔てる「壁」のように感じられたという平澤さんが、「伝え方の質を上げよう」と提案したことに、はっとさせられた。ネガティブにならず、困難な状況もよりよい未来につなげようという若者ならではの柔軟な発想だと思う。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受けた群馬県代表・富田樹香さんの「本物の輝き」も、コロナでオンラインによる「体験」ととどまりがちな状況だからこそ、実際に現場を訪ね、実物を見ることの大切さを訴えていた。休校や分散登校が続いた影響で、生徒の関係が希薄になりがちだという話を学校関係者から聞くことがある。そうした中、不登校の同級生に寄り添おうとする熊本県代表、葛谷護君（審査委員会委員長賞）の「教室」にも感銘を受けた。

今回は、例年参加率がそれほど高くない地域からも優れた作文が多く寄せられていた。中学生が自分を見つめ、社会に対してどんな問題提起ができるかを考える貴重な機会を、さらに広げられればよいと願う。



スタートライン

国立青少年教育振興機構 理事

松永 賢誕

初めて審査委員を務めました。審査の過程で驚いたのは、10人の審査委員の評価が意外に大きく分かれたことでした。審査委員会では、委員が各々の意見を述べて、大いに議論しました。その議論に加わる中で、たった10人の委員の中でも、考え方や感性が多様であることを強く感じました。また、ほかの委員のご意見を聴いて、都道府県代表の皆さんの主張の良いところに気付くこともありました。このような審査を経て、審査委員会としての結論がまとまった後は、それが私の「推し」と異なるものであっても納得し、清々しささえ感じることができました。

今回、47の都道府県代表の皆さんの主張の中で、特に印象に残っているのは、内閣総理大臣賞に選ばれた細川士禾さんの次の一文です。

「僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれない。」

生まれつき片腕のない妹さんが、ほかの人たちと違うと言われ悲しむ姿を見てきた細川さんが、自分との違いを認識した先に、相手のためにどのような行動が必要かを考えることができ初めて、スタートラインに立ったと言えるのだと気付き、語ってくれた言葉だと理解しています。他人と自分の違いを知るだけでなく、そこから、他人のために考え、議論し、行動することの大切さを思い起こしました。

今、私たちが暮らす社会は、ますます多様化しています。細川さんのほかにも多くの皆さんが、障がい、生活文化、性自認など、一人一人の違いについて考え、述べてくれました。新たに知ったこともありましたし、差別や偏見を無くしたい、自分が他人と違うことを理解してほしいといった切々たる思いを感じ、私にも何ができるかと考えずにはいられません。スタートラインに立たなければ、皆さんの主張に接して、あらためてそのように思っています。



受賞者以外の皆さんへ

内閣府政策統括官（政策調整担当）付参事官（青少年企画担当）

御厩 祐司

受賞者への賛辞については、他の審査委員が詳しく述べておられますので、私は、受賞者以外の皆さんについて、触れてみたいと思います。

まずは、宮城県・山内莉羅さん。〈私と僕と、そして「自分」〉とのタイトルが秀逸ですね。訴えたいテーマを、「自分」の言葉で、ギュッと凝縮して表現されています。

「自分の考えを書きましょう」とのテストの答えを、なぜ人に採点されないといけないのか？そんな鋭い問題提起から始まるのは、滋賀県・寺田愛さんのスピーチ。出だしから聴衆をグッと惹きつけました。

締め言葉が特にすばらしかったのは、千葉県・菊地大和さん。「自分の足元は、自分の手で守るんだ」との一言は、まさに地に足のついた表現ですね。“SDG s”との言葉にピンとこない人たちにも、大いに響いたのではないのでしょうか。

このほか、私が審査させていただいた各県代表の作品には、光輝く部分が必ず含まれるとともに、将来に向けた決意などで、力強く結ばれていました。

一方、各県代表に選ばれなかった約40万人の作品は、どのようなものだったのでしょうか。コロナ禍が長期化する中、答えが見つからない悩みや不安・不満を訴えたものや、ハッピーエンドでは終わらないものも、多かったのではないかと想像します。

「少年の主張」は、時代を映す鏡。作品の中には、社会をより良くするヒントがたくさん含まれているに違いありません。審査に当たられた学校や自治体の皆さんには、作中に込められた若者の思いをしっかりと受け止め、教育や行政施策の改善・充実につなげていただければと思います。

最後に、今回は応募されなかった皆さんへ。あなたのスピーチは、自分を変え、世界を変える可能性があります。上げた声は、上げなかった声よりも、はるかに実現しやすい。まずは、今の思いを紙に書き出してみましょ。次は、あなたの出番です！

少年の主張全国大会を振り返って

<参考資料>

「少年の主張全国大会」応募者数の推移

開催年度	開催回数	参加学校数	応募者総数 (人)	中学校在学者数 (人)	在学者数に対する 応募者の割合
1979 (昭和 54) 年	第 1 回	—	—	約 496 万 7 千	—
1980 (昭和 55) 年	第 2 回	—	—	約 509 万 4 千	—
1981 (昭和 56) 年	第 3 回	—	約 50,000	約 529 万 9 千	0.9%
1982 (昭和 57) 年	第 4 回	—	約 62,000	約 562 万 4 千	1.1%
1983 (昭和 58) 年	第 5 回	—	約 120,000	約 570 万 7 千	2.1%
1984 (昭和 59) 年	第 6 回	—	約 250,000	約 582 万 9 千	4.3%
1985 (昭和 60) 年	第 7 回	3,524	387,272	約 599 万 0 千	6.5%
1986 (昭和 61) 年	第 8 回	3,649	269,518	約 610 万 6 千	4.4%
1987 (昭和 62) 年	第 9 回	4,162	536,526	約 608 万 1 千	8.8%
1988 (昭和 63) 年	第 10 回	4,011	661,234	約 589 万 6 千	11.2%
1989 (平成 元) 年	第 11 回	4,359	774,035	約 561 万 9 千	13.8%
1990 (平成 2) 年	第 12 回	4,103	701,183	約 536 万 9 千	13.1%
1991 (平成 3) 年	第 13 回	4,176	735,862	約 518 万 8 千	14.1%
1992 (平成 4) 年	第 14 回	4,185	846,735	約 503 万 7 千	16.8%
1993 (平成 5) 年	第 15 回	4,166	812,370	約 485 万 0 千	16.7%
1994 (平成 6) 年	第 16 回	4,165	826,575	約 468 万 1 千	17.7%
1995 (平成 7) 年	第 17 回	4,021	757,791	約 457 万 0 千	16.6%
1996 (平成 8) 年	第 18 回	4,333	765,071	約 452 万 7 千	16.9%
1997 (平成 9) 年	第 19 回	4,245	836,467	約 448 万 1 千	18.7%
1998 (平成 10) 年	第 20 回	4,170	858,146	約 438 万 1 千	19.6%
1999 (平成 11) 年	第 21 回	4,213	868,574	約 424 万 4 千	20.5%
2000 (平成 12) 年	第 22 回	4,187	802,185	約 410 万 4 千	19.5%
2001 (平成 13) 年	第 23 回	4,185	790,383	約 399 万 2 千	19.8%
2002 (平成 14) 年	第 24 回	4,059	693,114	約 392 万 9 千	17.6%
2003 (平成 15) 年	第 25 回	3,841	534,730	約 374 万 8 千	14.3%
2004 (平成 16) 年	第 26 回	3,822	551,723	約 366 万 4 千	15.1%
2005 (平成 17) 年	第 27 回	3,944	542,032	約 362 万 6 千	14.9%
2006 (平成 18) 年	第 28 回	4,015	544,120	約 360 万 2 千	15.1%
2007 (平成 19) 年	第 29 回	4,044	510,763	約 361 万 5 千	14.1%
2008 (平成 20) 年	第 30 回	4,018	498,029	約 359 万 2 千	13.9%
2009 (平成 21) 年	第 31 回	4,126	511,519	約 360 万 0 千	14.2%
2010 (平成 22) 年	第 32 回	4,204	515,232	約 355 万 8 千	14.5%
2011 (平成 23) 年	第 33 回	4,142	524,061	約 357 万 3 千	14.7%
2012 (平成 24) 年	第 34 回	4,127	550,112	約 355 万 2 千	15.5%
2013 (平成 25) 年	第 35 回	4,257	565,500	約 353 万 6 千	16.0%
2014 (平成 26) 年	第 36 回	4,172	563,777	約 350 万 4 千	16.1%
2015 (平成 27) 年	第 37 回	4,253	547,977	約 346 万 5 千	15.8%
2016 (平成 28) 年	第 38 回	4,278	555,559	約 340 万 6 千	16.3%
2017 (平成 29) 年	第 39 回	4,188	542,236	約 333 万 3 千	16.3%
2018 (平成 30) 年	第 40 回	4,298	522,229	約 325 万 1 千	16.1%
2019 (令和 元) 年	第 41 回	4,171	496,492	約 321 万 8 千	15.4%
2020 (令和 2) 年	第 42 回	2,660	252,732	約 321 万 1 千	7.9%
2021 (令和 3) 年	第 43 回	3,741	404,266	約 322 万 9 千	12.5%

※中学校在学者数は、文部科学省令和 2 年度学校基本調査（確定値）区分「中学校」を参考にしています。

「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第1回	昭和54年度	総理府総務長官賞	北海道	利尻町立沓形中学校	3年	池原広文	校門に思う
		総理府総務長官賞	栃木	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀芳広	私の希望
		総理府総務長官賞	岐阜	美山町立美山北中学校	1年	尾岡良子	私の家庭
		総理府総務長官賞	大阪	豊中市立第5中学校	1年	長岡信男	はばたけ未来に
		総理府総務長官賞	岡山	倉敷市立黒崎中学校	1年	中野恵美	私の訴えたいこと
総理府総務長官賞	佐賀	武雄市立川登中学校	3年	松尾直子	少年として訴えたいこと		
第2回	昭和55年度	内閣総理大臣賞	新潟	村上市立村上第1中学校	3年	江見寛子	今、私達にできること
		総理府総務長官賞	広島	福山市立城東中学校	3年	森雅子	生きる
		文部大臣賞	香川	三野町立三野津中学校	3年	佐川圭三	「やべち」に学ぶ
第3回	昭和56年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立雄新中学校	3年	早川明美	心の糧
		総理府総務長官賞	鹿児島	鹿児島市立西紫原中学校	2年	寺田美重	身障者として訴えたいこと
		文部大臣賞	大阪	堺市立庭台台中学校	3年	寺西洋子	受験・仲間・心
第4回	昭和57年度	内閣総理大臣賞	栃木	佐野市立城東中学校	3年	松本由紀子	私は教師になりたい
		総理府総務長官賞	兵庫	神戸市立御影中学校	1年	和田浩介	少年として訴えたいこと～エチオピアで見たことから～
		文部大臣賞	広島	呉市立両城中学校	2年	竹下愛	私の決心
第5回	昭和58年度	内閣総理大臣賞	高知	伊野町立伊野中学校	1年	山勢憲一郎	心をこめて「ありがとう」
		総理府総務長官賞	栃木	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田寿美江	両親に学ぶ
		文部大臣賞	新潟	六日市町立六日町中学校	3年	関 昭典	今、学校で考えていること
第6回	昭和59年度	内閣総理大臣賞	長崎	有家町立有家中学校	2年	松島吉宏	鳴らないチャイム
		総務庁長官賞	富山	小杉町立小杉中学校	1年	定司美恵子	私の希望
		文部大臣賞	新潟	巻町立巻西中学校	3年	小林三枝	乗り越えて今
第7回	昭和60年度	内閣総理大臣賞	愛知	名古屋市立宮中学校	3年	大島幸子	今だから言える
		総務庁長官賞	新潟	黒川村立黒川中学校	3年	中野克英	寺に生まれて
		文部大臣賞 特別賞	長崎	西有家町立西有家中学校	3年	安達かよ	その時私は
		文部大臣賞 特別賞	埼玉	秩父市立大田中学校	2年	中田昌伸	僕の家「酪農家の跡継ぎとして」
第8回	昭和61年度	内閣総理大臣賞	香川	丸亀市立南中学校	1年	垂水希美枝	ありのままの姿で
		総務庁長官賞	島根	出雲市立出雲第二中学校	3年	米原のぞみ	「のぞみて・・・」母の言葉に生きる
		文部大臣賞	鹿児島	末吉町立末吉中学校	2年	白鳥哲也	手話から学んだこと
		特別賞	山形	長井市立北中学校	3年	佐藤真理	一通の手紙から
		特別賞	沖縄	名護市立東江中学校	1年	大城洋子	目標に向かって
第9回	昭和62年度	内閣総理大臣賞	長崎	県立野崎養護学校中学部	2年	野田綾子	心で握手
		総務庁長官賞	岡山	倉敷市立新田中学校	1年	岡田良平	僕の弟
		文部大臣賞	福井	武生市立武生第一中学校	2年	谷口敏和	いじめられっ子を教え！
		特別賞	新潟	津南町立津南中学校	3年	小野寺優子	恵福園のおばあちゃん
		特別賞	愛媛	伊予市立港南中学校	3年	一色寿恵	創り出す喜びを胸に
第10回	昭和63年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立勝山中学校	3年	瀧本則隆	心をみがく～ロシア人基地の清掃活動を通して～
		総務庁長官賞	静岡	島田市立島田第一中学校	3年	大石寿宏	国際化を考える
		文部大臣賞	鳥取	東郷町立東郷中学校	3年	石賀正元	生きる幸せ
		特別奨励賞	山形	平田町立飛鳥中学校	3年	富樫美起	国際社会への目覚め
		特別奨励賞	東京	私立桐朋女子中学校	3年	正木綾	勉強より大事な勉強
		特別奨励賞	京都	京北町立周山中学校	3年	山田義治	人間の生き方について思うこと
第11回	平成元年度	内閣総理大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	3年	久富薫	地球にやさしく
		総務庁長官賞	福井	鯖江市立中央中学校	2年	吉田正樹	努力のすばらしさ
		文部大臣賞	山形	鶴岡市立鶴岡第四中学校	3年	阿部幸	生きているということ
		特別奨励賞	千葉	大多喜町立大多喜中学校	2年	張本敏美	私の名前は張本敏美
		特別奨励賞	新潟	枕崎市立松浜中学校	3年	石黒葉子	我が家の騷
		特別奨励賞	和歌山	美里町立美里中学校	3年	今岡万純	祖父の看病を通して
第12回	平成2年度	内閣総理大臣賞	愛媛	今治市立南中学校	2年	馬越裕美	兄貴に乾杯
		総務庁長官賞	福島	福島市立福島第一中学校	3年	市原亮	部活動から学んだもの
		文部大臣賞	茨城	水戸市立国田中学校	3年	宮田敦子	自然を大切に
		特別奨励賞	新潟	新井市立新井中学校	3年	伊藤よし子	この手にかかる私の願い
		特別奨励賞	滋賀	栗東町立栗東西中学校	3年	勝西紀之	人のためになること・・・
		特別奨励賞	奈良	明日香村立聖徳中学校	3年	飛鳥朝子	母の言葉を聞いて
第13回	平成3年度	内閣総理大臣賞	島根	三隅町立三隅中学校	3年	吉村幸雄	ぼくの夢
		総務庁長官賞	新潟	弥彦町立弥彦中学校	3年	皆川辰男	長男の宿命から
		文部大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	2年	城島澄子	地球のみみだ
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	佐藤郁子	今、私達が街をつくる
		審査委員会特別賞	東京	多摩市立貝取中学校	3年	末吉優子	ボランティア活動と本当の目
		審査委員会特別賞	神奈川	私立函嶺白百合学園中学校	1年	早川幸恵	帰りを待つ人々
第14回	平成4年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立西中学校	2年	泉正徳	苦しみも悲しみも肥料に
		総務庁長官賞	富山	魚津市立西部中学校	2年	高谷朋花	七十点の両親が最高
		文部大臣賞	北海道	弟子屈町立弟子屈中学校	3年	横川心	命、育て
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	伊豆田あかり	心と外見
		審査委員会特別賞	神奈川	横浜市立洋光台第二中学校	3年	山谷明子	私の夢
		審査委員会特別賞	長崎	福江市立福江中学校	1年	平山長富	心の鐘
第15回	平成5年度	内閣総理大臣賞	宮崎	宮崎市立宮崎東中学校	3年	泉裕一郎	待っていた学校週五日制
		総務庁長官賞	青森	十和田市立犬深内中学校	2年	大久保礼子	今を大切に
		文部大臣賞	沖縄	石垣市立石垣中学校	3年	金城紫穂	ぬくもり
		審査委員会特別賞	長野	更埴市立屋代中学校	3年	松沢かおる	ブルタブと私
		審査委員会特別賞	福島	本宮町立本宮第一中学校	3年	国分かおり	「生きる」ということ
		審査委員会特別賞	和歌山	下津町立下津第二中学校	1年	浜英樹	僕の育った塩津で
審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立福田南中学校	1年	阪本真一	レイ = アイクマンそれは本当の友達		
審査委員長激励賞	群馬	県立盲学校中学部	3年	長峰美枝	私の夢		

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第16回	平成 6年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	沖縄	沖縄市立山内中学校	3年	稲嶺彩子	夢を持って
			栃木	私立作新学院中等部	3年	高内めぐみ	父が教えてくれたこと
			秋田	平鹿町立醍醐中学校	3年	菅原嘉治	りんご農家に生まれて
			茨城	協和町立協和中学校	3年	河田友里	力強く、わたしは生きたい
第17回	平成 7年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立西中学校	1年	小野めぐみ	私の戦い
			茨城	協和町立協和中学校	2年	中里成喜	自分自身に克つために
			愛知	旭町立旭中学校	3年	安藤佳代子	旭の町に生きる
			東京	荒川区立日暮里中学校	1年	高宗哲	僕たちにできること
第18回	平成 8年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	福岡	勝山町立勝山中学校	2年	義経千晶	勇気を
			東京	台東区立下谷中学校	3年	岡村朋子	蜘蛛の巣
			熊本	山鹿市立鶴城中学校	3年	神崎真由	私の試験
			島根	西郷町立西郷南中学校	1年	常角和代	広い目で
第19回	平成 9年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	静岡	沼津市立第五中学校	3年	露木義章	A先輩から学んだこと
			三重	私立皇学館中学校	2年	宮本真衣	海の命を守ろう～おばあさんに教えられたこと～
			山梨	韮崎市立韮崎東中学校	3年	高保かおり	在宅介護から考えたこと
			島根	西郷町立西郷南中学校	3年	吉田修	きゅうり
第20回	平成 10年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	鹿児島	有明町立宇都中学校	3年	坂口潤成	僕の町 - 僕の夢
			神奈川	山北町立清水中学校	1年	武尾一興	中学生になって
			奈良	生駒市立緑ヶ丘中学校	1年	中地まりあ	自然の魂
			山形	長井市立長井南中学校	3年	鈴木智恵	ピナアダム、私の道しるべとして
第21回	平成 11年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	山口	徳山市立岐陽中学校	3年	川崎祐樹	同じ人間だから
			茨城	阿見町立阿見中学校	3年	湯原瑞紀	みんなで学校を創ろう
			愛媛	肱川町立肱川中学校	3年	竹本咲子	うちは五人家族
			栃木	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林朝子	家族と支えあう中で
第22回	平成 12年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣奨励賞 審査委員会特別賞	東京	港区立青山中学校	3年	秋田絵麻	本当の幸せとは・・・
			滋賀	石部町立石部中学校	3年	中川智香子	さわやかな学校をめざして～トイレからの発信～
			岡山	倉敷市立西中学校	3年	花田春香	あなたは、我が日本愛していますか？
			鹿児島	喜界町立第二中学校	3年	前泊佑香	島うたの心を伝えたい
第23回	平成 13年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	新潟	六日町立六日町中学校	1年	天海琢磨	ぼくは僕
			奈良	私立智辯学園中学校	1年	北側真由佳	私のバリアフリーの第一歩
			富山	高岡市立南星中学校	3年	炭谷英信	言葉の思い出から学んだもの
			東京	足立区立第十四中学校	1年	荒谷真理子	努力が教えてくれた事
第24回	平成 14年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	大阪	大阪明星学園明星中学校	3年	植田倫啓	「ケータイ」と「僕」
			鹿児島	志布志町立志布志中学校	2年	西国領君嘉	日本の心を舞う
			静岡	下田市立稲生沢中学校	3年	河井千佳	私の個性
			和歌山	和歌山市立東和中学校	3年	岩橋聖恵	妹の笑顔
第25回	平成 15年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	長崎	島原市立第三中学校	3年	西誠	これから頑張るんだ
			秋田	神岡町立平和中学校	3年	杉澤綾香	ホームステイとホストファミリー体験記
			沖縄	浦添市立港川中学校	2年	渡瀬次オースティン誠	ダブルの人生を過ごしたい
			長野	大町市立第一中学校	3年	柴原理志	揺るがない想い
第26回	平成 16年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山形	山形市立蔵王第一中学校	2年	澤田充史	僕の見たヒロシマ
			宮崎	山之口町立山之口中学校	1年	徳留彩乃	私になりたい
			岐阜	七宗町立神測中学校	2年	上野由貴	世界が一つになるために
			福島	霊山町立霊山中学校	3年	佐藤寛和	ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 -
第27回	平成 17年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	富山	高岡市立伏木中学校	3年	飯田優里香	かっちゃんを支える伏木の絆
			山口	長門市立深川中学校	2年	中嶋詩織	ともに生きる
			岩手	北上市立南中学校	2年	菅原周平	嘶の言葉と言葉の話
			富山	氷見市立南部中学校	2年	沈道 静	茶道の香りが教えてくれたこと
第28回	平成 18年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	栃木	真岡市立真岡中学校	3年	菱沼優希	受け継がれる命 - その重さを・・・
			徳島	那賀川町立那賀川中学校	3年	坪井克裕	今、訴えたいこと
			宮崎	三股町立三股中学校	3年	福田聖伍	命をつなぐアサガオ
			岩手	盛岡市立上田中学校	3年	坂本潤奈	私は地球
第29回	平成 19年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	東京	墨田区立立花中学校	3年	渡辺隆介	今に生かそう「江戸草鞋」を
			山形	南陽市立宮内中学校	3年	平 暁祐	「とんと音」を未来へ
			鹿児島	始良町立山田中学校	1年	新園祐花	今を生きる私
			熊本	南阿蘇村立白水中学校	3年	後藤奈々	私と沖縄
第30回	平成 20年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	愛知	豊田市立崇化館中学校	3年	蔭ぶんてい	為什麼、そして謝々
			愛知	豊田市立美里中学校	3年	武田聡美	「命」を生きる人との出会い
			埼玉	加須市立昭和中学校	2年	町田卓哉	何だっていいんだあ
			愛媛	内子町立大瀬中学校	1年	東影喜子	猪の涙
第31回	平成 21年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	熊本	産山村立産山中学校	3年	中村那津三	なぜ母牛「あやか」は死んだのか
			沖縄	石垣市立大濱中学校	3年	新城利絵	島の心をメロディにのせて
			富山	高岡市立志貴野中学校	3年	小久保緑	田んぼと私
			大分	竹田市立竹田中学校	3年	廣瀬岳	メッセージ～特攻基地・知覧～
第32回	平成 22年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	宮城	気仙沼市立気仙沼中学校	3年	志田晶	私も「小さな波」となって
			静岡	牧之原市立相良中学校	3年	瀧谷美紀	支えられた私
			新潟	村上市立平林中学校	3年	小池尚輝	音のない世界、声のない会話
			奈良	智辯学園奈良カレッジ中学校部	3年	小川歌穂	スマイルと真心はタダ
第33回	平成 23年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	島根	安来市立広瀬中学校	3年	田邊光	故郷を思っ
			静岡	沼津市立第三中学校	3年	内村繪笑	命
			愛知	豊田市立足助中学校	3年	藤井成一	父の言葉の意味を知って
			愛媛	新居浜市立西中学校	3年	飯尾まい	命のチキンカレー
第34回	平成 24年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	長崎	佐世保市立黒島中学校	3年	松本朋之	黒島だからこそ
			福島	いわき市立勿来第二中学校	3年	瓜生健悟	震災を乗り越えて
			新潟	柏崎市立第一中学校	3年	西澤望美	過去と今と未来を生きる
			東京	葛飾区立常盤中学校	2年	齋藤麗香	家族の本当の意味
第35回	平成 25年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	岩手	陸前高田市立気仙中学校	3年	小笠原和恵	高らかに 響け

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第34回	平成 24年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	千葉	千葉県立千葉中学校	3年	山本恭輔	リアルに人とつながるということ
			福井	福井県立盲学校	3年	山本穰梨	私の夢 私の生き方
			熊本	宇土市立網田中学校	3年	加来萌	父と私がふるさと網田を愛する理由
			福島	いわき市立中央台北中学校	3年	山野邊のどか	助け合いのバトン
第35回	平成 25年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	宮城	気仙沼市立小原木中学校	3年	梶川裕登	忘れないために
			大分	杵築市立杵築中学校	3年	大柳涼子	マイファミリー
			兵庫	赤穂市立有年中学校	3年	松本優香	十五歳の決意
			愛知	豊田市立石野中学校	3年	安藤明日香	伝統を受け継ぐ
第36回	平成 26年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	福岡	飯塚市立飯塚第一中学校	3年	山本由菜	子は宝～自分の命より大切なもの
			山形	酒田市立第六中学校	3年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い
			高知	中土佐町立久礼中学校	2年	林萌桃	いのちの花・咲いて
			島根	吉賀町立柿木中学校	3年	河野鉄太	鬼退治
			沖縄	那覇市立那覇中学校	2年	高橋天洋	「中国人」という名の偏見
第37回	平成 27年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	広島	広島市立国泰寺中学校	2年	藤井志穂	語る思いと聞く思い
			東京	板橋区立中台中学校	3年	張哲語	中国と日本の狭間にて
			大阪	堺市立登美丘中学校	3年	伊勢川翠	素晴らしい奇跡の集合体
			群馬	明照学園樹徳中学校	3年	夢沼花音	10万分の1.5の奇跡
			沖縄	八重瀬町立東風平中学校	3年	河野水穂	乗り越えたからこそ見えたもの
第38回	平成 28年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	岐阜	関市立旭ヶ丘中学校	3年	大見夏鈴	障がいとは個性
			広島	広島市立二葉中学校	2年	牟田悠一郎	戦争を知ること
			三重	四日市市立羽津中学校	3年	中前純奈	伝えたいこと
			新潟	五泉市立五泉北中学校	1年	高橋心太郎	みんなが幸福な社会を
第39回	平成 29年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	新潟	新潟県立燕中等教育学校	2年	平澤幸芽	仲間を守る一言
			島根	海士町立海士中学校	3年	井手上漠	カラフル
			群馬	太田市立南中学校	3年	森田愛美	私は、私の足で生きていく。
			愛知	蒲郡市立蒲郡中学校	3年	荒島彩乃	たった一言が言えなくて
			鹿児島	鹿児島市立坂元中学校	2年	松元一真	本当の平和へ
第40回	平成 30年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	山形	天童市立第三中学校	3年	岩淵礼姫	人生を駆け抜ける
			島根	隠岐の島町立西郷中学校	1年	高梨はな	ダブル
			熊本	御船町立御船中学校	3年	坂本優	響け！幸せのメロディー
			静岡	浜松市立佐久間中学校	3年	内山ほの葉	自分を好きになる
			愛知	豊田市立井郷中学校	3年	富田真亜玖	思いやりは言葉を超える
第41回	令和 元年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	東京	筑波大学附属視覚特別支援学校(中学部)	1年	藤田大悟	心の扉
			熊本	熊本大学教育学部附属中学校	3年	廣岡里奈	私が望む優しい未来は
			山梨	北杜市立甲陵中学校	2年	小松日菜	繋ぐ糸が切れないように
			宮城	登米市立佐沼中学校	3年	加藤海音	十人十色
			静岡	静岡市立清水両河内中学校	3年	望月香琳	地域と共にある生徒会～今、私たちにできること、すべきこと
第42回	令和 2年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	鹿児島	霧島市立横川中学校	3年	池島音羽	言葉を紡ぐ
			栃木	大田原市立金田北中学校	3年	荒井千恵理	静から動へ
			愛知	豊田市立末野原中学校	3年	戸塚優羽	目には見えないもの
			静岡	浜松市立北浜中学校	3年	村松グリン良智美	人生のかけがえのない財産について
			島根	松江市立穴道中学校	3年	武田はぐみ	「らしさ」を輝かせる
			熊本	熊本市立出水南中学校	3年	大田直人	你好ニッポン
第43回	令和 3年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	岐阜	養老町立高田中学校	3年	細川士禾	認め合うことの大切さ
			山梨	北杜市立甲陵中学校	3年	平澤朋佳	「心のマスク」をはずして
			群馬	太田市立南中学校	3年	富田樹香	本物の輝き
			熊本	宇城市立松橋中学校	3年	葛谷護	教室
			沖縄	宮古島市立久松中学校	1年	砂川恵里香	私の挑戦

令和3年度都道府県大会実施概要

都道府県名	主催者		大会名	
	開催期日		会場	
	発表者数	応募者数	参加学校数	視聴者数
	実施内容			

北海道・東北ブロック (1道6県 応募者数 60,776名)

1	公益財団法人北海道青少年育成協会、北海道	令和3年度北海道青少年育成大会(「少年の主張」全道大会)		
	令和3年9月10日(金)～9月30日(木)	公益財団法人北海道青少年育成協会ホームページ上で開催		
北海道	16名	25,834名	279校	580名
	各総合振興局・振興局地区大会の最優秀者14名及び札幌市代表者2名による北海道大会(動画審査)を開催。最優秀賞(北海道知事賞)1名、優秀賞(北海道教育委員会教育長賞・北海道PTA連合会会長賞・(公財)北海道青少年育成協会会長賞各1名)、北海道コンサドーレ札幌賞4名を選考。審査委員5名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、WEB開催。			
2	青少年育成青森県民会議	第43回青森県少年の主張大会(動画審査)		
	令和3年9月14日(火)	青森県庁議会棟6階 第一委員会室		
青森県	8名	16名	8校	7名
	県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された8名による青森県大会(動画審査)を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名を選考。審査員5名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
3	わたしの主張岩手県大会実行委員会	第23回わたしの主張岩手県大会		
	令和3年9月15日(水)	岩手県庁8階 8-L会議室		
岩手県	17名	3,630名	148校	0名
	地区大会より推薦された17名による岩手県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞3名を選考。審査委員7名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、作文及び動画審査。			
4	青少年のための宮城県民会議、河北新報社	令和3年度少年の主張宮城県大会		
	令和3年10月1日(金)	宮城県庁みやぎ広報室		
宮城県	14名	11,883名	163校	57名
	12地区で地区大会を実施し、地区大会から推薦された代表者14名(仙台市は各1名、仙台地区は2名、他地区は1名、開催地区からはプラス1名)による宮城県大会を関係者のみ無観客で開催。(別室でリモート視聴も実施)宮城県知事賞1名、青少年のための宮城県民会議会長賞2名、優良賞(県大会出場者全員)を選考。審査員6名			
5	公益社団法人青少年育成秋田県民会議、秋田県	わたしの主張2021(第43回少年の主張秋田県大会)		
	令和3年9月15日(水)	秋田市文化会館		
秋田県	13名	4,806名	30校	11名
	県北・県中央・県南地区で予選大会を開催。各地区大会優秀者12名及び、県大会開催学校推薦者1名の計13名による、秋田県大会を関係者のみにて無観客での開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、優良賞8名を選考。審査委員6名			
6	(公社)山形県防犯協会連合会、山形県青少年育成県民会議、(株)山形新聞社、山形放送(株)	第60回山形県少年の主張大会～いま伝えたい 私のメッセージ～		
	令和3年9月25日(土)	山形国際交流プラザ 山形ビッグウイング 大会議室		
山形県	15名	3,728名	73校	71名
	各ブロック大会(山形6名、最北3名、庄内3名、置賜3名)において選考された代表者15名による山形県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞2名を選考。審査委員5名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、関係者以外無観客開催。			
7	福島県青少年育成県民会議	第43回少年の主張福島県大会(WEB開催)		
	令和3年9月17日(金)～9月30日(木)	福島県青少年育成県民会議ホームページ		
福島県	16名	10,879名	134校	0名
	各青少年育成市町村民会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた15名及び開催地の中学生1名による福島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞5名、優良賞10名を選考。審査員7名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、WEB開催。			

関東・甲信越静岡ブロック (1都10県 応募者数 121,724名)

8	公益社団法人茨城県青少年育成協会	令和3年度少年の主張茨城県大会		
	令和3年9月25日(土)	ラジオ茨城放送のスタジオ(発表収録及び表彰)		
茨城県	10名	13,507名	138校	0名
	各中学校2作品以内の推薦された作品を主張文審査委員会で発表者10名を選出。新型コロナウイルス感染症の影響により、主張大会の開催を中止。大会審査は主張文審査結果として、選出された10名の主張発表をラジオで後日放送。優秀賞(発表者10名)、更にその中から、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞、水戸西ライオンズクラブ会長賞(茨城県知事賞受賞者)、鹿島アントラーズ賞(茨城県知事賞受賞者、茨城県議会議長賞受賞者、茨城県教育委員会教育長賞受賞者)を選考。審査委員6名			
9	栃木県青少年育成県民会議、栃木県、栃木県教育委員会	第44回少年の主張発表県大会		
	令和3年9月18日(土)	栃木県総合文化センター サブホール		
栃木県	16名	13,542名	173校	32名
	県内8地区で各中学校の代表1名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された16名による栃木県大会を開催。最優秀賞(栃木県知事賞)1名、優秀賞(栃木県教育委員会教育長賞)3名、奨励賞(栃木県青少年育成県民会議理事長賞)12名を選考。審査委員9名			
10	群馬県、群馬県教育委員会、群馬県青少年育成推進会議	第43回少年の主張群馬県大会		
	令和3年9月14日(火)	動画審査のため、会場使用なし		
群馬県	16名	42,921名	169校	0名
	市町村大会、教育事務所ブロック大会を経て選出された16名による群馬県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、努力賞11名を選考。審査委員7名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
11	埼玉県、埼玉県教育委員会、青少年育成埼玉県民会議	令和3年度少年の主張埼玉県大会		
	令和3年8月22日(日)	さいたま共済会館大ホール		
埼玉県	15名	10,629名	232校	84名
	作文審査により選出された5名(中学生の部)による埼玉県大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞)1名、優良賞(県民会議会長賞)3名を選考。審査委員11名			

12	千葉県青少年総合対策本部（千葉県・千葉県教育委員会・千葉県警察本部）	第43回「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会		
	令和3年9月11日（土）	千葉県教育会館		
千葉県	12名	1,446名	21校	17名
	応募作文の中から学校長及び団体長推薦作文について、一次、二次の作文審査を行い、選出された12名による千葉県大会を開催。最優秀賞（県知事賞）1名、優秀賞2名、審査員特別賞1名、奨励賞8名を選考。審査員9名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
13	東京都	令和3年度 中学生の主張東京都大会		
	令和3年9月12日（日）	東京都庁第一本庁舎大会議場		
東京都	10名	5,932名	57校	30名
	東京都による作文審査を行い、発表者10名及び奨励賞10名を選出。発表者10名による東京都大会を開催。最優秀賞（知事賞）1名、優秀賞（東京都教育委員会賞）2名、優良賞7名を選考。審査員6名			
14	神奈川県	中学生の主張 in かながわ		
	令和3年9月26日（日）	神奈川県立青少年センター スタジオ HIKARI		
神奈川県	7名	920名	36校	16名
	作文審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者7名、奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）受賞者10名を選出。発表大会出場者7名による神奈川県大会を開催。最優秀賞（神奈川県知事賞）1名、優秀賞6名（神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK横浜放送局長賞・tvk賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各1名）を選考。審査委員5名			
15	新潟県、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県青少年健全育成県民会議	令和3年度新潟県少年の主張大会～わたしの主張～		
	令和3年9月17日（金）～9月24日（金）	新潟県庁（動画審査）		
新潟県	14名	18,935名	158校	9名
	県内を13地区に分け、地区ごとに発表者を選出。各地区大会において選出された14名による新潟県大会を開催。最優秀賞（県知事賞）1名、優秀賞（県教育長賞）2名、奨励賞（県民会議会長賞）11名、奨励賞の中から審査員特別賞1名を選考。審査委員9名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
16	公益財団法人山梨県青少年協会、青少年育成山梨県民会議事業実行委員会	第43回少年の主張山梨県大会～わたしの主張2021～		
	令和3年8月21日（土）	青少年育成山梨県民会議事務局		
山梨県	8名	598名	16校	0名
	中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された8名による山梨県大会を開催。最優秀賞（山梨県教育長賞）1名、優秀賞（山梨日日新聞社賞・山梨放送賞・NHK甲府放送局長賞・テレビ山梨社長賞各1名）（青少年育成山梨県民会議会長賞3名）を選考。審査委員8名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
17	長野県、長野県教育委員会、長野県警察本部、長野県将来世代応援県民会議	令和3年度少年の主張長野県大会		
	令和3年9月17日（金）	長野県高校教育会館		
長野県	11名	994名	24校	10名
	各地域事務局長から推薦された11名（各地域事務局から1名、但し開催中学校がある市町村を所轄する事務局は、開催中学校推薦を含む2名）による長野県大会を開催。県知事賞1名、優秀賞2名、優良賞8名を選考。審査委員6名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
18	静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議	わたしの主張2021 静岡県大会		
	令和3年9月18日（土）（審査会のみ）	静岡県庁		
静岡県	12名	12,300名	150校	0名
	作文審査会により静岡・静岡西教育事務所管内から8名、静岡市、浜松市から各2名の計12名による静岡県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞8名。審査委員7名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			

中部・近畿ブロック（2府10県 応募者数 154,745名）

19	富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議	第43回少年の主張富山県大会		
	令和3年9月3日（金）～9月30日（木）（審査会9月15日）	富山県庁（WEB開催）		
富山県	11名	1,653名	23校	50名
	各中学校から3点程度推薦された作品を、各市町村教育委員会が10点程度に選考し推薦。推薦作品を審査委員会において作文審査し、選出された11名による富山県大会を開催。最優秀賞1名、審査員特別賞1名、優秀賞9名を選考。審査委員8名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
20	石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会	令和3年度少年の主張石川県大会		
	令和3年9月21日（火）	石川県健民運動推進本部		
石川県	16名	26,146名	68校	6名
	各地区大会から選出された16名（各地区4名ずつ）による石川県大会を開催。最優秀賞（石川県知事賞）1名、優秀賞（石川県教育委員会賞）2名、奨励賞（石川県健民運動推進本部長賞）13名を選考。審査委員6名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
21	公益財団法人青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部	令和3年度「少年の主張」コンクール福井県大会		
	令和3年8月18日（水）	福井県職員会館ビル		
福井県	8名	6,459名	38校	20名
	ブロック審査で選出された、8名による福井県大会を開催。福井県知事賞1名、（公財）青少年育成福井県民会議会長賞1名、国際ソロプチミスト福井会長賞1名、福井ライオンズクラブ賞1名、福井新聞社賞1名、NHK福井放送局賞1名、FBC賞1名、福井テレビ賞1名を選考。審査委員10名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
22	愛知県、愛知県青少年育成県民会議	令和3年度少年の主張 愛知県大会		
	令和3年8月20日（金）	東海市芸術劇場		
愛知県	14名	39,517名	262校	385名
	各中学校から1点ずつ推薦された作品を、各教育事務所等が学校数に応じて選定しブロックへ推薦。各ブロックから選出された計14名による愛知県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、共感賞1名、奨励賞14名を選考。審査委員7名			

23	公益財団法人三重こどもわかもの育成財団、松阪地区中学生のメッセージ実行委員会	中学生のメッセージ 2021 (第 43 回少年の主張三重県)		
	令和 3 年 9 月 3 日 (金) (書面審査)	国立大学法人三重大学 教育学部校舎 1 号館		
三重県	14 名	10,181 名	79 校	0 名
	1 次審査は提出された作品の中から 40 名程度を、2 次審査で「中学校のメッセージ」で発表する 14 名と地域優秀者 26 名程度を選考。選出された 14 名による三重県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 10 名を選考。審査委員 10 名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、書面審査。			
24	岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議	第 43 回少年の主張岐阜県大会 ~わたしの主張 2021 ~		
	令和 3 年 8 月 2 日 (月)	下呂交流会館 泉ホール		
岐阜県	17 名	13,192 名	166 校	233 名 (会場) + ライブ配信
	市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計 17 名による岐阜県大会を開催。県知事賞 1 名、青少年育成県民会議会長賞 1 名、県教育委員会賞 1 名、岐阜新聞・岐阜放送賞各 1 名、優秀賞 13 名を選考。審査委員 7 名			
25	滋賀県青少年育成県民会議	滋賀県第 24 回中学生広場「私の思い 2021」県広場		
	令和 3 年 8 月 28 日 (土)	滋賀県庁新館 7 階 大会議室		
滋賀県	12 名	25,432 名	100 校	17 名
	市町民会議から提出のあった意見作文の中から県広場での発表者 12 名による滋賀県大会を開催。最優秀賞 (知事賞) 1 名、優秀賞 (県議会議長、県教育長賞) 2 名、優良賞 (県民会議会長賞) 9 名を選考。審査委員 7 名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
26	公益社団法人京都府青少年育成協会、京都府 PTA 協議会、京都市 PTA 連絡協議会	第 43 回「少年の主張京都府大会」		
	令和 3 年 9 月 23 日 (木・祝)	本願寺間法会館「多目的ホール」		
京都府	16 名	5,385 名	34 校	88 名
	応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者 16 名による京都府大会を開催。京都府知事賞 1 名、京都府青少年育成協会会長賞 1 名、京都府教育委員会教育長賞 1 名、京都市教育長賞 1 名、京都市市町村教育委員会連合会会長賞 1 名、京都府公立中学校長会会長賞 1 名、京都府 PTA 協議会会長賞 1 名、京都市 PTA 連絡協議会会長賞 1 名、京都新聞賞 1 名、KBS 京都賞 1 名、京都府青少年育成協会会長奨励賞 6 名を選考。審査委員 9 名			
27	青少年育成大阪府民会議、大阪府	第 43 回中学生の主張大阪府大会~伝えよう!君のメッセージ~		
	令和 3 年 8 月 28 日 (土)	大阪府立男女共同参画・青少年センター (ドーンセンター)		
大阪府	10 名	1,210 名	19 校	53 名
	府内からの応募作品の中から選考委員による作文審査において 10 名以内による大阪府大会を開催。最優秀賞 (大阪府知事賞) 1 名、優秀賞 (大阪府教育委員会賞・NHK 大阪放送局長賞・国際ソロブチミスト大阪賞) 3 名、優良賞 (審査委員特別賞) 1 名、優良賞 5 名、佳作 (努力賞) 10 名以内を選考。審査委員 6 名			
28	公益財団法人兵庫県青少年本部	令和 3 年度少年の主張兵庫県大会~中学生のメッセージ 2021 ~		
	令和 3 年 9 月 25 日 (土)	兵庫県民会議 9 階 けんみんホール		
兵庫県	10 名	11,912 名	95 校	90 名
	県内 10 地区において原稿審査及び地方大会で選出された 10 名による兵庫県大会を開催。知事賞 1 名、青少年本部理事長優秀賞 2 名、青少年本部理事長奨励賞 7 名を選考。審査員 7 名			
29	奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会	第 43 回「少年の主張」奈良県大会~わたしの主張 2021 ~		
	令和 3 年 9 月 5 日 (日)	川上村 川上総合センター やまぶきホール		
奈良県	10 名	3,341 名	22 校	70 名
	作文審査により選出された 10 名による奈良県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査員 8 名			
30	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	「少年メッセージ 2021」和歌山県大会		
	令和 3 年 7 月 31 日 (土)	貴志川生涯学習センター (紀の川市)		
和歌山県	18 名	10,317 名	109 校	200 名
	応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された優秀作品各 2 名 (県大会開催地方は 4 名) 合計 18 名による和歌山県大会を開催。金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、特別賞 2 名を選考。審査委員 7 名			

中国・四国ブロック (9 県 応募者数 41,602 名)

31	青少年育成鳥取県民会議	令和 3 年度「第 4 3 回少年の主張鳥取県大会」		
	令和 3 年 9 月 15 日 (水)	とりぎん文化会館		
鳥取県	12 名	246 名	11 校	0 名
	応募作品の中から書類審査を行い、選出された 12 名による鳥取県大会を開催。最優秀賞 (鳥取県知事杯) 1 名、優秀賞 (県教育長杯、県議会議長杯、県市長会長杯、県町村会長杯、新日本海新聞社長杯) 5 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 6 名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
32	青少年育成島根県民会議・島根県中学校長会 (主管: 浜田市中学校長会)	令和 3 年度 少年の主張島根県大会 (動画審査会)		
	令和 3 年 9 月 28 日 (火)	島根県浜田教育センター、島根県人権啓発推進センター (2 会場)		
島根県	16 名	17,923 名	101 校	0 名
	各学校による 1 次選考後、県内を 13 ブロックに分けた地区大会にて選考され、地区中学校校長より推薦された 16 名による島根県大会を開催。島根県知事賞 1 名、島根県教育委員会教育長賞 1 名、島根県警察本部長賞 1 名、青少年育成島根県民会議会長賞 1 名、審査委員特別賞 2 名、優秀賞 10 名を選考。審査委員 7 名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
33	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議		
	令和 3 年 8 月 19 日 (木)	岡山県天神山文化プラザ		
岡山県	14 名	3,705 名	14 校	29 名
	応募作品から審査の上、15 名程度の入賞者による岡山県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、優良賞: 最優秀賞・優秀賞受賞者以外を選考。審査員 7 名			
34	公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟	「少年の主張」・中学生話し方大会 2021		
	令和 3 年 9 月 4 日 (土)	広島県社会福祉会館		
広島県	16 名	3,162 名	32 校	0 名
	提出された原稿を主催者において審査し、選考された 16 名による広島県大会を開催。広島県知事賞 1 名、(公社) 青少年育成広島県民会議会長賞 1 名、広島県中学校話し方連盟会長賞 1 名、国際ソロブチミスト広島会長賞 1 名、広島清流ライオンズクラブ会長賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 7 名、基準特別賞 1 名を選考。審査員 11 名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			

35	山口県青少年育成県民会議 令和3年9月5日(日)	少年の主張コンクール山口県大会(動画審査会)		
		山口県庁共用第2会議室		
山口県	8名	829名	14校	144名
	一次審査(各市町教育委員会等)及び二次審査(青少年育成県民会議)において作文審査により選出された8名による山口県大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞、県民会議会長賞)2名、優良賞5名を選考。審査員4名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、無観客の動画審査会。発表動画はYouTubeに限定公開。			
36	徳島県青少年育成徳島県民会議 徳島県保護司会連合会 徳島県中学校長会 令和3年9月8日(水)	第67回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会 令和3年度少年の主張徳島県大会		
		徳島県立21世紀館イベントホール		
徳島県	7名	5,015名	52校	0名
	中学校生徒弁論大会において保護区単位ブロック別で選出された代表7名による徳島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞第一席1名、優秀賞5名を選考。審査委員9名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、無観客開催。			
37	第71回“社会を明るくする運動”香川県推進委員会、青少年育成県民会議、香川県中学校長会、香川県保護司会連合会 令和3年7月7日(水)	第72回香川県中学校生徒弁論大会・第43回少年の主張香川県大会		
		穴吹学園ホール		
香川県	12名	9,392名	37校	115名
	地区大会の最優秀賞受賞者(高松地区は5名)12名による香川県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞8名を選考。審査委員7名			
38	愛媛県青少年育成協議会、愛媛県、愛媛県教育委員会 令和3年9月17日(金)(WEB最終審査会)	令和3年度「愛媛の未来をひらく少年の主張大会」		
		愛媛県庁		
愛媛県	10名	994名	9校	0名
	主催者において、原稿審査により大会発表者10名による愛媛県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員5名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
39	青少年育成高知県民会議 令和3年9月5日(日)	令和3年度第43回「少年の主張」高知県大会		
		動画審査のため、会場使用なし		
高知県	10名	336名	9校	5名
	作文審査により選出された10名による高知県大会を開催。最優秀賞1名、会長賞1名、優秀賞2名、優良賞6名を選考。審査委員5名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			

九州ブロック(8県 応募者数 25,419名)

40	福岡県公益社団法人福岡県青少年育成県民会議 令和3年8月30日(月)~9月5日(日)	令和3年度少年の主張福岡県大会(動画審査)		
		審査委員職場又は自宅		
福岡県	18名	208名	53校	10名
	各学校からの応募作品、「少年の主張」関連行事で選出された作品及び地区大会推薦3作品について審査のうえ上位18名による福岡県大会を開催。福岡県知事賞1名、福岡県教育委員会賞1名、優秀賞第一席1名、審査委員会特別賞1名、その他の優秀賞を選考。審査委員10名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。			
41	佐賀県 佐賀県教育委員会 佐賀県青少年育成県民会議 令和3年8月29日(日)	令和3年度「第43回少年の主張佐賀県大会」		
		アバンセホール(佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター)		
佐賀県	10名	302名	14校	87名
	各学校において応募者を募集し、推薦されたものを予選審査会により選出、選出者10名による佐賀県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員6名			
42	長崎県青少年育成県民会議 令和3年9月17日(金)	第43回(令和3年度)少年の主張長崎県大会		
		長崎県教育会館3階		
長崎県	13名	9,600名	122校	-名
	第1次選考は、各市町主管課で、県立・国立・私立の学校について本県民会議で行い、第2次選考は本県民会議が委嘱した審査委員が行い、選出された13名による長崎県大会を開催。最優秀賞(青少年育成県民会議賞)1名、優秀賞(長崎新聞社賞、NHK賞、長崎県校長会賞、長崎県PTA連合会賞、ココロねっこ賞)5名、優良賞7名を選考。審査委員6名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。 *発表者のDVDを作成し、受賞者所属校・市町教育委員会等に配布。また、各関係団体等には期間限定にてネット配信。主催事業にて視聴。			
43	熊本県、熊本県教育委員会、熊本県青少年育成県民会議 令和3年9月4日(土)	第43回「少年の主張」熊本県大会		
		八代市公民館		
熊本県	12名	1,101名	38校	55名
	事前審査会での作文審査により選出された各地区等代表の10名、開催地推薦2名の計12名による熊本県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、奨励賞3名及び入選6名を選考。審査委員6名			
44	大分県青少年育成県民会議 令和3年8月20日(金)	令和3年度(第43回)少年の主張大分県大会		
		中津文化会館		
大分県	10名	2,297名	30校	50名
	各学校等による1次審査、審査員による2次審査により選出された10名による大分県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名、特別賞(大分県教育長賞1名、共感賞1名)を選考。審査委員5名			
45	宮崎県公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議 令和3年8月3日(火)	令和3年度「青少年の主張」宮崎県大会		
		宮崎市民プラザ オールブライトホール		
宮崎県	10名	912名	17校	88名
	各学校から応募された作品の中から、事前審査により選出された10名による宮崎県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員5名			
46	鹿児島県青少年育成県民会議 令和3年8月8日(日)	令和3年度「第43回少年の主張鹿児島県大会」		
		鹿児島県青少年会館 大ホール		
鹿児島県	10名	3,275名	45校	80名
	各学校から提出された作文を審査、審査委員会により選出された10名による鹿児島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員5名			
47	沖縄県公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議 令和3年9月29日(水)	第43回沖縄県「少年の主張大会」		
		(公社)沖縄県青少年育成県民会議 会議室よりZoom配信		
沖縄県	12名	7,724名	119校	225名
	市町村大会、校内推薦を経て選出された9~12名の代表で、原稿もしくは映像審査による地区大会(6地区)を開催する。地区大会により選出された12名による沖縄県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、審査員特別賞1名、優良賞8名を選考。審査委員6名 *新型コロナウイルス感染症の影響により、WEB開催。			

第 44 回少年の主張全国大会 開催のお知らせ

- 開催日時：令和 4 年 11 月中旬
- 開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
(住所：〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号)
- 対 象：日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
- 主 催：国立青少年教育振興機構
- 協 力：都道府県、青少年育成道府県民会議、全日本中学校長会、
(予 定) 日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会、
全国青少年育成県民会議連合会
- 後 援：内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、
(予 定) 一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会
- 主張発表者（出場者）・発表内容：
 - (1) 主張発表者
各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。
 - (2) ブロック代表定数
全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。
 - 北海道・東北ブロック・・・2 名
 - 関東・甲信越静ブロック・・・3 名
 - 中部・近畿ブロック・・・3 名
 - 中国・四国ブロック・・・2 名
 - 九州ブロック・・・2 名
- ※ 新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて、開催方法を変更させていただく場合があります。
- ※ 都道府県大会の詳細につきましては、各主催者にお問い合わせ願います。

第 43 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2021 ～

令和 4 年 1 月発行

編集 国立青少年教育振興機構

〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

<https://www.niye.go.jp>

担当 教育事業部事業課

電話 : 03-6407-7683 FAX : 03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

体験の風を
おこそう